

官能のプリマ

ヴァージョンIV

卒業

アカマル

目次

1. 命門学院	1
2. オートバイ	10
3. 演技者の記憶	32
4. 看護人の手腕	42
5. 初舞台に上がれ	49
6. 祐子の見聞録	65
7. 煉瓦蔵の裏で	78
8. 改めての招待	92
9. 五年遅れの卒業	99
10. みんな闇の中	107

1 命門学院

市は、三方を山が塞いでいた。

開かれた南には関東平野が広がっていたが、その入り口を握するように水瀬川が滔々と流れている。上流にある、かつて鉱山で栄えた町の山脈に源流を発する大河だった。

辛うじて北に延びた谷だけが、水瀬川に注ぎ込む渓流沿いに延々と三十キロメートルほど続き、山脈に突き当たって絶えていた。

一言でいって谷間の街だ。都会までは、鉄道で一時間二十分。自動車で行けば、高速公路を使っても約二時間の距離だった。

決して交通の便の良いところではない。水瀬川を遡航する船便が絶えてからは、他市に秀でた交通網は持たない。その水運が栄えたのも、百年以上も前の話だ。

農地の少ないこの地方は、水運による鉱石の出荷と、この市で製造する絹織物の販売で栄えてきた。

特に、千二百年の伝統を豪語する絹織物は、幕末から明治期にかけて工場制手工業として飛躍的に発展した。

機を織るのは、主に女性だった。その織姫と呼ばれた女工たちを管理するのもまた、女性だった。男たちは、独特の文化と呼ばれるようになる趣味道楽に、湯水のように金を使うばかりだった。

生産実務者としての女性は、多忙を極めることになる。機業の管理運営に関する教育が求められたのも、当然の話だった。幕末期から私塾で学ぶ女性が多く、官制の学校も女子学校が一番先に設置された。

女性の献身的な労働と、学識が街の発展を支えて来たといつても過言ではない。この女性教育の一翼を担い、機業家の婦女子に読み書きや算盤を教えた私塾を基盤に、昭和初期に設立されたのが命門学院だった。

現在の命門学院は、幼稚園から大学まで網羅した、地方教育界の雄として名聲を誇っていた。女子大学部は水瀬川を越えた広々とした平地に移転して久しかったが、男女共学の高等部まではまだ、この谷間の街の山際に点在していた。特に中等部と高等部は、都会の名門大学に数多くの合格者を出す進学校として名が高かった。建学の精神とは離れ、受験戦争を勝ち抜いていくことを目的にした学校経営だったが、厳選した生徒の質を誇ってい

た。

鉱山の町の廃校となる分校で小学校を卒業し、中学進学を機に両親と共に市に転入してきた祐子は、命門学院中等部の三年生になっていた。この市での生活も、もう三年目になる。

祐子は、水道山の麓にある中等部の裏門から校外に出た。

真っ直ぐ、山を越えるアスファルト道路を歩いて行く。いつもは正門を利用し、街の北にある自宅のマンションに向かう。裏門から山に続くこの道は、なだらかな山頂にある配水場の横を通り、街の西側へと続いていた。ちょうど、街を半周してから自宅に帰ることになる。長い道のりだった。

どんよりと曇った六月の空から、いましも雨が落ちてくるような気がする。

祐子は、うんざりした顔で立ち止まり、白い長袖のセーラーの胸元を飾る赤いスカーフを、心持ち緩めた。梅雨寒の冷気が豊かな乳房に触れた気がして、細い肩をすくめる。

身長百六十センチメートルの背を少し屈み気味にして、また歩き始めた。

祐子は、背が高いことと、彫りの深い大人びた顔が、目立ちすぎて嫌いだった。特に、同じ制服を着た少女たちの中では周囲の注目を集めた。早く制服のない高等部に進学したかったが、まだ一年近く先のことだ。祐子には一日でさえ、十分長く感じられる。

急な坂を越えると、なだらかな道の先に美術館が見えてくる。確かに、性と死を描いた作品だけを集めた企画展が始まっているはずだった。人目を引くようなポスターが張り出されているわけでもないのに、むず痒い不潔感が喉元にこみ上げてくる。そっと息を吐くと、言い知れぬもどかしさで全身が震えた。時の流れが遅すぎるのだと思う。

鬱屈した気持ちに任せ、路上の小石を力いっぱい蹴った。乾いた音を立てて転がっていた小石は、美術館の前で止まった。

駐車場から凄い速度で出て来た赤い車が、その小石をタイヤで跳ね上げる。低いエンジン音が、山裾の雑木林に響き渡った。

直進して来た車が急ブレーキをかけ、祐子の横に運転席が並んだ。

「祐子じゃない。久しぶりね」

オープンにした真っ赤なMG・Fから、明るく女性の声が響いた。心持ち小首を傾げた懐かしい笑顔を運転席に認め、即座に祐子の表情が輝く。

「Mはいつも素敵ね。車を替えたの」

「三年生になつたらお世辞が上手くなつたわね。この車は借り物よ」

アイボリーのスーツ姿のMが、長い髪を風に揺らせながら楽しそうに応えた。

「どこへ行くの。家と反対じゃない。美術館に来たの」

「山の下の老人ホームに行くんです」

「そう、送っていくわ」

Mは一瞬美しい眉を寄せ、怪訝そうな顔をした。そのままMG・Fをスタートさせ、五メートル先で見事なスピントーンを決めて戻って来る。

「さあ、乗りなさい」

祐子が乗り込むと直ぐ、車はスタートした。しかし、いつものMに似ず、急な加速をしない。路上に張り出した緑濃い枝の下を、ゆっくりと坂を登って行く。

「老人ホームに何の用があるの」

少し走ってからMが訊いた。

「鉱山の町の弦楽五重奏団を覚えてますか」

「もちろん覚えているわ。あなた達と裸になって御神輿を担いだとき、モーツァルトを演奏してくれたよね。あの時の痩せっぽちの裸んぼが、こんなに魅力的な女になっちゃうんだから、私も年寄りの仲間入りかな」

祐子の頬が赤く染まった。

「あの時の第一ヴァイオリンのお婆さんが、老人ホームで病気になったんです。町役場の村木さんが手紙で父に知らせてくれたんだけど、父はこのところずっと都会暮らしで帰ってこられないの。週末は母も父の所に行くから、私が代わりにお見舞いに行くんです。Mの所へは連絡がなかったのね」

「そう。中央官僚のお父さんを持つと大変だね。私はしばらく家に帰ってないから、手紙が来ても読めないのよね」

祐子は首を曲げて、Mの横顔をまじまじと見てしまった。

「あんまり見つめないで。私はいつもと同じよ」

確かにMの言う通りだと祐子は思った。Mは、自分の暮らし方はいつも自分で決めるのだ。羨ましさが、胸をよぎった。

「Mは変わらないのね」

「どうしたの、しんみりした声を出して。私だって変わっていくわ。きっと祐子の時間が目まぐるしく過ぎて行くから、私の変化に気付かないだけよ。その証拠に、祐子は凄く美

しくなったよ。これからもどんどん変わっていった方がいい。姿だけでなく、考え方や、感じ方も。止まってしまうと、その若さで腐ってしまうよ」

「ええ、私は変わっていくみたい。みんな遠くなってしまっててしまう」

「寂しそうな声を出さないの。懐かしく思いさえすればいいことよ。修太はどうしているだろうね」

「知らないわ」

「同じ中等部の光男には、毎日会うでしょう」

「顔を見掛けるだけだわ」

「そう。話に乗ってこないのね。三年前の夏、六年生の裸んぼの時、光男は祐子のことを好きだったのよ。少女になり掛けの裸を、眩しそうに見ていたわ。知ってた」

「知っていたわ。でも、あのころの話はしたくないの。話されるのも嫌。もう、ずっと遠い昔のことのような気がする」

「あなたが何に反発するのか知らないけど、過去のことを悔やむのはとても悲しいことよ。今の祐子は、あの時よりずっと美しくなっているのだから、それを用意してくれた過去も好きになれるといいね」

「私は美しくなんかない」

突然の大声が、Mの耳を打った。

変わらないのは祐子の方だとMは思う。知識や意識、認識する能力など、自分自身をコントロールする力が、身体の成長に追いついていけない不器用な少女が助けを呼んだのだ。急に、まだ少女になり掛けだった、小学校六年生の祐子を懐かしく思い出した。瑞々しい裸身に、萌えだしたばかりの陰毛がとてもいじらしかった。あの時と比べ、ほとんど変わっていないとさえ思えてしまう。胸の奥がキュッと熱くなった。まるで、祐子の保護者になった気分だ。

Mは大声を無視して、祐子のスカートの下に左手を素早く伸ばした。ほんのりと湿り気を持った若い肌が、手のひらにぴったりと張り付いてくる。

「アッ」と小さく上げた声にお構いなく、手を股間へと伸ばす。祐子の両腿が固く合わせられる。強引にショーツの下に潜り込ませた指先に、髪の剃り跡を撫でる感触が伝わる。反射的に横を向き、祐子の横顔を見つめた。真っ赤に染まった頬が微かに震えている。

MG・Fのノーズが左右に振れた。思い切ってブレーキを踏む。アンチロックブレーキの制動力が四輪をコントロールし、車は路肩に沿って危なげなく止まった。

ぽつぽつと降り始めた雨が、上気した二人の頬に落ちた。

「祐子、ショーツを脱ぎなさい」

股間に手を入れたままMが命じた。

「いや。恥ずかしい」

消え入りそうな声で、うつむいたまま祐子が言った。

「何も恥ずかしいものなど無いわ」

鋭く言ってMは、右手で自分のアイボリーのスカートを乱暴にまくり上げた。腰をズラして、股間を剥き出しにしたままスカートを止めた。いつものようにショーツは穿いていない。両足を広げ、黒々とした陰毛を細かい雨に打たせた。熱くなった性器に冷たい雨滴が当たった。

「さあ、祐子も脱ぎなさい」

促された祐子が腰を上げて、渋々ショーツを下ろした。

陰毛を剃り上げられた股間に小さな水玉が幾つもできていく。可愛らしい割れ目から、小さな性器がピンク色の顔を覗かせていました。

「自分で剃ったの」

「そうよ」

「どうして」

訊いてみてからMは、問い合わせに虚しさに思い当たった。

「三年前の夏。鉱山の町に来たMと同じようになりたかったのよ。勇気が湧くから。Mが楽にして上げたカンナのことを忘れてたくないから。私が殺した産廃屋のことも忘れたくないから」

あの夏の出来事が、凄まじい速さでMの脳裏を駆け巡った。カンナに剃り落とされた頭髪と陰毛の感触が、一番はっきりとした記憶となって甦る。その、つるつるの股間を吸って窒息死したカンナの安らかな死に顔が、悲しく思い出された。

祐子はまだ、あの時の影を引きずったまま生きていたのだ。祐子への愛おしさが募る。

これまで、何回となく祐子と会っていたが、話らしい話をしてこなかったことが悔やまれてならなかった。

「友達はいるの」

また陳腐なことを訊いたと思ったが、祐子ははっきり首を横に振った。

「独りぼっちなんだね」

最悪の言葉に、自分自身腹を立て、祐子の股間に置いた手で無毛の陰部を優しく撫で回した。

「先輩がいるの」

ぼつりと祐子がつぶやいた。

「高校の先輩なの。だから、高校に進学してから先輩になるんだけど、今から先輩だって思ってるの」

訳の分からない言葉だったが、明るい声のトーンが救いになった。

祐子の言う先輩とは、ひょっとして男ではないかと思ったが、聞きただすことができなかつた。

Mは、胸の底に沈んだ疑問を無視してアクセルを踏んだ。最後の急坂を一気に上り、MG・Fは水道山の頂まで登り詰めた。青々とした芝生の広がる配水場の入り口に、洋風建築を模して大正期に建てられたという水道記念館が、瀟洒な姿を見せている。

雨はやみそうもなかつた。

「トップを掛けるわ」

記念館の前で車を止めたMは、祐子に声を掛け、座席の後ろに折り畳んだ黒い幌を引き上げた。広々と野外と通じ合っていた車内が、途端に狭苦しい空間に変わる。二人の女が体温と共にあげる温気がむんむんと匂い立つた。

鬱陶しさに首を振って、Mはエアコンのスイッチを入れ、力強くアクセルを踏み込み、長い下り坂をスピードを上げて下った。

急坂を降りきったところで右に曲がると、老人ホームに通じる道に出る。鬱蒼とした木々の影に見え隠れする、病院のような白いコンクリートの建物を見ながら走ると、特別養護老人ホームと記した門柱が現れた。

随所に植栽した広場の先に、広い車寄せを張り出した玄関があつた。

車窓越しに見る玄関は静まり返つてゐる。ドアボーイが出払ってしまったリゾートホテルの玄関ホールのようだ。左側の車寄せにMG・Fを止めたMは、先ず黒い幌を置んだ。
「息苦しかつたわね。二人乗ると雨が恨めしくなるわ」

開放感に満ちたMの声を、けたたましいエンジン音がかき消す。

門柱の脇を車体を斜めにして回り込んだ大型のオートバイが、右側の車寄せで急ブレーキをかけて止まつた。

カワサキの400CCに跨った男は、赤いフルフェースのヘルメットを被っていた。紺のジャンパーの襟元から、白いシャツと臍脂のネクタイが覗いている。オートバイと不釣り合いな服装だった。

Mは躊躇みするように男の姿を見てからドアを開け、車を降りた。もの珍しそうに建物を観察しながら、玄関の自動ドアの前まで来る。

「面会ですか」

背後から明るい声が呼び掛けた。振り返ると、オートバイから降りた男がヘルメットで乱れた髪を手で搔き撫でながら近付いて来る。

「やあ後輩、俺も中等部から命門学院に行ったんだ」

馴れ馴れしく祐子に話し掛ける。

百八十センチメートルほどはある、しなやかな身体の上で、物怖じしない機敏そうな若い顔が笑っている。

「随分時代が変わったもんだ。俺が中等部にいたときは、後輩みたいに可愛い子は二人といなかつたもんだよ」

「一人は、いたってこと」

顔を伏せてしまった祐子の代わりにMが、青年の熱く燃える目を見据えて応えた。

「失礼しました。あまりに制服が懐かしかったので、勝手に話し掛けてしまいました。ごめんなさい」

いたずらを見咎められた子供のように、顔を赤くした青年が深々と頭を下げた。

「私はこういうものです。よろしければホームをご案内します」

差し出された名刺から、青年は天田といい、この市の福祉事務所のケースワーカーだということが知れた。

「私は夕刊ポストの記者のM。ぜひ、案内してください。でも、その前に今の質問に答えてください」

Mが笑顔を見せて応えた。日刊の地方紙の嘱託でも記者には違ひなかった。

「新聞記者だったんですか。弱ったなあ。でも俺が悪いのだから答えますよ。中等部にいたころ、妹さんそっくりの美人が一人だけいました」

「好きだったの」

「もちろんです」

祐子の姉にされてしまったことをくすぐったく感じながら、Mは久しぶりに愉快な会話

を笑顔で楽しんだ。

都会での学生生活を四年間送り、就職で市に帰って来たというフレッシュマンに、Mは鉱山の町の第一ヴァイオリンの老女の名を告げた。

「あの身寄りのないお婆さんの知り合いなんですか。あの人は俺が担当しているんです。鉱山の町からの依頼で、このホームへの入所を決めました。初仕事だったんですよ。それが、病状が思わしくないというので、休日に呼び出されました。ご一緒しましょう」

天田は先に立って、勝手知ったホームに二人を案内する。先ほどまでの軽い乗りの青年の姿が消え、堂々とした福祉専門職に見えることが祐子には不思議だった。たとえ駆け出しでも、職が自信と責任感を与えるのだろうかと、まだ経験したことのない職業への憧れと不安が顔を覗かせる。

南に開いた長い廊下を渡り、右に折れて北向きに張り出した棟に向かう。ホームの中は静まり返ったままで、行き交う人もない。いわれもなく不安が高まり、三人の足が早まる。

奥まった室のドアが開け放されているのが見えた。

急ぎ足でドアの前まで行くと、白衣姿の女性が出て来て天田の顔を見つめた。「様態が急変しました。もう危篤状態です」と告げる。

声と同時に三人の顔がこわばった。天田を先頭に静かに室に入る。

大きなベッドが室内の大部分を占めていた。三人で周りからベッドを取り囲み、横たわった小さな老女を見下ろす。室内には他に誰もいない。

老女は寝入ったまま身動きもしない。微かに上下する皺だらけの細い喉が、彼女の命を弱々しく主張していた。

「おばあちゃん」と、天田が呼び掛けても何の反応もない。微かな呼吸だけが不規則に続いている。

枕元に立った祐子が見下ろす老女は、まるで見覚えのない人だった。三年前の夏、元山神社の境内で、白髪を日に煌めかせてヴァイオリンを操っていた同じ老女とはとても思えなかった。

祐子の記憶にない、目を閉じた小さな顔は、今、萎んでしまった風船のようにユーモラスでグロテスクに見えた。微かに聞こえる息の音が不快だった。豊かだったはずの銀色の髪も三年の間に疎らになり、張りを失った頭皮が所々に露出していた。褐色に見えるくすんだ色の皮膚の上に、黒々とした染みが随所に浮かんでいる。

祐子は、老女の醜さがやり切れなかった。人はなぜ、こんな姿になってからも生きるのだろうと思ってしまう。腐ったタマネギの匂いのような、陰惨な臭気さえ漂ってくる。悲惨だった。

目を伏せてしまいたくなつたとき、唐突に老女の目が開いた。不規則な息の音が一層高まる。

見開かれた老女の目は、祐子の目を見つめていた。黒く、漆黒の闇となった二つの目が祐子を見つめる。しかし、その目は何も訴えはしなかった。何の感情もなかった。無と化した両眼が、ただひたすらに祐子の視線を吸い込んでいく。

ホームに来るまでの自分の記憶が靄の中に霞んでいる。これまでわだかまっていた一切の思いが搔き消え、遠く遠く、暗黒の彼方へと吸い込まれていく。逆立ちになって闇の中を浮遊しているような、恍惚とした気分が祐子の下半身を満たした。濃密で豪奢な闇に全身が溶け込む。

「もっと、もっと」と、心の深奥でやるせないまでに無と化した闇を求めた。

濡れた股間から冷たい感情が立ち上がり、ゆっくりと身体を這い上がってくる。たまらず身悶えすると、剃り上げて一週間経った陰毛の先が、内股を鋭く突いた。陰毛の刺激で我に返る直前、喜びに震える老女の喘ぎを、祐子は確かに耳の底で聴いたと思った。

老女の不規則な呼吸がひときわ高まり、ヒーと長く尾を引いた。黒々と大きく見開いていた目が、見る見るうちに濁っていく。

あの暗黒の瞳は幻だったのかと、祐子は思った。食卓に上る鰯の干物のように、白茶けた目が眼下にあった。

「看護婦さん」と叫ぶ、天田の大声がすぐ近くで響いた。

「ご臨終です」

駆け付けた医師が老女の瞳孔にミニライトの光を当ててから言い、そっと瞼を下ろした。さっと看護婦が白布を広げ、老女の顔を覆った。

それで終わりだった。

消え入りそうに小さな遺骸に全員で頭を下げ、死との出会いに打ちひしがれて室を後にした。

老女の死後の手続きをする天田を残し、Mと祐子は老人ホームを後にして街に向かった。雨は上がっていた。

夕闇の迫った道を、オープンにしたMG・Fが市街地へとスピードを上げる。思ったより長い時間を老人ホームで過ごしたのだ。

二人とも口を利かず、黙ってエンジンの音に身を任せていた。

週末で渋滞した市街地に入り、メインストリートの織姫通りと合流する信号で、Mは右折レーンに車を入れた。祐子の住むマンションと反対の方角だった。

「お茶を飲んでいこうよ。疲れてしまった」

「長い時間付き合わせてしまって、ごめんなさい。仕事は大丈夫なの」

「うちの新聞は日曜日が休刊だから、急いで記事を書く必要はないのよ。美術館の企画展の紹介は来週でいいの。ゆっくりお茶を飲みましょう」

「でも、私は制服のままだし、あまり気が進まないわ」

「命門学院の生徒だって、保護者同伴なら構わないはずよ。ぜひ、付き合って欲しいの」

「いいわ」

Mが強引なのは今に始まったことではない。祐子は、無理に明るい声を出して同意した。

信号の変わり目を捉えて機敏に右折したMG・Fはすぐ、通りを左折し、一方通行の狭い歓楽街に入って行った。

点り始めたネオンや看板灯が、原色の光を道の両側から投げ掛けてくる。今にも降り出しかと思える、陰気な天気に祟られた人出のない道を、スピードを上げて走った。

看板灯が疎らになったところで徐行して、Mがぱつりとつぶやく。

「祐子が私服なら、この店がいいんだけどね」

赤と黒を斜めに染め分けた鮮やかな看板灯の黒地の部分に、カタカナで「サロン・ペイ

ン」と記されてあった。

「あの赤と黒は、昔のスペインのアナキストたちの旗なの。今日みたいなブルーな気分にぴったりのお店なのよ。思いっきりドライにしたマティーニが美味しいの。祐子は私服なら十分大人に見えるから、一緒に呑んでみたくなるね。でも、今日は山根川の畔の喫茶店に行こう」

思い切りアクセルを踏み締めると、一瞬背中がシートに張り付き、タイヤを鳴らして加速した。

祐子は、老女の死を見つめたMの気持ちを思いやってしまう。

大きな窓の外に闇が広がっている。闇の底を流れる山根川の水音は店内までは聞こえてこない。

祐子は正面に座ったMの目を見つめてからコーヒーカップに口を付けた。苦い味がふくいくとした香りと共に口一杯に広がる。老人ホームで嗅いだ腐ったタマネギの匂いがフッと、脳裏に浮かんだ。

「砂糖もミルクも入れないのね。それも私の真似」

話し掛けるMを無視して、祐子は直截に疑問を投げ付けていた。

「第一ヴァイオリンのお婆さんが亡くなったのに、なぜ、誰も涙を流さなかったのかしら。会ってすぐ死んでしまったのに。ねえM、どうしてなのかしら」

「祐子はどうして泣かなかったの」

「私は悲しくなかったの。正直に言うと、死ぬ前のお婆さんは醜く見えたわ。死んで醜さから開放されたとさえ思ったの。そんな自分の気持ちの方が悲しかった。残酷なことよね。本当に悲しい」

「きっと、祐子の気持ちが自然なのよ。お婆さんは死が迎えに来るのを待っていたのよ。いわば自然死。誰しも死から免れないのだから、お婆さんの死は極めて自然な出来事なの。お婆さんはそれを受容していたし、そのことを私たちも認識していた。人が生まれ、年を取り、寿命が来て死ぬ。当たり前のことに涙を流すことはないわ」

「でも、私は今悲しい」

「それは、お婆さんの死が悲しいのではなく、あなたの記憶が悲しみを呼んでいるのよ。あの夏の日の記憶が、あの時の第一ヴァイオリンを甦らせて惜しんでいるの。決してお婆さんの死が悲しいわけではないわ。あなたがさっき言ったように、お婆さんは死によって一切から開放されたのだから」

「そうかしら」

「あなたがさっき、はっきりと言ったのよ」

「私は分からなくなったの。また一人の死を見てしまったわ。多くの死があって、私の死もあるのね」

「祐子。訳の分からぬ観念をもてあそばない方がいいわ。死は誰しも免れないって言ったでしょう。でも、人の生き方にはたくさんの選択があるわ。死のことなど考えずに、あなたは生きることを考えなさい」

下を向いたまま祐子は、考えに浸っている風情だった。何の得にもならないとMは思う。かえって危険な兆候にも思われた。三年前の祐子は自閉症だったのだ。もう自らを閉ざさないとは、誰にも断言できることでなかった。

「私がまた、自閉症になると思う」

Mの気持ちを見透かしたように、祐子が顔を上げて言った。

「思わないわ。もう帰りましょう。両親が留守だからといって、帰りが遅くなるのは良くないわ」

レシートを持って立ち上がったMは、祐子を振り返らずにレジに向かった。

オープンにしたMG・Fは歓楽街を迂回し、織姫通りを右折すると、真っ直ぐ北へ上って行った。繁華街を通り越して三つ目の信号を越えると、通りの左手に六階建でのマンションがあった。向かい側は明治期に立てられた巨大な煉瓦蔵だった。造り酒屋が酒蔵にしていた煉瓦造りの蔵が去年改修され、イベントホールとして活用されていた。

MG・Fがマンション一階の駐車場の前に止まった。

路上に降り立った祐子の方を向いて、Mが静かに声を掛ける。

「お休み、祐子。つまらないことを考えずに早く寝なさい」

「お休みなさい。M、また会ってね」

「もちろんよ」

大声で答えてMは車をスタートさせた。バックミラーに映った祐子に、車椅子に乗った男が近付いて来る。Mはアクセルから足を放し、バックミラーをじっと見つめた。

バックミラーの中で、見送る祐子の顔が見る間に当惑する。急に車のスピードが落ちたことを訝しく思ったに違いなかった。祐子を前にすると、決まって保護者振りたくなってしまう。

Mは苦笑して頭を左右に振り、思い切ってアクセルを踏んだ。瞬く間にバックミラーの中の祐子が小さくなって、消えた。

「遅かったね祐子」

Mを見送っていた祐子の背後から、掠れた声が呼び掛けた。

「今晚はバイク。ちょっと寄り道しちゃったのよ。待っていてくれたの」

振り向いた祐子が、マンションの駐車場の影から出て来た車椅子の青年に答えた。

「いや、待っていたわけじゃがない。煙草を買いに出たところさ。今日はもう、散歩は無理だね」

祐子は車椅子に近寄り、しゃがみ込んでバイクの顔を見上げた。立ち上がれば百八十七センチメートルほどはありそうな立派な体躯が、窮屈そうに車椅子に収まっている。白い作業ズボンの上にグリーンのトレーナーを着ていた。トレーナーの上の顔が、いらだたしそうに小刻みに左右に震えている。

たまたま行き会わせたという、バイクの言葉は嘘だと直感した。きっと四時頃から、ライラしながら祐子を待っていたに違ひなかった。土曜日の夕刻はいつも、バイクの車椅子を押して、一時間ほどの散歩に出掛けるのが習慣になっていた。

「このまま散歩に行ってもいいのよ」

「いいよ。疲れた顔をしているし、制服を着ている。早く高等部に行けよ。俺は私服の祐子が好きなんだ」

「着替えてくるわよ。でも、私の顔付きを気にしたり、高等部への進学を勧めたりするのはよして」

「俺は散歩はいいと言っている。今の祐子より、成長した祐子の素晴らしいを思い描くのは俺の勝手だ」

「私は、今の私を見てもらいたいの」

「いや、人は成長するんだよ。高等部に進学した祐子はもっと素敵になっているよ。成長しないのは俺だけでいいんだ」

「バイクは不当に自分を卑下しているわ。身体に障害があるからといって、心まで傷つけるのは良くないわ」

「聞いた風な説教をするのは十年早い。もっと勉強するんだな」

「私なんて勉強したって、たかが知れているわ。高等部で東大合格間違いなしと言われたバイクとは格が違うわ」

見る見るうちにバイクの口元が歪み、顔全体が震えた。

「誰に聞いた」

憎々しい声で喘ぐように言う。微かに酒の匂いがした。

「また呑んでいるのね。誰だって知っていることよ。でも、あなたを傷つける気で言ったのではないわ。もっとプライドを持ったバイクでいてもらいたいの」

「分かった、興奮するほどのことではないな。俺はプライドを失ったわけじゃない。人一倍プライドが高いから持て余しているだけさ。祐子を待ちくたびれて苛ついただけかもしれない」

やっと正直に言ったバイクの目を覗き込み、祐子は「ごめんなさい」と小さく言った。厳しく見開かれたバイクの目元が緩み、笑みがこぼれた。

ほっとして祐子が立ち上がりろうとしたとき、肌寒い夜気を裂いて、けたたましいエンジン音が響いた。すぐ横の車道でタイヤの軋む音が轟く。

「バイク、また女狂いか。捜し回ったんだぞ」

カワサキの400CCに跨ったケースワーカーの天田が、真っ赤なフルフェイスのヘルメットの中で叫んだ。

「後輩、また会ったね」

立ち上がった祐子に天田が声を掛けた。

黙ったまま小さく頭を下げた祐子に、天田がヘルメットを脱ぎながら言葉を続けた。

「後輩とバイクは知り合いだったのか。俺はバイクとは高等部の同級生なんだ。でも、こいつは後輩の先輩じゃないよ。高等部から命門に来たんだ。昔から美人には手が早いから用心した方がいい」

ほころんでいたバイクの顔が、天田の出現でまた厳しく引き締められた。

「天田。俺に用があるのなら早く済ませてくれ。俺はお前に用などない」

「五年振りに会ったというのに、たいそうなご挨拶だな。この後輩とは、さっき別れてきたばかりなんだ。俺だって美少女と口をきく権利はある。今度はまだ、お前に奪われてしまつたわけじゃないからな」

バイクの顔が真っ赤に染まるのが、夜目にもはっきり分かった。

「わざわざ五年前の恨みを言いに来たのか」

「そういうわけだ。懐かしいだろう。あの時と同じカワサキの400だぜ。バイク好きのお前には堪えられないよな」

誇らしくオートバイを搖すると、大きなタンクの中でガソリンの揺れる音が響いた。微妙にオイルの匂いが流れる。

「後輩は、老人ホームの玄関で俺が姉さんに話した、美人の同級生のこと覚えてるか

い。後輩と瓜二つの、中等部のセーラーがよく似合う可愛い子のことさ。そのアイドルを
こいつが殺したんだ」

天田の言葉が終わらないうちに、車椅子の車輪が軋むかん高い音が響き、行き交う車両
の列にバイクが車椅子を乗り入れた。無謀に通りを横断しようとする。クラクションの音
が交錯し、急ブレーキでタイヤの焼ける匂いが鼻孔を打った。

バイクは上半身を前傾させ、しゃにむに車椅子を進める。

「逃げるのか。誰だって知ってるこことじゃないか。まだ話があるんだ」

オートバイから飛び降りた天田が、車道の端まで出て大声を出す。既に通りを渡り切っ
てしまつたバイクは、車椅子の速度も緩めず煉瓦蔵の横の路地へと入つて行く。

「逃がしやしないぞ」

バイクの背に叫んだ天田が、車の間を縫つて通りを横断する。けたたましいクラクショ
ンの音がまた、通りに溢れた。

命門学院の二人の先輩に取り残されてしまった祐子は、マンションのエレベーターホー
ルへと向かった。背中に背負つた黒いリュックがやけに重い。

ちょうど待つていたエレベーターに乗り込み六階のボタンを押す。静かに上つていく方
形の空間の中で、祐子は慌ただしかつた午後を思い返した。

老女の死やMとの会話、オートバイに跨つたケースワーカー。

しかし、最後に聞いた、バイクが殺したという少女のことが一番気に掛かっていた。

エレベーターを降りて、明るい通路を突き当たりの部屋へと向かう。木組みのフローリ
ングの上で、靴音が低く響いた。

リュックを下ろして鍵を出し、錠を外す。ドアはスチール製だが軽々と開く。ドアに連
動した玄関灯が広いフロアを照らし出した。目の前の紫檀の衝立の向こうは二十畳のリビ
ング兼用のキッチンになつてゐた。父の趣味だが、変わつたレイアウトには違ひない。

部屋の中央に、大きな白の革張りの応接三点セットと姿見があるだけの殺風景なりビン
グだった。高さ五十センチメートルほどのテーブルは、畳一畳以上の広さがあった。親子
三人が座つても、それぞれ好きな作業ができることが父の眼目だった。それが彼の考える
家庭の団らんのイメージらしかつた。しかし、忙しい父は、ここに越して来てから、まだ
一度もそのイメージの実現を見たことはなかつた。北側の壁面はすべて、カウンターを持
つたキッチンになつてゐる。

織姫通りに面して大きく窓が取ってあり、ブラインドが下ろしてある。室の三方にドアがあった。南向きのドアが夫婦の寝室で、東向きのドアが祐子の私室だった。西向きのドアは洗面所とバスに通じている。

祐子はリビングを素通りして自室に向かった。

明かりをつけずにカーテンを開け、下の通りを見下ろす。歩道に寄せて駐車した天田のオートバイが小さく見えたが、人影は見えない。カーテンを閉めて明かりをつけた。

「疲れた」と独り言をつぶやき、ベッドの端に腰を掛けた。目の前の姿見の中で、大人びた他人の顔がしかめ面をしている。そのまま後ろに倒れ、パッチワークを施した、母の手製のベッドカバーの上に仰向けになった。

「本当に殺したのかしら」

さっきから気になっていた、バイクが殺したという少女のことを思った。自分に似ているという姿形を想像し、バイクが殺すところを思い描こうとした。しかし、車椅子から降り、自由に動き回るバイクのイメージが一向に浮かばない。

そこまで考えて、にやりと笑ってしまった。

バイクが実際に、同級生の少女を殺すはずがなかった。何かの比喩に違いないと思うと、あれこれ考えたことが馬鹿らしくなる。

急に暑苦しくなって、寝そべったままセーラーのスカーフを外し、スカートを脱いだ。ショーツ姿になると、Mに撫でられた陰部の感触がくすぐったく甦った。今日は色々なことがあったのだ。

立ち上がって勉強机の隣のステレオの所まで行き、スイッチを入れた。ボリュームを上げると、リフレーンにセットしてあるCDが鳴り始めた。

レント・エ・ラルゴのピアノとハープの調べが般々と胸を打つ。グレツキ作曲の「悲歌のシンフォニー」第二楽章の導入部だった。聴く度に胸が詰まるがつい聞いてしまう。悲しみに満ちた調べだ。

祐子は明かりを消してからセーラー服を脱ぎ捨てた。ブラジャーを外しショーツを脱ぐ。最後に靴下を脱いでから、素っ裸のまま窓辺に立って行ってカーテンを開けた。街の明かりがぼんやりと、裸身を照らし出した。六階のマンションより高い建物は周囲になかった。見られる心配はない。

織姫通りを見下ろすと、また雨が降り始めていた。天田のオートバイが濡れ、行き交う車のライトを浴びて光っていた。煉瓦蔵の黒い瓦屋根の上を雨足が叩き、雨水が流れ下つ

ていた。

裸になってみても、暑苦しさは変わらなかった。身体の深奥から熱が込み上げ、内側から徐々に焼き尽くされそうな気持ちになる。燃え上がる炎は身体の隙間を通って来る。体にも心にも大きな隙間があり、燃え盛る炎が舐め回している。誰か、私の隙間を埋めてください。

祐子の裸身がブルッと震えたとき、スピーカーからドーン・アップショウのソプラノが流れて来た。その悲しい歌声が、死に勝る悲しみを祐子に伝える。ライナーノーツの翻訳が脳裏に浮かんだ。

お母さま、どうか泣かないでください。

天のいと清らかな女王さま、

どうかいつもわたしを助けてくださるよう。

アヴェ・マリア。

(ナチス・ドイツ秘密警察の本部があったザコパネの「パレス」で、第三独房の第三壁に刻み込まれた祈り。その下に、ヘレナ・ヴァンダ・ワジュシャクヴァナの署名があり、一八歳、一九四四年九月二十五日より投獄される、と書かれている)

第一ヴァイオリンの老女の死に顔が目に浮かんだ。Mが言うように、自然のうちに迎える死だとしても、私はごめんだと祐子は思う。

たとえ死が燃え尽きることであっても、自然に燃え尽きることの方が不自然なことのように思えてしまう。

独房の壁に詩を刻んだ十八歳の少女は、どのような死を迎えたのだろうか。恐らく、辛く陰惨な死に違いなかった。しかし、その過酷な死の彼方から、こんなにも清冽な感動が運ばれてくるのだ。不思議でならなかった。

裸の股間が疼いた。右手で撫でると一週間剃らなかった陰毛がザラザラとした感触を伝える。もう一週間も経ったのだと祐子は思ってしまう。何ほどのがなくとも時だけが過ぎて行く。やはり、悲しかった。

自室のドアを開け、明るいリビングに裸のまま出た。十分成長した女の裸身が、殺風景なりビングによく似合った。祐子は高く上がった形の良い尻を振って、バスルームに通じるドアを開けた。洗面所とトイレのドアを通り越して、広いバスルームに入りバスタブに

湯を満たす。

ほんのりと湯気の立った温めの湯に、頭まで沈み込んだ所でドアホーンが鳴った。無視したまま湯に浸かっていたが、音はやまない。やまないどころか連続してホーンを押し続けている。強引な意志の力が、ホーンの音にまで込められているようだ。

仕方なく祐子は湯から上がり、洗面所の壁に掛けた紺のバスローブを着てリビングに出た。

電話と兼用のセキュリティーセットの受話器を取る。何も言わないうちに掠れた大声が飛び込んできた。

「祐子、俺だ、入れてくれ」

バイクの興奮した声が耳に響いた。知り合って一年ほどになり、家も近かったが、バイクが訪ねて来たのはこれが初めてだった。

「待って、すぐ開けるわ」

答えてからバスローブ姿が気になったが、構わず玄関に行き錠を開け、ドアチェーンも外した。不思議に一人だけでいる身の不安は感じなかった。

ドアを大きく開けると車椅子が入って來た。室内で見る車椅子は思ったより大きい。広い玄関が手狭に見えた。

「中まで入って」と呼び掛け、紫檀の衝立をずらす。

「車椅子で汚れるからここでいい。押し掛けて来て悪いとは思うが、天田の言ったことを誤解されたくなかったんだ」

「話す前に中に入って、汚れても構わないから」

言葉を続けながらバイクの後ろに回り、車椅子を押してリビングのテーブルの前に着けた。

「あれ、風呂から出たところなのか。悪いタイミングで済まなかった」

祐子のバスローブ姿に、やっと気付いたバイクが、少しも済まなそうではない声で言った。

「風呂上がりではなく、入浴中に呼び出されたのよ」

「それは悪いことをしてしまった。俺は急がないからもう一度風呂に入ってこいよ。湯冷めするといけない」

祐子に会えたことで安心した様子のバイクが、さっきまでとは打って変わり、ゆったりとした口調で入浴を勧める。

「天田さんと話があったんじゃないの。ずっとオートバイが置いてあるわ」

「あいつは追い返した。でも、きっとまた来る。しかし、ここにいるとは考えもつかない」

「それは甘いわ。バイクがそう思うだけで、誰だって考えつく」

「天田には、そんな頭はない。早く風呂に入ってこいよ」

「じゃあ、お言葉に甘えて入ってくるわ。でも私、長湯よ」

祐子は楽しそうに笑って、バイクのためにキッチンに行き、コーラとグラスを持って来た。

「俺はコーラは飲まない」

真剣な顔で断言するバイクにまた笑い掛け、冷蔵庫から取ってきた缶ビールをコーラの隣に置いた。

「同じ呑むなら焼酎よりビールの方がいいのよ。今日はあまり呑んでいないようだから目を瞑るわ」

口を歪めて苦い顔をするバイクに、片目を瞑って見せてから、祐子はバスルームに戻った。ドアに錠を下ろす気にもならず、ローブを脱いで若々しい裸身を一気に湯に沈めた。

広いリビングに一人残ったバイクは、卓球台ほどもありそうなテーブルの隅に置かれたビールに手を伸ばした。

缶の栓を開け、グラスに注がず、直接缶に口を付けて一口飲んだ。

苦い水が喉元から食道を下っていく。味気ない酒だった。やはり喉を焼く刺激が酒のすべてだった。そして、すべてを忘れさせてくれる強烈な酔い。

二口目のビールを含み、じっとコーラの缶を見つめた。もう、気にならなくなつたはずだったが、祐子に説明しようとしていた事実が、缶コーラに染みついた憎悪を思い出させた。この小さな缶が一切を奪つていったのだ。

バイクは苦い水を飲み下しながら五年前の夏に思いを馳せた。

命門学院高等部では、三年生の夏休みの最後の週末に独特的行事があった。マラソン補習とも耐久セミナーとも呼ばれる、二十四時間に渡る連続補習だった。

大学の受験勉強が追い込みに掛かる二学期を前に、絶対現役合格の強固な意志を、生徒たちに再確認させるための行事だった。

そのマラソン補習が開始されて以来、始めて四人の生徒がさぼった。

バイクと天田、そして歯科医院の長男で音大志望だったピアニスト。この三人の男子生徒に加えて、才媛を誇った映子までがさぼったのだ。もっとも四人にして見れば、さぼったのではなく、ボイコットしたつもりだった。

四人とも、別に落ちこぼれではない。歯科大を狙わず音大を目指すピアニストと、社会を斜めに見る傾向のあった天田には若干の問題はあったが、教師たちから東大合格間違いなしと言われていたバイクと、数学を除けばバイクを上回る成績の映子に何の問題もなかった。

補習ボイコットの話は、最初にバイクが映子に持ち掛けた。バイクは二人だけで別行動を取りたかったのだが、中等部からの同級生の天田と、ピアノ教室が一緒のピアニストを映子が誘ったのだった。

補習の日、四人は市街地の北、渓谷沿いの山地地区にあるピアニストの家に集合した。ピアニストの父が、趣味のアトリエに使っていた蔵屋敷で二十四時間、それぞれが勝手に勉強することにしたのだ。ちょうどピアニストの母は都会に出掛けていて、二日間留守だった。歯科医は子供の行動に一切干渉したことがない。子供たちだけで、蔵屋敷を自由に使えることになった。

歯科医が趣味の紙漉きに使うというアトリエで、各自が勝手に勉強を始めた。しかし、勉強を始めてすぐにピアニストが抜けた。自分の部屋でピアノを弾くことが一番大事な勉強だと言う。開け放した蔵屋敷の窓からピアニストの弾くショパンが終日聞こえることになった。

昼食に映子が中心になって作ったカレーライスを、四人で楽しく食べた頃までが、この奇妙な補習の最盛期だった。

食後の雑談の最中、みんなを笑わせていた天田が鞄から煙草を出して吸い始めたのだ。

「煙草を吸う人は嫌い」

にべもなく映子が言い、全員が凍り付いた。

「お前に好かれるためにここに来たんじゃないぜ。楽しそうだから付き合ってと、誘われたから来たんだ。少しは楽しませてくれないか。煙草を吸うくらいで目くじら立てるな。ストリップでもして見ろよ。お前の貧弱な裸じゃあ誰も喜びはしまいが、刺激がないよりはましさ」

中等部から一緒だったという天田に遠慮はない。映子の顔が真っ赤に染まった。「天田君なんか帰ればいいのよ」

「お前と一緒に帰ってやってもいいぜ」

古くから織物で栄えた街の男特有の不遜な態度が、天田には染みついていたようだ。天田も映子も、家庭は古くから機業を営んでいた。

険悪な雰囲気に耐えれなくなった纖細なピアニストが、間合いを計って声を出した。

「僕はまたピアノを弾いてくるよ。ヴェーゼンドルファーの音、ここまで聞こえるかな。

アップライトだから無理かな」

「良く聞こえるわ」

即座に映子が答えた。天田を意識して張った胸で、薄いブラウス越しに豊かな乳房が揺れた。

「そう、聞こえるの。聴衆がいると思うと張り合いが出るよ。今度はスケルツォの二番に挑戦する」

「素敵ね。私も聴きに行っていい。邪魔しないからいいでしょう」

いち早く立ち上った映子が、黒い瞳を輝かせてピアニストを誘う。

二人が去った蔵屋敷の窓から、聴くに耐えないスケルツォが残された二人を嘲笑うように流れてきた。

窓辺が西日で赤くなるまで、バイクと天田は黙ったままそれぞれの勉強を続けた。

「ウー」と、わざとぞんざいな声を出して伸びをした天田が、そのまま床に寝ころんだ。顔だけバイクに向けて話し掛ける。

「チエ、映子の奴、お茶も入れに来ない。でも、これで良かったんだ。なあ、バイク。俺はお前に映子を取られるわけにはいかないんだ。お前は特待生で高等部に来ただけだから分からぬだろうけれど、中等部からずっと一緒に俺たちは、お互のことのみんな知ってるんだ。生意気な映子がジジイ教師にパンツを下ろされ、剥き出しの小さな白い尻を折檻されるところも見ている。一番前の席に座っていた俺は、教壇に手を付いて屈み込まれた、映子の裸の尻の割れ目も、足を大きく開かされてぴくぴくと動いていた肛門も、ミニズ腫れになった鞭の痕もよく覚えているんだ。あいつが十二歳の時のことだ。だから今更、お前ごときに映子を取られるわけにはいかないんだよ」

「わざわざ俺に話すことじゃない。俺は勉強中なんだ」

広げたノートに目を落としたまま答えたが、耳から入った映子の姿がバイクの身体の奥で熱く燃え上がった。微分方程式を解いていたはずの脳が、剥き出しの尻を掲げたまま振り返った映子の顔を映像化する。じっと歯を食いしばって、不条理な鞭打ちに耐える映子

の表情が美しかった。股間が熱くなり、むくむくとペニスが勃起してきた。

「最後の鞭が映子の尻の割れ目を狙ったんだ。あいつは強情だから、それまで泣き声も出さなかった。ジジイ教師も頭に来たんだろう。固くつぼめられた肛門に大きな音を立てて鞭が振り下ろされた。ヒーと尾を引いた映子の悲鳴を、俺は今も覚えている。鞭打たれた瞬間、つぼめられた肛門が開いた。ほんの少しだけ便を漏らしたんだ。見ていた俺はどきっとして、パンツの中で射精してしまった。便は黃金色に美しく見えた。恥ずかしさに真っ赤になって震える小さな尻が素敵だった。なあ、バイク、羨ましいだろう。俺はますます映子が好きになった。お前とは付き合い方が違うんだよ。俺が見ていたことを、映子はもちろん覚えているはずだ」

「そんな話は聞きたくない。幼かったときのことだ。映子が可哀想だろう」

「幼くはないさ。中学一年の夏のことだ。まだ五年しか経っていない」

「五年も前のことだ。天田、お前は暇すぎるんだ。進歩がない。五年前の話なんか俺は興味がない。今の映子にしか関心はないね」

「そーか、」と言って天田は意地悪く言葉を呑んだ。バイクの股間で固く突き立った熱いペニスが、五年前の話しの続きをせがんでいる。

「なあ、バイク。お前は何でバイクって呼ばれてるんだ」

話題を上手に変えた天田に、バイクは乗せられてしまった。ノートを閉じて寝そべった天田へと向きを変えた。

「俺がオートバイ好きだから、みんなそう呼ぶんだ」

「それで、いつ免許を取るんだ。もう今年は取れるはずだよな」

東大受験のことばかり頭にあったバイクは、一瞬呆気にとられてしまった。

「免許は大学を卒業したら取るよ」

「そして、免許を取ったらオートバイを買って、後ろに映子を乗せるのか」

「そうだ、文句はないだろう」

天田の口元がうれしそうに歪んだ。

「文句はないさ。精々いい夢を見ていればいい。夢は夢だからな。誰も邪魔はしない」

「何を言いたいんだ」

「別に言うことはない。俺と棲む世界が違う奴で安心したのさ。言って置くが、俺は今晚映子をものにするぞ。邪魔はさせない。先手必勝だからな。お前は長い長い先の、見果てぬ夢を見ていればいい」

「なぜ俺に、そんな宣言をするんだ」

「ただの仁義さ。先手必勝だと言ったろう。日も落ちたことだし、まあ、今晚の前祝いに一杯やれよ」

起き上がった天田が鞄を開け、ウイスキーのミニボトルを取り出す。慣れた手付きで二つのグラスに注ぎ分けてバイクに手渡す。

現実離れした天田の話と、脳裏に浮かぶ映子の姿態に困惑したバイクが、グラスを取った。一息に飲み干す天田を横目にして、グラスに口を付けた。酒を飲むのは始めてではなかったが、ストレートのウイスキーは強烈に舌を刺し、喉に咽せた。テーブルに置いてあった温くなったコーラを注ぐ。天田が上手にウイスキーを注ぎ足した。

ソフトドリンクになった酒を、無造作に口に含み飲み下した。汗ばんだ肌が熱くなり、大粒の汗が噴き出してくる。

「話の続きをしてやろう」

「なんの話だ」

「五年前の映子の話しに決まっているだろう。まだ続きがあるんだ。まあ、聞け。ジジイ教師は、脱糞してしまった映子を許さなかつたんだ。その場で、セーラー服を脱いで、全裸になるように命じた。見せしめのため、晒し者にすると言うんだ。唇を噛んだ映子は、命じられるままに赤いスカーフを取り、セーラー服を脱いだ。真っ白なブラジャーを外すと、両手で乳房を隠した。すかさずスカートも脱ぐように叱責された。仕方なく胸を被った手を下ろし、スカートを脱いだ。素っ裸になって、股間と乳房を隠している映子を見て、クラス全員が溜息を洟らした。美しかった。射精してしまっていた俺のペニスが再び勃起してきた。ジジイ教師は憎々しげに、胸と陰部を隠した映子の細い両手を取って、無理やり背中にねじ上げると、縄跳びの縄で両手首を後ろ手に縛り上げたんだ。余った縄で乳房の上下もきつく縛った。そのままの姿で一時間、教壇の横に立たせたんだ。おまけに、十分ごとに九十度ずつ姿勢を変えるように命じた。素っ裸で後ろ手に縛られた映子は、唇を噛みしめたまま、俺たちに恥ずかしい姿を晒したんだ。裸身が向きを変える度に、股間でそよぐ黒い陰毛や、尻の割れ目に沿って走る無数の鞭打ちの痕が、陰惨に俺たちの目を打った。壮絶な美しさだった。なあ、バイク、想像して見ろよ。俺はその一切を見たんだ」

嘘に決まっていると、バイクは思った。天田は自分を挑発するために、映子をネタにした猥談を始めたのだ。しかし天田は、目の据わった真剣な表情でバイクの顔を見つめた。

「俺が嘘をついていると思っているだろう」

「そうだ。嘘に決まっている」

「そう思っていればいいさ。さっきお前に言ったとおり、今晚俺は五年後の映子を確認する。お前は遙か先に夢をつなげ。でもな、したいことはすぐしてしまわないと、無くなってしまうんだ。お前は情けない奴だ。でも、いい奴だよな、ハハハハハ」

天田の含み笑いがどんどん大きくなる。

バイクは耐えきれなくなって立ち上がった。ズボンに締め付けられた勃起したペニスが痛んだ。目ざとく股間の膨らみを見付けた天田が、もう一度高らかに笑った。

「ガムを買いに行く」

つまらない言い訳を言って出口に向かうバイクの背に「せっかく買いに行くなら、オートバイを買え」と、かん高い天田の声が飛んだ。

火照った身体でバイクは、自転車のペダルを踏み続けた。次から次に吹き出す汗を、溪流を下る夜風が心地よく払ってくれる。

街に向けて二十分ほど行ったところにコンビニエンス・ストアがあった。

冷房の効いた店内に入り、熱を持った身体を冷やす。買ったばかりのガムを噛みながら書棚から雑誌を取って目を通した。何気なく開いたページには、全裸で縛られた女のグラビアが拡がっている。黒々とした陰毛を割って、股間を走る縄が卑猥だった。頻りに耳を打つ、太いエンジン音に気付いて目を上げる。目の前の電話ボックスの横に止まった、光り輝くオートバイが目に飛び込んで来た。カワサキの400CCの新車だった。電話ボックスの中には、ライダースーツの男の背が見える。駐車場を出る車のライトを浴びて、オートバイのシートの上で、黒いヘルメットがキラリと光った。腹の底まで響くエンジン音がバイクを誇る。

したいことはすぐすると言った、天田の言葉が甦る。バイクは雑誌を手にしたままレジに向かう。釣り銭を見ようともせず、窓の外の電話ボックスを見つめ続けた。受話器越しの男の会話は、こじれているようだった。しゃがみ込んでメモを取っている後ろ姿が見える。

バイクは急いで店を出て、電話ボックスに近付く。エンジン音が心地よく耳に響く。近く足音など、バイク自身にさえ聞き取れない。電話を掛けに行く振りをして、電話ボックスの前に立つ。番を急かすかのように、ボックスの中を覗き込んだ。中の男は気付きも

しない。頻りに何事かを送話器に訴えている様子だ。女でも口説いているのかも知れない。

バイクの慎重な行動はそこまでだった。

素早くシートの上のヘルメットを取って、頭に被りながら、素早くオートバイに跨る。

両手でしっかりとハンドルを握って車体を立て、左足でサイドスタンドを蹴る。しっかりとクラッチを切ってギアをローに踏み込み、アクセルを開ける。二千回転を目途にクラッチを合わせると、車体は竿立ちになりそうになって急発進する。慌てて体重を前輪に掛け肩の力を抜く。軽く右に切ったハンドルにスムーズに従い、オートバイは市街地に向かうアスファルト道路を疾走していた。

暴走族の仲間に入った中学時代の同級生に、河原で乗せてもらった車体とは格段の差だった。運転に慣れるに従ってしつくりと体に合ってくる。

街に向けて五分ほど走ったところでバイクは、渓谷を越える橋を渡って対岸の間道に出た。うねうねと続くワインディング・ロードを、二速から五速までのギアを一杯に使って切り抜けて行く。生まれて始めての爽快感が全身を包み込んだ。やはり、したいことはすぐすべきだ。この一点で天田は正しかったと思った。事後の処理は事後に飽きるほど考えられる。バイクは急に、身も心も倍以上に成長したような気がした。

運転に慣れたところでまた渓谷を渡り、ピアニストの家に続く道に乗り入れる。わざとギアを落とし、回転を上げたエンジン音を轟かせながら蔵屋敷の前に乗り付ける。案の定、爆音を聞きつけた三人が外に出て出迎えていた。真っ先に上気した映子の顔が目に飛び込む。目を丸くしている天田の身体が、やけに小さく見えた。ピアニストだけが、遠くを見るような目で眺めている。

三人の目の前でゼロターンを決め、車体を道路の方に向けた。駆け付けた三人がバイクを取り囲む。

「素敵ね、バイク。やっぱりオートバイがよく似合うわ。運転も上手」

「街まで行って借りてきたんだ。勉強ばかりじゃつまらないからね。何といっても二十四時間、寝ないで過ごすんだから刺激も必要だ」

オートバイに跨ったまま胸を張ってバイクが言った。天田の得意な台詞のような気がして、気恥ずかしさもあったが、まず、したいことをすることが先決だった。上気した映子の顔が、十分すぎる満足感を与える。

「夕食前にちょっと、ライディングに連れてって。一度でいいから乗ってみたかったんだ」

「映子、よせよ。バイクは免許を持っていない。お前が被るヘルメットもない」

強い口調で天田が止めた。その口調に映子が反発する。

「こんな山の中で取り締まりなんてないわ。ちょっと出掛けるだけだからヘルメットなんか要らない」

「映子の次に、僕を乗せてくれないか」

ピアニストの一言で決まってしまった。

スカートのままシートの後ろに跨った映子がバイクの腹に両手を回し、耳元で「最高」と甘い声を出した。

思い切りアクセルを開いて急発進する。バイクの脇の上で握られた映子の両手に力が入り「キャー」という歓声が流れ去った。

渓谷沿いの夜道をヘッドライトを上げて疾走する。大小のカーブを小刻みにギアを入れ替えて、流れるようなスピードを維持したままクリアーして行く。背中にぴったりと張り付いた映子の胸の荒い鼓動がエンジン音にだぶり、いやが上にバイクの全身を熱く燃え立たせる。

二十分ほど走ると、スピードに慣れた映子は、オートバイの傾斜に身体を合わせられるようになった。二人が一体となり、カーブへの突っ込みもりズミカルに決まる。背中をくすぐる乳房の感触がたまらず、バイクのペニスはズボンの中で猛々しく勃起してくる。乗り始めた頃の緊張が解けた映子の両手が、何気なくバイクの股間に触った。勃起したペニスの感触に驚き、手の動きを止める。しかし、野蛮なまでに猛り立って疾走するオートバイの鼓動が、映子に大胆な行動をとらせた。

映子は左手でバイクの腹を抱えたまま、右手をバイクの股間に伸ばした。ズボンのジッパーを摘んで下に降ろす。パンツの中で勃起しているペニスを引き出し、右手で握って外に直立させた。熱く燃える亀頭を凄まじい風圧が心地よくなぶる。

車体の振動で、握られたペニスがしごかれ、暴発寸前まで官能が高まる。もう死んだつていいと思ったとき、ヘッドライトが急カーブの標識を照らした。

バイクは慌てずにギアをシフトダウンさせていく。

カーブの曲がり鼻で二速、五千回転まで落とした。車速は約五十キロ。アウトから鋭く、インに切り込もうとした瞬間、路上に転がっているコーラの赤い缶が大きく目に飛び込んだ。

しかし、もう進入コースを変えることはできない。鋭く切った前輪が缶を踏み潰した。

この微かなショックに後輪が連動し、大きくアウトに流れた。急激に襲った遠心力で、ペニスを握った映子の右手が離れる。背中に押し付けられた両乳房の感触が無くなり、車体から振り落とされた肉体の重さだけが、軽々としたハンドルに伝わってきた。

慌てて両手に力を入れる。前輪がブレーキでロックし、切られたクラッチが後輪の駆動力を奪った。後は、糸の切れたタコと同じだった。車体ごとバイクはガードレールに激突した。激突の反動で車体から振り落とされたバイクは、反対車線のガードレールまで飛ばされ、背中から腰を激しくぶつけた。

耳を圧していた激突音が消え去り、静寂が戻った。

不思議なことに、バイクに痛みはなかった。山側の車線の端に立った電柱に付けられた外灯が、青い光を路上に落としている。その電柱に縋り付くようにして倒れている映子の姿が見えた。スカートがまくれ上がり、白いショーツで隠された尻が艶めかしく見える。

ああ良かったと思い「エイコッ」と呼び掛けたが、返事はない。不安がこみ上げ、立ち上がって映子の無事を確かめに行こうとしたが、立てない。

立てないどころか下半身に何の感覚もない。仕方なく両手を使って這って行った。

不安と焦りに身を焦がして、絶え間なく映子の名を呼びながら、バイクはアスファルトの路上を這った。勃起したままのペニスが路面で擦れ、瞬時に爛れていく亀頭の先から、白濁した精液がだらだらと流れていた。しかし、バイクには何の感触もない。

やっとの思いで映子の足下まで這い寄り、手を伸ばして剥き出しになった尻を触った。暖かな体温を感じたが、思ったほどの弾力がない。慌てて這い上がって、横を向いた顔を覗き込んだ。

大きく見開かれた映子の左目が、虚ろにバイクを見ている。しかし、右目は無かった。目ばかりでなく頭も無い。完熟したザクロのように割り開かれた頭の片割れは、黒々とした毛髪と共に、コンクリート製の電柱に赤黒い血と一緒に張り付いていた。

バイクの全身を吐き気が襲った。何度も何度も、感覚のない下半身を引きずり、喘ぎながら吐いたが。苦い胃液の他には、何も出てこなかった。最後に、込み上げる嘔吐に耐えて、掠れた声で映子の名を呼んだ。当然、返事はない。

この事故を機に、バイクは脊椎の損傷によって自らの下半身と、映子を失った。夢を含め、一切を無くしたのだった。

「ワーッ」と大きく、バイクは叫び声を上げた。

リビングからバイクの叫びが聞こえた気がしたが、祐子は構わず湯に浸かっていた。

バイクと知り合ってからもう一年になる。出会いの時から拗ねた態度をしていたが、自分を偽らない言葉に好感が持てた。

バイクとの出会いは去年の夏の初め、マンションの前の煉瓦蔵がイベント会場としてオープンした時だった。こけら落としの演奏会に、両親と出掛けた夜のことだ。

赤い煉瓦の壁面で囲まれた場内で、アマチュアバンドがビートルズナンバーを演奏していた。両親が懐かしがって身体を揺するほど、乗りがいい演奏だった。

会場全体が盛り上がり、観客の一人が暑気に耐えかねて蔵の出入り口を大きく開け放した。心地よい夜風が場内を包み、演奏はますます熱を帯びる。

「ルーシー・ザ・スカイ・イズ・ダイヤモンド」の強烈なビートが始まつてすぐ、開け放された出入り口から酒瓶が投げ込まれた。舞台の端で碎け散った瓶で会場が騒然となり、全員が出入り口を見た。

一台の車椅子が、月の光を浴びて中庭に止まっている。静まり返った会場全体に車椅子に乗った青年の絶叫が響き渡った。

「ウルセイ、家に病人がいるんだ、もっと静かにしろ」

声の主がバイクだった。呆気にとられている観客も両親もお構いなく、祐子は出入り口を閉めて、車椅子の前に立った。青年の清冽な気迫に引きつけられたのだ。

「ごめんなさい」

詫びる祐子にバイクは「お前に謝られる筋はない」と言ったのだ。その通りだった。

「あなたはどなた」と、嫌味たっぷりに尋ねた祐子に「俺はバイクだ。お前は映子だろう」と、あっさり答えた。

酒の匂いがぷんぷんしていた。

「私は祐子よ」と答え、車椅子を押して織姫通りに出た。思えば最悪の出会いだ。

だから、バイクの叫び声などに、今更驚いてはいられない。祐子は、心の底まで温まったと思えるまで湯に浸かってから上がった。

素肌に紺のバスローブを着て、リビングに戻る。

青ざめた顔を小刻みに震わせ、缶ビールを握りしめたバイクが、ドアを開けた祐子の目を見つめて口を開いた。唇を歪め、早口に言葉を紡ぎ出す。

「俺が映子を殺したと言った天田の言葉に嘘はないんだ。しかし、どうしても、あの時の事故の事情を祐子に知って欲しくて来てしまった。頼むから誤解のないように聞いてく

れ」

「いいの、聞かなくてもいいの。かえって聞きたくないわ」

「どうして。俺は祐子に誤解されたくないんだ」

「誤解も間違いも、私はしない。だって、私は今のバイクしか知らないもの。バイクが昔の話をすれば、私は自由に歩き回っているバイクを想像しなければならない。でも、私の知っているバイクは車椅子に乗っているのよ。私の知らないバイクを想像することはできないの」

「しかし、俺は歩き回れたんだ」

「そう、昔ね。でも、今はもう変わってしまったわ。なぜ、変わってからのバイクを大切にしないの。歩けたときのバイクは私に関係ないもの」

静かに話す祐子の口調がバイクを冷静にした。

「妹に説教されている気がするよ。祐子はしっかりしているね」

「無駄なことは考えない横着者なのよ。私なんて変わりたくても、なかなか変わればしない。ちっぽけな過去が足を引っ張ってるの。勇気も足りない。その点バイクは、すべてが変わったんだと思う。せっかくのチャンスを大事にしてもらいたいの。変わることに自信を持って、私に勇気を与えて欲しい」

バイクの顔が苦悩に歪んだ。祐子の言うとおりだと思うが、頭の隅に張り付いた小さなプライドと重すぎる記憶が、休みなく過去から脅迫する。

「ねえバイク。翻訳とか、コンピューターのソフトの開発とか、あなたに相応しい仕事をしてみたいと思わない。何をやっても、バイクなら成功しそうな気がする」

バイクは、熱中する対象が祐子しかないことを、見透かされたような気がした。その祐子まで失うわけにいかなかった。それではもう、生きていけないとさえ思ってしまう。酒が欲しかった。

缶ビールを口に運んだが空だった。祐子に気付かれないと、飲む振りをする。このまま帰りたくはなかった。何とか、別な話を考えようと焦った。

「話は変わるけど。祐子は幼いとき、お仕置きされたことがあるかい」

話が変わるもないものだった。五年前に天田が話した、映子の折檻のことが気になっていただけだった。声に出してから、頬が赤くなるのを感じた。

「ええ、されたわ」

呆気なく祐子が答えた。再び足下を見透かされたような答えに、なおも顔が赤くなつた。

しかし、聞かずにはいられない。

「へー、本当かい。どんなことをされたんだい」

「思い出したくないくらい酷いことよ。でも、忘れないために、いつも思い出すの。私が変わっていくには、記憶を乗り越えていくしかないもの。担任の先生に素っ裸のお尻を、死ぬほど笞で打たれたのよ。足を広げられて、お尻の穴が裂けるほど打たれた。六年生の夏のことよ。まだ三年しか経っていない」

嫌になるほど、天田のよた話と似ていた。しかし、祐子が嘘をつくはずがない。強烈な性感がスパークして、バイクの脳裏を走った。反応しない下半身を煽るように想像力が働く。

目を閉じてしまったバイクの前で、祐子がバスローブを脱いで後ろを向いた。

「見て、こんな格好で笞打たれたの」

祐子の声で目を開いたバイクの前に、両足を開いて突き出された真っ白な尻があった。尻の割れ目が大きく開かれ、桜色の肛門も、陰部も、すべて丸見えだった。不揃いに剃られた陰毛が微かに生えだしていた。

初めて見る女の裸身だった。しかも、一番恥ずかしい股間を押し開いてみせる祐子の気持ちが理解できなかった。頭の中だけで苦しい官能が渦巻く。残酷だった。

官能の高ぶりに、思い通りに反応できない感覚を失った下半身が、巨大な岩のように想像力の果てに聳えている。

「ねえ、分かった」

素っ裸の尻を掲げたまま、振り返った祐子の顔が笑っている。黙って頷くと、身を翻して正面を向いた。つるつるの股間から小さな性器が、悩ましそうに顔を出している。下半身のもどかしさに耐えかねて、バイクの顔が苦悩に歪む。

「ねえ、バイク。どうして毛を剃っているか分かる」

バイクが黙って首を横に振ると、涼しい声で答えた。

「勇気が出るように剃り落とすの。服を着ていても、内腿に触れる剃り跡の感触が、勇気を出せって私に告げてくれるの。そう、私は普通じゃないんだって、元気が出るのよ」

下半身が麻痺しているのを知っていて、俺を馬鹿にしているのだろうかと、バイクは思ってしまう。しかし、奔放な祐子の態度はいつもと変わったところがない。かえって他人の目が無い分、自然な振る舞いにさえ見える。

確かに普通ではなかった。俺もそうした新しい地平に向かうべきなのか。バイクは迷う。

捨て去った過去が重すぎるような気がして苦しい。

「ねえ、バイク。せっかく来てくれたのだから、私の毛を奇麗に剃ってちょうだい。いつも週末に剃るんだけど、一人ではうまく剃れないのよ、お願ひ」

バイクの返事も待たず、素っ裸のまま洗面所に戻り、ジレットの剃刀とシェービングスプレーを持ってきてバイクに手渡す。

顔をこわばらせたバイクを尻目に、目の前で大きく足を開き、股間を突き出す。呼吸と共に息づく、剥き出しの性器が眩しい。

覚悟を決めたバイクは、祐子の陰部全体にシェービングスプレーを振りまいてから、慎重にジレットを使った。鋭い刃先でジョリジョリと短い陰毛が剃り落とされる。前を剃り終わると祐子は後ろを向き、再び尻を高く掲げた。

「肛門の周りの毛もよく剃ってちょうだい。私は毛深い方みたい」

バイクの頬がまた赤くなってしまう。

前と後ろから陰毛を剃り上げると、祐子は姿見の前に立ち、仕上がり具合を確認する。

「じょうず、バイクは何をしても最高ね」

うれしそうに戻って来て、バイクの手を取った。

「祐子、先生に折檻されたとき。鞭打ちの後、素っ裸にされて縛られなかつたかい」

「先生には縛られなかつたわ。でも、違う人に手錠を掛けられたの。今から考えると、怖いほど素敵な人だったみたい。でも死んでしまつたわ。私も勇気を出さなくちゃ」

バイクには理解できなかつたが、強烈な記憶が三年前の祐子に刷り込まれているらしいことは分かつた。

俺も頑張るか。バイクは珍しく前向きに考え、新鮮な気持ちで祐子のマンションを後にした。

3 演技者の記憶

ドアまでバイクを見送った祐子は、裸のまま自室に戻った。

リフレーンにセットしたままのCDが、相変わらず「悲歌のシンフォニー」の第二楽章を繰り返している。

火照った肌が悲しい調べに反応する。剃りたての股間が、ピリッと疼いた。窓辺に寄つてカーテンを開け、窓を開いた。湿気を帯びた冷たい外気が裸身を包む。また、雨が上がったらしい。見下ろした街路が、外灯の光を浴びて紫色に光っている。まだ八時というのに行き交う車も疎らだ。歩道の端に置かれたままの天田のオートバイがヘッドライトに照らされ、一瞬銀色に光った。

マンションを出たバイクが車道に下り、織姫通りを横断しようとしている。ちょうど通りの中ほどまで進んだとき、バイクの後ろから近寄って来た天田が、車椅子の取っ手を両手で握った。そのまま車椅子を押して、歓楽街の方向に車道を下って行く。天田の全身に込められた強い意志が、見下ろしている祐子にまで伝わってきた。バイクは車椅子の中で力いっぱい身体を捻り、怒りを込めて後ろを振り返った。天田の姿を確認してから、諦めたように前を向き、肩を落として押されて行く。後ろ姿が悲しかった。

祐子は窓を閉め、クロゼットから黒いトレーナーを出して頭から被った。剥き出しの下半身にブラックジーンズを通す。洗いたての固いデニム地が、つるつるの股間に痛い。

ドアを出てから、演奏を続けるCDが気になったが、そのまま廊下に出た。悲しみの残った部屋を、悲しい調べが満たせばいいと思った。早く、バイクと天田を追わなければ、今夜もちょっとぴり刺激のあった週末のままで終わってしまう。

身体の中を猛スピードで流れる時間と、止まってしまったような現実の時間との落差を急いで埋めなければ、Mの言うように身も心も腐ってしまうと、祐子は思った。

赤と黒を斜めに染め分けた看板灯の隣の駐車スペースに、MはオープンにしたMG・Fを止めた。

降ったり止んだりの気まぐれな天気のためか、夜になっても歓楽街に人は疎らだった。こんな夜は、どうしても一杯の酒が恋しい。

小さな金色の板に「サロン・ペイン」と、黒い文字の打たれた厚い木のドアを開けて、

店内に入った。

カード専用の白い電話の置かれた狭いホールの先に、自動ドア越しに店内が開けている。客のいない黒いフロアの奥に、どっしりとしたカウンターが見える。並んだ赤いスツールも、手持ち無沙汰に客待ちをしているようだ。ガラスの自動ドアを通ってフロアに入る。横手に置かれた黒いグランドピアノの後ろに、二階へ続く赤いドアがある。ドアに張った黒い板の上に、金色の文字で「会員制クラブ・ペインクリニック」と書いてあった。

Mは真っ直ぐカウンターまで進み、中央のスツールに座った。

「いらっしゃいませ」

カウンターの中で、全面に張った大きな鏡を背にした若い女性が、丁寧に頭を下げた。店でチーフと呼ばれている、目元の涼しいショートカットのバーテンと向かい合うのは三回目だった。開店して半年の店だが、どんな常連客とも一定の距離を置いている接客姿勢が好ましかった。

「ドライマティニをください」

「はい」と、はっきりした声で答えたチーフは、透き通った氷の浮いたシンプルなクリスタルグラスを目の前に出した。白いお絞りを横に添える。この店で白色は、入り口のホールの電話と、お絞りだけだ。赤と黒だけを使ってインテリアした店内で、白は目に映える。

チーフの服装も、襟元の大きく開いた、ゆったりとした白い半袖シャツと、白のパンツだった。腰に締めた黒のベルトと、首に巻いた青いスカーフが、引き締まった姿態によく似合っていた。二十代後半の、眩しいほどの美しさが全身に溢れていた。余程スカーフが好きなのか、この前来たときも、色変わりのスカーフを巻いていたことをMは思い出した。

ぎこちない仕草でシェーカーを振るが、技術の拙さを美しさがカバーしてしまうところが憎い。若さの持つ特権を見せ付けられる思いだ。五つと年の違わないところが歯がゆかった。思えば、花の盛りは本当に短い。後は責任と人格で勝負するしかないのだ。

黒い革のコースターに置かれたグラスに、チーフがマティニを注ぐ。

「ママとナースは休みなの」

スキンヘッドの大柄なママと、ナースと呼ばれるグラマラスな中年のウエイトレスのことを見ねた。この店は、三人の女が切り盛りしていたはずだった。しかし、それほど客が入っていたことはないので、チーフ一人でやっていけないこともなさそうだ。

「二人とも上のクラブの用意をしています」

酒にオリーブを添えながらチーフが答えた。

会員制クラブの赤いドアが目に浮かんだ。思わず目の前の鏡を見上げたが、赤いドアは映らないように配置してある。グランドピアノの端だけが、辛うじて目に入った。

突然ピアノの音色が響き渡る。

「ユード・ビー・ソー・ナイス・トゥ・カム・ホーム・トゥ」の流麗なメロディーが、静かな店内に流れた。少しブルーに、気軽に弾き流す、軽いタッチのピアノだった。聴く者を舐めきった、嫌味な演奏だと思った。

せっかくのマティニが不味くなる気がしたが、チーフに苦情を言うほどのことではないと諦め、舌を刺す心地よい酒の刺激をゆっくり味わう。

嫌味なピアノが、思い切りシンコペーションを掛けてエンディングを突っ走った後、静かさが戻った。

「今晚はM、久しぶりだね」

狭いフロアに、若々しい男の声が響いた。Mが見上げた鏡に、ピアノの前まで歩み出た、白のシルクシャツと同色の麻のパンツを穿いた男の姿が映っている。

Mは鏡の中の男を見上げ、右手で軽くグラスを上げてから声を掛けた。

「今晚はピアニスト。ふやけたジャズをありがとう。あなたの後ろで、ショパンが泣いているわ」

「相変わらずだねM。僕はその泣き声を聞かせたかったんだ」

にこやかに笑いながらピアニストが近付いて来る。

そのピアニストとMの間に、自動ドアを開けて車椅子が割り込んで来た。車椅子を押す天田が、大きな声を出した。

「ずいぶん手間取らせたが、やっとバイクを連れて來たよ」

天田の声に頷いたピアニストがMから視線を外し、気取った声で挨拶をする。

「今晚はバイク。今晚は天田。バイクと会うのは五年振りだ。本当に良く來てくれたね。まあ掛けてくれよ」

ピアニストがフロアの赤いテーブルに、バイクと天田を案内する。

「チーフ。悪いけど看板の明かりを消してください。客も来ないようだから貸し切りにしよう。みんなゆっくりしていってくれ」

ピアニストが席に着いた二人に大きな声で言った。

「M、僕たちはこれから同窓会を開くんだ。Mは僕の保護者みたいなものだから、良かつ

たらそこで付き合っていいください。いいでしょう」

「いいわよ。帰っても今夜は予定がないわ。ピアニストの成長振りをじっくり見せてもらおう。チーフ、マティニをもう一つちょうだい」

スツールを回して振り返ったMを見て、びっくりして天田が立ち上がった。

「あれっ。お姉さんじゃないですか。ピアニストと知り合いだったんですか」

「今晚はケースワーカー。私は昔、ピアニストの家にホームステーしたことがあるの。気にしないでいいわ」

今度は、ピアニストが呆気にとられた顔をした。

「なんだ、天田はもうMに目を付けたのか。帰ってきて半年も経たないうちに、忙しいことだ。でも、お前じゃとても太刀打ちできないよ」

「ピアニスト、私を怪物のように言うのはやめなさい。早く同窓会を始めなさいよ。私はゆっくり酒に浸らせてもらうから」

再び前に向き直ったMは、正面の鏡に映る三人の姿を見て、楽しそうにグラスに残ったマティニを口に含んだ。看板灯の明かりを落としたチーフが、二杯目のシェーカーを振る。

席に座り直した天田が、もの珍しそうに店内を見回す。ふくれっ面のバイクは黙ったまま正面を見据えている。

「凄いな。ピアニストがこの店のオーナーなのか」

「違うさ。ちゃんとママがいるよ。僕がこの街を紹介して、親父が少し資金を出しただけさ。僕はたまに、ピアノを弾きに来る」

「だって、お前は歯医者の勉強をしているんだろう」

「今は医科に替えた」

「お前の家は歯医者じゃないか」

「ピアニストが歯医者になる気になった。そして、今度は歯医者をやめて医者になることにしただけさ」

「勝手でいいな。婦人科か」

「天田ならな。僕は麻酔科を選んだ」

「ふーん。それが飲み屋と何の関係があるんだ」

「関係ないさ。バイトをしていた病院で、ママとチーフに知り合っただけさ。まあ、そんな話は後でいいよ。何か飲まないか。ここは飲み屋なんだ。ねえ、バイク。何で黙ったま

まなんだ。何が飲みたい」

「焼酎」

固い姿勢を崩さずにバイクが答えた。

「困ったな、置いてないよ。ウォッカでいいな。チーフ、ウォッカをボトルごとください。
それから氷、」

「俺はウイスキー」

天田が大声でオーダーする。

言われるままの品を銀のトレーに乗せたチーフが、フロアのテーブルに運んで行って、
戻って来た。

「あの子たちの話を聞いたんだけど、歯科医がこの店の資金を出したんですって」

カウンターに入ろうとしたチーフに小声で訊いた。

「ええ、そうです」

「シェーカーを振る手つきが気になっていたんだけど、ひょっとして三人とも、こういう
仕事は初めてなの」

「ええ。ママは前からマネージャーだけど、私は役者。ナースは本物の看護婦をしていま
した」

チーフも小声で答えた。

やっとMは納得がいった。こうした店にしては、馴れ馴れしくない新鮮さが魅力だった
が、全員が素人だったのだ。俄然、好奇心が湧いてきた。チーフに微笑み掛けてから、気
楽な口調で訊ねてみる。

「どうして、こんな田舎に店を出したの」

「ママとピアニストの考えが一致したの。それから資金」

少しリラックスした口調でチーフが言った。

「Mさんって言いましたよね。何で、この店のことが気になるんですか」

「ピアニストと、その父親が関係しているからよ。とっても知りたいわ」

「Mさんは、お二人とどんな関係なんです」

「Mと呼び捨てにして。さっき聞いたと思うけど、私はピアニストの家に二か月ほど住ん
でいたことがあるの。家族全員と性的関係にあったわ」

チーフの目がきらりと光った。Mを通り越して遠くを見るような視線が、少し時間を置

いて、また戻って来る。

「ごめんなさい。少し記憶を旅してしまった。こんな田舎で慣れない店を出した事情を、私の方からMに聞いてもらいたくなつたわ。隣に掛けてもいい」

「もちろんいいわ」

にっこり笑って、チーフの目を見上げて答えた。

「その前に、これを見て」

チーフがシャツの襟元に両手を上げ、首に巻いた青いスカーフを解いた。

細い首筋の白い喉元に、赤黒いひきつれが走っている。

Mは目を見張って、その醜い一条の筋を見つめた。目を瞑ったら負けだと思い、冷静に肉のひきつれを見た。

白い肌に刻み込まれた痣は、縄痕に相違なかった。チーフの細い首がかつて、縄で吊されたのだ。

チーフの肉体と精神を蹂躪したはずの事件が、赤黒い肉のひきつれに浮かび上がるかのようだった。Mの胸の底から悲しみが込み上げ、次々に涙が溢れて頬を伝った。

涙で曇る視界の中でチーフの顔が微かに微笑み、カウンターから出るぼやけた背中が見えた。

「そんなに悲しまないで。もう、ずっと昔のことよ」

缶ビールを持ってMの隣に座ったチーフが、鏡に映ったMの顔を見て言った。

「それほど前のこととは思えないわ」

咽せる声で、Mが鏡の中のチーフに応える。

「でも、一年は経った。たまに傷跡が疼くだけよ」

「死にたくなるほどの、辛いことがあったの」

訊いてしまってからMは、間の抜けた問いに歯痒さを感じた。

疲労が溜まりすぎているのだろうかと思った。年を取ったということだろうかとも思う。言葉にデリカシーが無くなっていた。

「それがね。自殺を図ったわけではないの。誘われただけ。誘った方は見事に死んでしまったけど、私には傷跡だけが残った」

無造作に言ったチーフの言葉が、白々とした靄のように鏡面を曇らす。少し目を伏せた美しい顔の下で、喉に刻み込まれた赤黒い筋が揺れた。チーフが笑ったのだ。つられて笑うには、深刻すぎる話だった。

Mは、はっきりした事実を知りたいと思った。

「役者をしていたって言ったわね。新しい芝居の稽古を始めたんじゃないでしょうね」

「Mは意地悪ね。こんな傷跡を見せてまで、芝居をしようとは思わないわ。それに、本当の芝居をしていたのは、ずっと前のことよ。Mは、S・Mって知ってる」

「知っているわ」

「私はS・Mショーで、縛りの役者をしていたの。縛る方ではなくて、大抵縛られる方。素っ裸で縛られて、鞭打たれたり、吊されたりして、恥ずかしさと淫らさに責め苛まれる姿を客に見せるの。結構いいお金になったわ。役者のなれの果てと言ってもいい。相手役に犯される姿態さえ見せたんだもの」

話の先を促さなくとも、チーフは先を続けた。話すことによって、現在を確認しているような、真剣な気迫さえ漂って来る。

「相手役は私より七つ上の男だった。宏志といって、昔、芝居をしていたそうよ。本当のところは分からぬけど、出会ったときはもう、S・Mショーの男優だった。背が高く、美形だったけれど、可哀想に、首が少し曲がっているの。追突事故の後遺症なんですね。それで芝居を断念したって言っていたわ。ママと組んでショーをしていたけれど、客に飽きられたので若い子を捜していたらしいの。ちっぽけな劇団で端役をしていた私に目をつけたのよ。ママはマネージャーの素質があったから、ビジネスライクに私を口説いたわ。私が二十歳の時よ、宏志は二十七。ママの年は知らないわ」

缶ビールを一口啜ったチーフが、鏡の中のMの目を捉えた。視線を替えて自身の目を見据えると、また話を続けた。

「それからの五年間は短いようで長かったわ。客が集まればマンションでもクラブでも、一流ホテルの客室にでも出掛けてショーを見せるの。決まって素っ裸に剥かれ、後ろ手に縛られ、鞭打たれ、犯されたわ。役者だから、精一杯恥ずかしがり、喘ぎ、這いずり、泣き啜った。最後は、責め抜かれた身体が淫らに燃え上がり、官能に悶え、絶頂を極める姿を、惨めな舞台で演じきったわ。それでも私は、役者だと思っていたの。でも、宏志は違っていた。出会った頃、快活で明るく、すべてをビジネスと割り切って、仕事を楽しもうとする雰囲気さえあった宏志が変わっていった。あれほど外に出て遊ぶことが好きだったので、終日部屋に閉じこもるようになってしまった。頻りに小説を書いていたわ。仕事とは関係ない青春小説。笑ってしまうわね。よく雑誌に投稿していたわ。でも、全部ボツ。あのころの宏志が何で焦っていたのか、私にもやっと分かったような気がする。宏志はも

う三十歳を過ぎていたのだから。たとえビジネスだといっても、舞台に素っ裸の身体を晒し、無理に勃起させたペニスで私を犯す仕事に、きっと嫌気が差していたのよ。五年間犯され続けても、一回も私の身体の中に射精したことが無かったわ。その宏志が、最後に私の中で射精した。そして終わりだった」

鏡に映る自分自身の目を見つめるチーフに、黒い瞳の中を走るスポットライトの光線が見えた。

場末のクラブの狭いフロアを、スポットライトの白い光が照らし出している。目に眩しかったが、チーフは目を瞑るわけにはいかない。闇の中で取り巻く客が喜ばないからだ。

チーフは眩しさに耐え、大きく開いた両足に力を入れた。素っ裸だった。これまで、さんざん宏志に鞭打たれた剥き出しの尻が、ヒリヒリ痛んだ。

後ろ手に緊縛された裸身を真っ直ぐに伸ばし、次の演技に備える。

今夜のショーは、ちんぴらに拉致された恋人同士がテーマだった。ちんぴらたちの前で、恋人を全裸に剥き、後ろ手に縛り上げて折檻することを強制された男が、最後は自分自身まで全裸で縛られ、お互いに緊縛されたままセックスするよう命じられるという、陳腐な台本だった。ただし、二人とも縛られたまま絡みに入るという設定は、今回が初めてだった。

最近の宏志には珍しく、舞台に凝った。最後に二人が絡み合う場所を、二台の脚立に渡した板の上に決めたのだ。高さは二メートルもあった。それに、二人とも首を、犬のように括られることにした。マネジャーのママは危険性を指摘して反対したが、ちょっとやそっとの刺激では喜ばなくなっていた客の反応を言い立て、強引に宏志が舞台設定をしたのだった。

二メートルは、思ったよりずっと高い。二つの脚立に渡された板から十字型に張り出した、幅三十センチメートルの板の上で後ろ手に縛られたチーフの裸身が震えていた。大きく開いた股間が、緊張した両腿の筋肉の上で微妙に揺れる。広げた両足の裏で踏み締めた板の感触が、ともすれば無くなってしまいそうな気さえした。恐ろしくなるほどの高さだ。

スポットライトを浴びた両の乳房が、怪しく光っている。小さな乳房を大きく見せようと、黒い縄で菱形に縛り上げられていた。細い首筋には、宏志が掛けた一条の縄が天井の梁へと続いている。首を括られる恐怖に身動きすらできない。

息を詰めた大勢の人の気配が、周りの闇の中から熱を帯びて立ち上って来る。

背後で人の気配がした。宏志とママが脚立を上って来たに違ひなかった。気持ちの悪くなる感触で、足下の板が揺れた。大きく開いた股間が寒い。

素っ裸の宏志はママに後ろ手に縛られ、脚立の上に追い上げられて行った。ママの持つ鞭が、脚立を登る剥き出しの尻でピシッと鳴った。胴を二巻きした二本の繩が股間をくぐり、両側からペニスを挟んで胸と腕を縛った繩で止められている。脚立を一段上の度に、股間で揺れるペニスが不快だった。なぜ、今、俺はこんなことをしているのかと、宏志は思った。書き溜めてきた青春小説の主人公とは、比べるまでもない。米粒ほどのロマンもなかった。醜悪な姿だ。

天井から降りた首吊りの繩を、ママが広げて宏志の首に通し、喉元で輪を締めた。客の注意を引くべく、これ見よがしに作ったものだ。チーフの細い首繩と比べ、太い麻繩が凶々しい。縛り首に使うロープと同じ作りだった。

振りかぶった鞭で鋭く、急き立てるよう宏志の尻を打ってから、ママが脚立を降りた。足下の揺れが一段落するとすぐ、心持ち突き出したチーフの尻の割れ目に、宏志の股間が触れた。固い陰毛の感触が素肌を刺し、チーフの白い裸身が震える。

後ろから張り付いて来た宏志の口が、喘ぎながらうなじを這う。チーフの背中を、熱い刺激が股間へと下って行った。

宏志の仕草は、いつもとまるで違う。戸惑って震える尻に、萎びたペニスが擦り付けられた。

小さな喘ぎ声が、耳元で言葉になる。

「チーフ。もう俺は耐えられない。こんな猿芝居はもう懲り懲りだ。今夜は嘘は無しだ」

宏志の熱い息が耳朶に掛かり、少しずつ勃起してきたペニスが股間を責める。かつて感じたこともない高まりが、身体の奥から首をもたげてくる。めらめらと燃える官能の炎が、内側からチーフの股間を焼く。

「感じるかいチーフ。本当の官能はまだこんなものではない。絶頂で死にたくなるほどの極楽なんだ。さあ、もっと、もっと尻を振って悶えろ。ぐっしょりと濡れた肉で、俺のペニスをくわえ込むんだ」

宏志の喘ぎ声が激しくチーフを誘う。頭をもたげた官能の波に乗って、チーフの尻が怪しく揺れた。

後ろ手に縛られたチーフの全身から、熱い汗が噴き出し、妖艶な肌が光り輝く。既に目を固く瞑り、チーフは一心に官能の糸を織り始めていた。客のことも意識から消え去って

行った。

「さあ、尻を高く突き出せ。猛り立って喜ぶ俺のペニスを全身でくわえ込め」

股間に押し入った巨大な存在が、チーフの身体の隙間を埋めた。今までにない大きな満足感が股間一杯に拡がる。

宏志が腰を引き、また押し入れる度に、チーフの口から押し殺した喘ぎが洩れる。

体内で暴れる巨大な存在を捉えようと、チーフの全身が蠕動する。肉が、魂が、すべてが混在したまま中天に向かい、また、沈み込んでいく。大きな波が押しては返し、切れ目無く全身を翻弄する。もう少し、もう少しで、私は羽ばたく。そのまま、一切が滅びてしまっても良いと思った。

「ああ、チーフ。素敵だ。最高の気分だ。もう嘘もない。真実もない。一体になったお前と俺がいるだけだ。死のう。二人一緒にこのまま死のう」

「殺して。宏志、私を殺して。このまま、このままがいい」

官能の高まりの中で、死に誘う宏志の喘ぎが、いや増して官能を高める。

何回目かの絶頂に泣くチーフの耳元で、ひときわ高く宏志の叫びが響いた。

「死ねっ」

叫びと共に、チーフの股間で爆発が起こり、宏志が力いっぱい両足で脚立を蹴った。

官能の爆発に宙に浮いた身体が、直ぐさま落下した。チーフの恍惚とした混沌を首の痛みが追い払おうとしたが、瞬時に息が詰まり、全身の筋肉が緊張したまま意識が混濁した。

見守る客たちの頭上で、スポットライトを浴びた二つの裸身が揺れていた。

女の裸体に痙攣が走り、失禁し脱糞した。首を吊ったロープが切れ、後ろ手に緊縛された裸身が音もなくフロアに落下する。

男の裸身だけが、同様に長い時間痙攣を続けたまま、繩の先でユーモラスに揺れ続けていた。

死を誘った宏志は死に、死に誘われたチーフは、喉元に消えない傷跡だけを残した。

去年の春のことだ。

4 看護人の手腕

「いらっしゃいませ」

Mの背中で、落ち着いた女の声が聞こえた。

会員制クラブ・ペインクリニックの赤いドアを開けて、スキンヘッドのママとグラマラスなナースが、にこやかな顔で鏡の中を近付いて来る。フロアのテーブルで、盛り上がりないクラス会をしている三人の青年に声を掛けてから、二人はカウンターに入った。

「ママ、今夜はピアニストの貸し切りですって。こちらは彼の家族のM。私は一緒に飲み始めちゃった」

ママは、丁寧にMに頭を下げてからチーフをたしなめた。

「貸し切りになるかも知れないと言ってあったはずよ。他のお客だったら困ってしまうところでしょう」

「ママは意外と口うるさいんだ。でも、今日は休みだから、私もMと飲んでいたいな」

「チーフ、今夜は休みじゃないわ。きっとクラブの仕事が入るわよ」

「えっ、まさか。あの子たちがクラブを使う気じゃないでしょう」

「ピアニストは使う気よ。だからナースと準備したんじゃない」

「私は気が進まないな。だって、過去の話を全部、Mにしたばかりなんだから」

二人の話を、グラス片手に聞いていたMが口を挟んだ。

「このクラブでもショーをしているの」

「ただの真似事よ。私はただの惰性」

拗ねた口調でチーフは言って、ママに見せ付けるように缶ビールを飲んだ。

「ピアニストの家族ならMと呼んでいいかしら。チーフは何をMに話したの」

少しも動じない顔で、ママがMに尋ねた。

大きくうなずいたMが、鏡に映ったチーフの顔に目をやった。小さくうなずき返すのを確かめてから、ママを見上げて口を開く。

「ママとチーフの職業のことと、素っ裸で縛られて首を吊り、死にそこなったチーフの体験話を聞かせてもらったわ」

隣で聞いていたチーフが、露骨なMの話し振りに頬を赤く染めた。

ママが小さくうなずく。剃り上げられた頭皮が、カウンターの中に吊り下げられた照明

を浴びて白く光った。小振りで形の良い頭だった。

「はっきりした話し方がお好きなようね」

「推測したり、言葉のあやを窺ったりするのは得意でないわ。今知りたいのは、チーフが死ぬ思いまでしたS・Mショーが、まだ続けられているかどうかということよ」

ママが小首を傾げた。口元に笑みがこぼれる。

「あなたが知って、得になるとは思えない。会員制のクラブ内のことだし、営業にも関わることよ。Mの好奇心を満足させるためだけなら、私たちは嘘も言えるわ。チーフがMにした話しも、ただのリップサービスかも知れないってこと」

「そう。嘘かも知れないわね。でも、チーフの話の中で、真実と思うしかない事実もあった。彼女が死を迫られていた男に誘われ、肉体と精神のすべてで共感したということ。そして、一緒に死へ飛び立とうと決意した気持ちは、私にも十分実感できたわ」

「Mも、同じようにしたってことを言いたいの」

「いいえ。私はしない。認めることの出来る事実を感じた、ということよ。私なら多分、絶頂を極めた男だけを、脚立の下に突き落とす」

「うーん。チーフの代わりを、Mにしてもらいたくなかったわ」

満足そうに喉の奥から溜息を洩らし、ママの笑顔が顔一杯に拡がる。顔と区別の付きかねる、つるつるの頭が一緒になって笑っている。

「チーフ、場所を代わりなさい。それから、Mにマティニをもう一杯つくって。店の驕りよ」

チーフに代わって、Mの隣のスツールに掛けたママが、鏡に映ったMの顔を見つめる。Mもママの姿全体を見る。Mより頭一つ高い、がっしりした長身が背筋を真っ直ぐ伸ばしている。どっしりとスツールに掛けた尻はきっと、クッションからはみ出しているに違いないとMは思った。

「ねえ、M、」ママが誘うような口調で話し始めた。太い喉元に掛けた、重そうな金のチェーンが微かに揺れる。

「素っ裸のまま後ろ手に縛られ、首を吊って死にかけたチーフと、死んでしまった宏志は病院に行けたのよ。その場に警察は入らなかった。クラブの客たちが事件が公になることを許さなかったの。幸いなことに、客の中にピアニストがいたのよ。彼がアルバイトをしていた潰れそうな病院に、クラブの車で二人を運び込んだの。ひどい病院もあったものだわ。医師免許も持たないピアニストが、看護婦と一緒に宿直をしているんだから、笑って

しまう。でも助かったわ」

シェーカーを振るチーフの前に立ったグラマラスなナースが、突然話に割り込んできた。

「ママはおかしそうに話すけど、病院の名誉のために一言いわせて」

黒の薄いシルクシャツに透け、同色のブラジャーで被った豊かな胸が揺れる。とても看護婦には見えないナースだった。

「年を取った夫婦だけでやっていた外科・内科病院なの。夫が外科医で妻が内科医。病院と同じ敷地の中に住まいがあって、夜間は帰ってしまうの。入院患者の世話をするだけのために、夜間の看護婦と医学生のアルバイトがいるだけ。医療行為が必要なときは、先生を呼びに行ったわ。チーフが担ぎ込まれたときもそうよ。ただ、宿直のアルバイトが患者と一緒に出勤して来た。それだけのことよ。一人は明らかに変死なんだから、ひどいのはむしろ患者の方よ」

「まあ、ナースの言うとおりね。夜間の看護婦がこのナースだったので助かったというのが本音よ。それに先生が年寄りで苦労人だったから、警察沙汰にならなくて済んだ。まあ、私の人格が信用されたってところね」

ママの大きな鼻が、自慢そうにぴくりと動いた。ナースがママに片目を瞑って見せてから、その夜の様子を話した。

「私だって本音はびっくりしたわ。まさか、素っ裸の若い女性が、後ろ手に縛られたまま来院するなんて信じられなかった。でも、アルバイトのピアニストが平気な顔で縄を切って、病院の寝間着を着せてしまうんだもの、仕方なく協力させられてしまった。それほど、ピアニストは手際が良かった。一人前の医師のように振る舞うんだもの、その気にさせられてしまう。死んだ男も同じように身縛りをして、顔に白布を掛けてから先生を呼びに行つたの」

「老外科医の診断では、チーフは脚立から落ちたとき右足を折っただけ。縄でひきつれた傷跡は消えないかも知れないが、命に別状はないって言われたわ。宏志の死亡診断書も、自殺で書いてくれた。もちろん変死だから、後で警察の事情聴取を受けたけど、その点はもう抜かりがないから大丈夫。本当に助かったわ」

Mは二人の話を聞きながら、その夜のピアニストの行動を想像して笑ってしまった。S・Mショーを見に行った医学生が、いつの間にかショーの終幕にキャステングされてしまったことが愉快だった。

「右足を折ったチーフは、そのまま一ヶ月入院することになったわ。私も、する事がない

ので、付き添いとして付き合ったの。宏志のことも、正直言ってショックだったし、今後の身の振り方も考えなければならなかった。チーフはショックと喉の傷で、しばらく言葉が出なかったのよ」

ママは、真っ直ぐ伸ばした背筋の力を一瞬抜き、ナースが差し出したグラスに手を伸ばした。コニャックの甘い香りが、きっと広がる。

「チーフが入院して二週間ほどした夜のことよ。松葉杖を突いて歩けるようになったチーフと一緒に、院内を散歩したの。体は健康なのに、終日ベットに横になっていたから深夜になっても眠れないのね。三階の病室から階段を下りて、二階を散歩することにしたの。私たちはそこで、ナース独特の看護振りを見たのよ。凄まじいプロ意識だった」

静まり返った深夜の病院を、Mは思い描こうとした。しかし、これまで縁の無かった病棟をイメージすることはできない。

ママとチーフが降り立った病院の二階は、がらんとしていた。数少ない入院患者は皆、三階の病棟に収容されている。二階は、もう滅多に使われなくなった手術室を中心になっていた。かつて優秀な胸部外科を誇った病院も、今は専門医を招聘しての手術以外はしなくなっていたのだ。

冷え冷えとした空気が漂う広い廊下に、ママの足音とチーフの松葉杖の音が響く。閉じられた手術室の白いドアに、常夜灯の光が侘びしく反射している。寒々とした光景だった。

二人ともドアの前で肩をすくめた。襟元に冷たい風が飛び込んできたような気がしたのだ。しかし、背後からやってきたのは、くぐもった呻き声だった。

背筋を冷たい予感が掠め、振り返ると、廊下の奥の北側のドアから明かりが漏れている。その明かりと共に、なんとも捉えがたい呻き声が、はっきりと響いてくる。悲鳴のような、喘ぎのような、押し殺した声に誘われ、二人は廊下の奥へ歩いて行った。

廊下の北側で細く開いていたドアは、病室のドアらしかった。患者の名前を書いたラベルがはられ、ノブには面会謝絶の札が下がっている。

細く開いたドアの隙間から、しきりに呻き声が聞こえる。高く低く、打ち寄せる波のように続く規則的な音には、微妙に官能を刺激する淫らさが混じっていた。しかし、時折耳を打つ押し殺した悲鳴は、明らかに苦痛を訴えている。

二人は恐る恐るドアに近付き、ママがそっと中を覗き込んだ。

「アッ」と、声を呑み込んだママの目が、大きく見開かれる。

ママの視線の先に見慣れた病院のベッドがあった。ベッドの両側には低い柵が上げられていた。

ベッドに横たわる、げっそりと痩せた男の両手は左右に広げられ、柵の金属パイプに白い包帯で縛り付けてある。

男は素っ裸だった。貧相な股間でペニスが勃起している。

肋骨の浮いた裸の胸に女の豊満な裸身が被さり、屹立したペニスを口に含んでいた。グラマラスな裸体で、頭に被ったナース帽が異様だった。

ペニスを口に含んだナースが、顔を上下する度に、男の口から喘ぎ声が漏れる。口にはやはり、白の包帯で猿轡が噛まされている。猿轡から洩れるくぐもった喘ぎが、呻き声のように押し殺されて、室内に溢れた。

「ヒッ！」

突然、恐ろしい悲鳴が猿轡の中から飛び出し、男の痩せた裸身が跳ね上がった。

口でくわえたペニスを放し、ナースが跳ね上げる足を抱え込んだ。尻を落として痩せこけた上半身を押さえようとした瞬間、左手を柵に縛り付けた包帯が切れた。苦痛に泣き叫ぶ悲鳴を上げながら、凶暴に暴れ回る裸身が、自由になった左腕を反動に使って、一際大きくベットで跳ねた。痩せこけた身体からは信じられないほどの力で、男の上半身が不自然なほど真横に捻れ、ナースの太股を押し退けてベットの外に落ちた。

バキッという、耳障りな音が薄気味悪く室内に響き、かん高い悲鳴が男の猿轡を突いた。

縛られたままの左手首が捻れ、上半身すべての体重を支えたのだ。たとえ痩せ細った身体でも、手首だけで支えきることは出来ない。男の体重が、自分の左手首の骨をへし折ったのだ。

ナースが枕元の非常ベルを押した。あまりの凄まじさにドアを開け、室内になだれ込んでいたママとチーフが、目を丸くしてナースの裸身を見つめた。

上半身をベッドの外に投げ出したまま気絶した男の裸身を、床に降りたナースがそっとベッドに戻す。駆け寄ったママがナースに手を貸した。ベッドに真っ直ぐ横臥した裸身を優しくナースが撫でる。萎みきってしまったペニスを左手で握り、細い導尿管を亀頭の先から挿入した。

「この人も、やっと眠れる」

ナースの疲れ切った声が、凄惨な部屋の中で優しく耳に響いた。素っ裸の豊かな胸と腰が、患者を思いやるナースの気持ちを象徴しているようだ。

「びっくりしたでしょう。この患者さんはまだ三十五歳よ。肺ガンの末期なの。もう、全身にガンが転移してしまって治療の手だてがない。迫り来る死を、激烈な痛みの中で待つしかないの。あまりの苦痛に眠ることもできない。やっと、手首の骨を折った痛みが、ガンの苦痛に勝って失神することができた。残酷なことよね」

「大丈夫かい、ナース」

非常ベルで駆け付けて来たピアニストが、息を切らせながら声を掛けた。

「大丈夫よ。自分で手首の骨を折って、つかの間だけど楽になれたわ。手首に副木を当てておいてちょうどいい。明日、先生に処置してもらいましょう」

松葉杖を突いたまま呆然としていたチーフが、掠れた声を出した。

「可哀想。楽にして上げた方がいいわ。私なら堪えられない。麻酔はないの」

入院してから始めて発せられる言葉だった。喉につかえたような、聞き取りにくい言葉だった。

「あなたの場合と違って、この患者さんは死にたくないのよ。ひたすら死が迫って来るだけ。彼は生きていたいの、だからセックスにも反応するの。見ていて分かったでしょう。生への執着が、あんなに激甚な苦痛にも勝って性を求めるの。苦痛の呻きが、喘ぎ声に変わって、ペニスが十分に勃起する。逞しいほどよ。もう三日間も寝ていないのに、すがるように私の身体を求めるわ。きっと性が苦痛を癒すのよ」

自信溢れるナースの口調に応じて、豊かな乳房が揺れた。

「僕は麻酔科医の卵だけど、誰でも思ったように麻酔が効くわけじゃない。ましてや専門の医師のいない普通の病院で、麻酔に頼った終末医療が理想通り行われることはないんだよ。ここではやはり、麻酔より人と人の間で通い合える癒しの方が役に立つんだ」

枕元に屈み込んだピアニストが、男の口から猿轡を外した。ナースが萎びきった男の口から、涎まみれのガーゼを取り出す。

「自分自身で舌を噛みきりたくなるほどの苦痛なの。病院の方針で猿轡をしているけれど、私もピアニストも疑問に思っているわ。素っ裸になって患者のペニスをくわえる看護法も、もちろん違反よ。誰もしないわ。私とピアニストしかいない深夜だけの秘密。でも、これは大切な看護だって思っているの。官能の高ぶりは、確實に苦悩を癒すわ。苦しみのまつただ中にいる人を、見捨てたくないときさえ思えば、何でもできる。それが、都会に出て来た私が、やっと悟った看護法よ。今夜はたまたま腕を折って、眠ることができたけど、こんな安らかな顔付きは、私の口の中で射精するときしか見せたことがないのよ」

「凄いわ」

場違いな大声で、感に堪えたようにママが言った。

「迫り来る死の苦痛と恐怖を、たとえ一時的にしろ、癒すことができるなんて凄いことだわ。きっと、心の痛みだって癒すことができる。死んだ宏志と違って、生きたいという欲望さえあれば、それに伴う痛みは、性で癒すことができるかもしれない。ねえ、チーフ。性的な演技は、私たちのお手の物じゃない」

つかの間、末期ガンの痛苦から開放されて眠る、痩せこけた三十五歳の男を前に、ママの野望が花開いた。

カウンターの鏡の中でMの目が光った。

「ママはユニークなことを考えつくのね。同じショーでも目的が変わったってことか」

「そう。一方的に見せるのではなく、必要な人に参加してもらうわけ。ナースもピアニストも協力してくれることになったわ。ピアニストはまだ医者の卵だけど、ナースは看護婦の異端だもの。病院にいるより、この店にいた方が理想を実現できる。それに、ナースはこの地方の出身なんだ」

「呆れるほど単純な論理ね、単純明快が好きな私も二の足を踏みたくなるわ」

「どう、Mも協力しない」

「考えて置くわ。それで三十五歳の患者さんはどうなったの」

「死んだわ。二日後の深夜、ナースの豊満な裸身に抱かれて全身を痙攣させて死んで行った」

Mは、男の痛みが伝わってきそうな気がした。

本当の痛みに、性が何ほどの力を持っているのか、Mには疑問だった。

5 初舞台に上がれ

赤と黒を斜めに染め分けたサロン・ペインの看板灯が消されてからも、祐子はしばらく路上に佇んでいた。

天田に押されたバイクの車椅子の後を、まるで探偵のように尾行してここまで来てしまった。始めての尾行にしては気付かれることもなく、歓楽街まで追って来れたが、先の手段が浮かばなかった。二人は、サロン・ペインのドアの中に消えてしまったのだ。

ドアを開けて入って行こうかとも思ったが、どうも気が進まない。

看板灯の横のスペースに駐車してある、オープンにしたMG・Fが気になってしまふ。Mの車に違ひなかった。

飲み屋にまで男を追って来たと、Mに思われるのが嫌だった。Mならば、そんな思惑など気にせず、自分のしたいようにするだろうと思うと、なおさら勇気が挫ける。しかし、このまま尻尾を巻いて帰りたくはなかった。

思案し続ける祐子の目に、オープンにしたMG・Fが車内に誘い掛けているように映った。誘われるままに、窓の上がったドアに手を掛ける。暗い車内で赤く点滅している、パイロットランプが目に付いた。ドアがロックされ、盗難防止のセキュリティー・スイッチが、オンになっているに違ひなかった。

こんな場所で非常ベルを鳴らし、自動車泥棒の現行犯として醉客に取り囲まれるわけにはいかない。仕方なく車体の後ろに回り、ミドシップに置かれたエンジンカバーの上をよじ登って助手席に入る。

黒い幌を持ち上げて前に倒し、留め金を掛けた。

湿った外気が遮断され、身体の温もりが実感できる。狭い車内が祐子に、リラックスした落ち着きを取り戻させた。

なぜ、こんなにバイクのことが気に掛かるのだろうかと、ふと思った。

きっと、バイクは自分に似ているからだと答えが浮かぶ。

最近の自分自身の姿が目の前をよぎって行く。変わりたくとも変われない。それなのに、少しづつ変わって行ってしまう自分がいる。自分を取り囲む環境に強いられ、気付かぬ内に変わって行く自分が堪えられない。変わってしまった自分が腹立たしいまでに情けなく、苛立つ。そんな時間がもう、何年も続いているような気がする。まるで、蟻地獄に落ちた

姿を見るようだった。

バイクも同じだと思う。いや、身体が変わってしまったバイクの方が、より一層やるせないと思う。やり切れないはずだった。望んだこともない変化を強いられ、抗ったまま、流れる時にじっと身を晒している。

なぜバイクも私も、自ら進んで変化を求められないのか。新しい自分に生まれ変わる機会は毎日のようにある。その機会をいつも後回しにして、苛立ちながら二人とも流されて行くのだ。しかし、もう懲り懲りだった。

漠然とした未来への不安を理由に、このまま腐っていくわけにはいかない。未来のことより明日のことだ。そして、明日のことは分からぬのだから、今日という日を、今度こそ大切にしたかった。

祐子自身のためにも、バイクに変わって欲しいと願った。

「なあ、バイク。変わらなければ駄目だ」

ウイスキーのグラスを片手に、天田が大きな声を出した。

カウンターにいたMとママが振り返り、チーフとナースもフロアのテーブルに注目した。盛り上がりならないままのクラス会からは、ぼそぼそとした陰気な話し声しか聞こえてこなかったのだ。天田の大声は、場面の転換を予感させた。

「余計なお世話だ。俺は変わった。変わってしまったんだ。見れば分かるだろう。お前なんかに、言われと言われる道理はない」

酔いの回ったバイクの掠れ声が響き渡った。

ピアニストが静かな声で、諭すようにバイクに話し掛ける。

「いや、僕たちは気持ちのことを言ってるんだ。変化を認めない、変化を求めない、そんなバイクの気持ちが問題なんだ。友達として堪えられない」

「友達だって。そんなものいたのかな」

「いるからこうして酒を飲んでいる。俺は都会にいたときも、お前のことが気掛かりだった。だから、ケースワーカーになって帰って来たときから、お前の情報を集めた。今のもまじや駄目だ。酒と小娘に溺れているだけじゃないか。いいか。映子はもう死んで、いないんだ」

大きく目を見開いた天田が、ピアニストの言葉に首を左右に振っているバイクに叫んだ。
「勝手なことを言うな。何が小娘だ。祐子の悪口は許さないぞ」

顔を真っ赤に染めてバイクが言った。しかし、怒りばかりではなく、気恥ずかしさの混ざった声が、天田の舌鋒に拍車を掛けた。

「なあ、バイク。お前はもう、憧れだけを食って生きていく歳じゃないぜ。いくら酒で燃え上がらせようとしても、過去の記憶に火がつくだけだ。現実を見ろよ。なあ、バイク。お前のペニスは、たまには勃起するのか。それとも、性感が戻らないままくすぶっているのか」

残酷な言葉だった。見る間にバイクの肩が小刻みに震えだした。

「クソッ」

唇を噛みしめた口から、憎しみに満ちた声が上がった。勢いを付けて両手で車輪を回し、車椅子をバックさせて出口へ向かおうとする。

「バイク。逃げるのか」

椅子から中腰になった天田が叫ぶ。

スツールから素早く立ち上がったママが、車椅子の取っ手を握ってバイクを引き留めた。「友達は大事にした方がいいわ。性の話は重要なことよ。そんなに怒らないで話を聞きなさい」

「うるさい。赤の他人に恥を搔かされて座っていられるか」

止められた車椅子の中で全身を震わせ、バイクの怒声が高まる。

「友達に図星を指されたから怒るんでしょう。きっと欲望も強いのよね。性器のリハビリテーションはしているの」

「余計なお世話だ」

「そうかしら。若い人は、誰でも性欲が強いものよ。あなたも妄想だけでは勃起できないだけかも知れない。なぜ、努力しないの。性を求めるることは、決して恥ずかしいことではないのよ。死より勝ることなの」

静かに話し掛けるママの言葉がバイクの耳を打った。死に勝るという意味を懸命に考える。

いつも繰り返し甦る、股間の記憶が浮かんだ。オートバイの後ろに乗った映子に握りしめられた、はち切れそうなほど勃起したペニスの感覚だった。そして、下半身が爆発したような感触に続く無惨な激突音と、静寂の中で確認した映子の死。確かにと、バイクは思う。死に勝る官能があってもいい。それが俺の再生に繋がるかも知れない。二つに分かれていた道を再び、選び直すことができるかも知れなかった。

祐子のマンションのリビングで、バイクの目の前に広げられた祐子の股間が、鮮烈に脳裏を横切る。剃り上げられた無毛の割れ目から覗く可愛らしい性器と、剃刀の刃の下で怪しく蠢いていた肛門。初めて見る裸身が与えた、言いようもない喜びと苛立ち。

もう一度、この肉体が官能の喜びに震えることができたなら、死もいとわなくなるかも知れない。いや、まだ残されたままの死を、官能で彩ることもできる。

バイクの両眼が怪しく光った。

小さな希望の火が欲望の渦中に点ったが、背を向けたままのバイクの、燃える瞳を見た者はいなかった。

「さあ、チーフ。やっと出番よ」

震えの収まったバイクの肩に目を落としてから、自信を持って振り返ったママがカウンターのチーフに声を掛けた。

「気が進まないわ」

つまらなそうに横を向いてチーフが応える。

「聞こえていたはずよ。この青年は苦痛から開放されたがっているの。できるだけのことをするのが私たちの仕事でしょう」

ママが冷たく言い放す。チーフが小さく肩をすくめた。

「ずいぶん甘いショータイムね」

カウンターの中のチーフを見つめて、Mが声を掛けた。チーフの細い首の傷跡が、同意して大きく頷く。鏡に映ったママのスキンヘッドが、偉そうに後ろに反った。

「M。仕事の邪魔はして欲しくないわ」

「邪魔はしないわ。どう見てもバイクは、身の振り方で迷い続けているだけよ。可哀想な青年をS・Mショーの舞台に上げて、友達だというピアニストたちが楽しむのは悪趣味だと言いたいだけよ」

Mは、鏡の中のピアニストに視線を移して低い声で言った。

席を離れ、車椅子の横に立ったピアニストが、バイクの肩にそっと右手を置いた。

「しばらく会わない内に、MはMらしく無くなってしまったね。たかが性を楽しむのに、難しい理屈は要らなかったんじゃないのかい」

「見て楽しむだけの、スケベ根性が嫌いなのよ。少なくとも、バイクに勝手な楽しみを強要することは、いただけないわ」

「バイクが苦悩していることは事実だね、M。その苦悩を取り除く道が開けるかも知れな

いことも、また事実だ。試してみることをなぜ、Mが嫌うのだろう」

「バイクの自由な選択とは思えないからよ。ピアニストは医者の卵だから、自分の僭越さに気付かないのかも知れないね。私はどのような選択も、人それぞれの責任と人格にしか頼れないと思う」

「見解の相違かも知れないね、M。でも、今日はゲストなんだから、僕たちの新しい方法を見てもらいたいんだ」

「いいわ」

苦いものを飲み下すように言って、Mはマティニを口に含んだ。

私の求める性と、まったく違った性が求められようとしていると、Mは思った。

視界の隅で、チーフの唇が諦めたように歪んだ。チーフは勢いよくカウンターを出て、真っ直ぐ赤いドアに進む。会員制クラブ・ペインクリニックと打たれたドアを、大きく開け放った。

「天田さん。車椅子の前を持ってちょうだい」

車椅子を押しながら、ママが気軽に呼び掛けた。

二階に続く階段に渡したレールに車椅子を乗せ、ママと天田が慎重にバイクを運んで行く。

「イヤダッ」

突然バイクの口から大声が漏れたが、二人は素知らぬ振りで車椅子ごと運び上げる。

「さあ、Mも付き合ってよ」

赤いドアの前でピアニストが声を掛けた。

ナースも促すように、カウンターのスツールの後ろに立って、鏡の中のMを見据える。

三杯のマティニの酔いが回った頭が、異様な事態を拒絶していたが、Mは立ち上がって赤いドアに向かった。

黒い絨毯を敷き詰めた緩やかな階段を上る。敵地に乗り込む兵士のような感覚が頭を掠めた。何処でボタンを掛け違えたのだろうか。Mは不快な酔いの中で自問してみた。

しかし、階上の黒いドアが開かれても、答えはなかった。

会員制クラブ・ペイン・クリニックは、畳二十畳ほどのこじんまりとした造りだった。

赤と黒で構成されたインテリアはサロン・ペインと同様だ。正方形に近い室の二面の壁には、大きな鏡がはめ込まれている。入り口のある壁面には、横にバーのカウンターが通

つていて、様々な酒瓶が並んでいる。室の中央に高さ五十センチメートルほどの、黒く塗った大きな舞台があった。外車のショールーム用に使えるほどの広さがある。高い天井からは、照明灯の他、チェーンやスチールパイプなどの異様な装置が垂れ下がっている。

舞台を取り巻く形で、二十脚ほどの座りやすそうな椅子が配置してあった。室の明かりは間接照明で、豪奢な雰囲気を演出している。

車椅子に乗ったバイクが、ママと天田の手で持ち上げられて舞台に上げられた。

ピアニストが壁のスイッチを操作し、舞台の上を上品に照明する。舞台上の人物に嫌な影が差さないように工夫された、高度な照明だった。客席は、辛うじて本が読めるほどの照度だ。

Mは、二面の鏡に向かい合う一番外側の椅子に腰を掛けた。すかさずカウンターから出てきたチーフが、ハイネケンとグラスを乗せたトレーを持って来て、椅子の肘掛けの上に載せた。

「マティニはつくっていられそうにないわ。ビールで我慢して。それからM。下手な演技でも笑わないでね」

にっこりと笑い、片目を瞑って見せてから舞台の方に歩み去った。

「嫌だよ俺は、」

舞台の上から、バイクの力無い声が響いた。

Mの位置からは、車椅子の側面が見える。左の鏡に、正面を向いたバイクの固くなつた顔が映っていた。ピアニストと天田が、バイクの前の床に立ったまま並んでいる。頭の位置がちょうど、舞台に上がった車椅子のバイクの顔と同じ高さにある。

「下ろせよ」

大声を上げたバイクの両手を、ママが背後から捉え、後ろ手にして銀色の手錠を掛けた。

予想もしない成り行きに、バイクが大きく身じろぎしたが、もう遅かった。大声で悪態をつくバイクを尻目に、ママが舞台を降り、ナースが代わって舞台に上がる。

右手に持った小さなナイフの刃が、照明を浴びてきらりと光った。

無造作にバイクに近付いたナースが、無表情な顔で屈み込み、グリーンのトレーナーの襟元にナイフを当てた。そのまま慣れた手つきで裾まで一気に切り裂く。

顔を真っ直ぐに上げて、固く目を瞑ったバイクの胸から腹が露出した。女のように白い肌が、照明を浴びて柔らかく光っている。

ナイフの刃先が複雑に光り、トレーナーが縦横に切り裂かれた。残った布きれがバイク

の背から素早く取り去られる。

バイクの上半身を裸に剥いたナースは、休む間もなくバイクの腰からベルトを抜いた。今度は白の作業ズボンを切り裂く。

素っ裸にされて車椅子に座るバイクの上半身は、思ったよりしっかりとして立派だった。腰から下の筋肉の落ちた下半身がよけい無様に見えてならない。目を被いたくなるようなコントラストだった。貧相な股間で陰毛に埋まり、萎びきったままのペニスが無惨だった。

「目を開けなさい」

車椅子の上で悲惨な裸身を晒したバイクに、ナースが低い声で命じた。

全身を固く引き締めたバイクが、思い切って目を開いた。目の前の鏡を、大きく見開いた瞳で見つめる。

五年振りに見る、鏡に映った自分の裸身だった。思わず涙が頬を伝った。やり場のない怒りと悲しみが交互に全身を襲い、裸の肌が刺されたように、寒さで痛んだ。ついで、恥ずかしさが込み上げ、全身が熱く火照ってくる。目の前に立ったピアニストと天田の目に蔑みの色を見た。熱い。

「バイクだけが裸では可哀想ね。チーフ、裸になりなさい」

いつの間にか舞台の端に上っていたチーフに、ナースが冷たく声を掛けた。声に促され、バイクの前に立ったチーフが、恥ずかしそうに白いシャツとパンツを脱ぐ。パンツを脱ぐときには艶めかしく腰がくねった。

「早く、素っ裸になるのよ」

白く透き通るスリムな身体を赤く染めたチーフが、ブラジャーを外し、ショーツを脱ぐ。裸身の胸と股間を隠した長い腕が小刻みに震え、固く合わせた両膝が、恥ずかしさに戦く。

演技とすれば、相当なものだった。横から見ていたMは、舌を卷いてしまう。

「チーフ。バイクの前で正座して、恥ずかしい願いを訴えなさい」

ナースに命じられたチーフが、乳房と股間を隠した両手を下ろし、バイクの足下に跪いた。ツンと上がった小振りの乳房の先で赤い乳首が震えている。剃り上げられた股間をくねらせると、小さく開いた割れ目から性器が顔を見せた。

正座に至るまでの動作がすべて、計算された羞恥心を発散させている。美しかった。

「ねえ、バイク。お願ひだから素っ裸の私を、後ろ手に縛り上げてください。恥ずかしい姿で縛り上げた私を、思い切り責めて欲しいの、お願ひします」

背筋を伸ばして正座したチーフが、艶めかしい声でバイクに訴え、官能の世界に誘い掛

けた。

チーフの裸身にじっと見入るバイクを、取り巻いた五人が一齊に見つめた。

バイクの頬がうっすらと赤くなり、荒い呼吸に裸の胸が揺れた。反応を確かめたママが、すかさず背もたれの付いたスツールを舞台に上げる。ナースと一緒に二人でバイクの裸身を抱きかかえ、車椅子からスツールに移した。天田が素早く車椅子を舞台から降ろす。見事なチームプレーになっていた。

ママがバイクの後ろ手に掛けた手錠を外し、黒い縄の束を持たせた。

「ねえ、バイクお願い」

腰を上げて訴えたチーフが両手を床につき、頭を下げてバイクの股間に顔を埋めた。萎びきったペニスを一回、ゆっくりと口に含んでから姿勢を正し、後ろを向いて両腕を背中で重ね合わす。

バイクの股間はなんの反応も見せなかった。バイク自身、なんの感覚もない。しかし、脳裏を走り抜ける狂おしいばかりの性感の嵐が、感覚のない下半身にまで染み通っていく予感がした。バイクの全身が戦慄する。死の記憶と共に封じられた性感を取り戻せそうな気がした。

目の前で、白い背中の上に重ねられたチーフの細い腕が揺れている。バイクを誘うように、握られた手が開かれでは閉じる。手の下には細く締まったウエストが続き、目を落とすと尻の割れ目が見えた。形良い小振りの尻がゆるゆるとうねり、淫らな行為を催促する。その度に、尻の割れ目が大きくなったり小さくなったりする。乱暴に裸身を押し倒し、尻を左右に押し開きたくなる衝動が湧いた。勃起するはずのないペニスが、イメージの中でチーフの肉襞を求める。

バイクは、握っていた黒い縄を二重にして、チーフの両腕に回した。我知らず手に力が入り、キリキリと両手を縛り上げる。

「ヒィー」と、チーフの口から悲鳴が漏れた。

「縄を首に回して結び目を作り、乳房の上下をきつく縛ってください」

後ろ手に縛られながら、裸の尻を振ってチーフが哀願する。

言われるままにバイクは、自由になる上半身全体を使ってチーフを縛り上げる。上手にバイクを誘導するチーフが姿勢を変え、バイクの正面を向いた。

両乳房の上を二巻きした黒い縄が、今度は、乳房の下を走る。縄目に突き出された乳房の谷間で、上下二条の縄をバイクが一つに結わえる。

「ヒッ」と、チーフが痛みに呻いた。

「ウエストを縛って腰繩にした後、余った繩を股間に通して、恥ずかしく縛り上げてください」

「そうじゃないでしょう、チーフ。もっと正直にお願いするのよ」

横に立ったナースが意地悪く言い放った。

「ごめんなさい、バイク。私の股間を縛る繩には固い結び目を二つ作って欲しいの。一つの結び目は肉襞の中に、もう一つの結び目はお尻の穴の中にしっかり入れてください」

裸身を火照らせて恥じ入ったチーフが、再び後ろを向いた。膝を屈めて両足を開き、バイクに裸の尻を高く掲げた。目の前に露になったチーフの尻の割れ目で、逆立ちをした性器と、ヒクヒクと蠢く肛門が誘う。

バイクは震える指先で肉襞と肛門を押し開き、繩の結び目を挿入した。

「ヒー」というチーフの切ない喘ぎ声が耳を打ち、スツールに掛けたバイクの裸身全体に汗が浮き立つ。

厳しく縄掛けされたチーフの裸身がバイクの前に立った。ツルツルの股間を無惨に割った黒繩が、すぐ目の前にある。

チーフがよろけるように少し後ろに下がった。裸身の向きを変え、緊縛されたまま舞台を歩き始める。股間を割った股繩が苦痛でヨチヨチと、淫らに尻を振って悩ましく歩く。全裸後ろ手縛りの姿態から、羞恥と官能の揺らめきが沸き立つ。バイクでなくとも、息を飲む光景だった。

なかば口を開いたままの天田の喉で、唾を呑み込む音が響いた。

羞恥に悶え、ヨチヨチ、ヨチヨチと尻を振り、腰をうねらせ、喘ぎ声を上げながら、チーフは舞台を歩いた。

黒繩が食い入った尻の割れ目を目掛け、ナースの振り上げた鞭が飛んだ。

皮膚を打つ鞭音と同時に「ヒー」と長く延びたチーフの悲鳴が響いた。

鞭は何回もチーフの裸身を襲う。その度にチーフは悲鳴を上げ、股繩に戒められた尻を振ってヨチヨチと逃げ惑った。隠微なドラマが舞台を圧し、日常の感覚が消え失せていく。

赤いミミズ腫れを幾筋も尻に浮かせたチーフが、なよなよと裸身をくねらせてからバイクの足下に座り込んだ。

「ねえ、バイク。もう耐えられない。びっしょり濡れてしまった股間繩を外してください」

立ち上がって背中を見せ、鞭痕の残る尻をバイクの目の前に突き出し、恥ましく揺らせた。

顔中に脂汗を吹き出させたバイクが、股縄を解く。同時にナースがバイクを抱え、天田がスツールを取り去った。バイクの裸身が舞台の上に横臥した。曲がったままの痩せこけた膝頭が小刻みに震えている。そのバイクの顔の上に、緊縛されたチーフが跨り、静かに腰を下ろしていった。

「ねえ、バイク。私の恥ずかしく濡れたあそこを舐めて」

反射的にバイクの口が開き、待ちきれないよう長い舌が伸びた。犬のようにチーフの股間を舐め回す。

バイクの顔を跨いで不自然な中腰になったチーフが、初めて顔を振り向けてMを見た。誰も見ていないことを確かめるように視線を泳がせてから、にっこりと笑い、片目を瞑つた。迫真の演技に呑まれていたMも、やっとの思いで笑顔を返す。

鏡に映ったチーフの仕草を見たピアニストが、Mの方に歩いて来た。

「あまりの迫力に喉が渴いたの」と言ってMがグラスを差し出すと、立ち止まって首を振った。

「要りません。ただの茶番ですよ。喉が渴くはずもない。下のサロンで留守番をしてきます」

つまらなそうに言ったピアニストは、Mの返事も待たずにドアを開け、階段を下りて行った。

祐子の身体の中を長い時が流れた。MG・Fの中で夜明けを迎えるのだろうかと思ってしまい、ダッシュボードの白い時計を見る。

時計の針は十時三十分を指していた。まだ二時間しか経っていない。

「二時間も無駄にしたんだわ」

祐子は声に出して、消極的な考えを振り払おうとした。

「店に乗り込むぞっ」

大声で言ってから、そっと辺りを見回す。相変わらず人影は無い。

小心な優柔不断ぶりに嫌気が差し、とっさに幌の掛け金を外す。とにかく行動することが一番だと直感した。

素早く幌を後ろに畳み込む。オープンになった車内に冷たい外気が雪崩れ込んだ。反射

的に全身が鋭く引き締まり、壮快な気分になる。とにかくやるんだ。

祐子は車内に入った時と同様、ミドシップのエンジンルームを乗り越えて地上に立った。考える時間を自分に与えぬよう、動き続ける。

急ぎ足でサロン・ペインと書かれているはずのドアの前まで行き、文字も読まずにドアを開けた。

後ろ手にドアを閉めると、目の前に白い電話が見えた。いい趣味だと思うと、妙に気持ちが落ち着いてきた。ガラスの自動ドア越しに店内が見える。赤と黒だけのインテリアが、堂々とした雰囲気で威圧してくる。

耳にピアノの音が聞こえた。

軽快な乗りのジャズだ。父の好きな「ユード・ビ・ソー・ナイス・トゥ・カム・ホーム・トゥ」の調べに、思わず口元が緩んだ。胸を張って自動ドアを通り、店内に入った。だが、誰の姿も見えない。Mもいない。

「いらっしゃい」

背後からの出迎えの声に、内心ぎょっとして振り返った。フロアの奥の黒いグランドピアノに向かった青年が、ピアノを弾きながら顔を上げて微笑み掛けている。

家族一緒の外出時に、訪問先の家庭でよく見掛けた届託のない笑顔だった。この店にも、私と同じ環境で育った青年がいるのだと思った。精一杯気負い込んでいた気持ちが、もうくも挫けそうになる。決して好きになりたくない家庭環境が、つい懐かしくなってしまう。

「今晚は。お上手ですね」

思わず、家の躰が顔を出してしまった。

「ありがとう。君にはこちらの曲がお似合いだ」

ヴェートーベンの「エリーゼのために」が、流麗に流れてきた。素晴らしい演奏だと思う。しかし、自分の幼さを見透かされたような気がして、姿勢を正し、胸を張って、あごを引いた。また、勇気が甦って来る。

「素敵なお嬢さんが、こんなところに何の用で来たの。酒を飲みに来たとは思えないし、ひょっとして、僕のピアノが外まで聞こえたのかな」

「ピアノは素敵だけど、強すぎる自尊心はあなたに似合わない。人を捜しに来たんです」「参ったな。十年後に、絶対会ってください。きっと君もそっくりになっている」

「言っている意味が分かりません。二時間前に車椅子に乗った人が来ませんでしたか」

「ああ、君が祐子さんか。道理でMに似ている」

大きくうなずいたピアニストが、うれしそうな声で言った。

名前を呼ばれ、祐子はどきっとした。二時間の内にどれほどのが、このサロンであったのだろうか。ピアニストは祐子のことを、Mと似ているとさえ言ったのだ。

また曲が変わった。ショパンのスケルツォの二番を弾き始めた。演奏するというより弾き流す感じだ。ずいぶん音を省いている。

「バイクもMも、二人とも二階にいますよ。横の赤いドアが階段に通じている」

「ありがとう」

頭を下げて、赤いドアに向かった。

「でも、行かない方がいいかも知れない。きっとMが怒るよ」

「私は、自分の行動は自分で決めます。Mに怒られても構わない」

ピアノの音が唐突に止んだ。立ち上がったピアニストがゆっくりと祐子の前に回って来る。

「何でも自分で確かめないと気が済まないのかい」

「いいえ、そんなことはないわ。重要だと思ったことだけ自分で確かめたいの」

「失礼だけど。ひょっとして毎日が苦痛なのかな」

「そうよ」

「そして、何とかしたいと思っている」

「そう」

ピアニストの太い眉が眉間に寄せられた。小さく溜息をついてから肩を落とす。この街で会う女性はみんな、正直すぎると思ってしまう。なぜ、装いきった自分を許せないのだろう。

「案内はしないけど、どうぞ二階に上がってください。僕はまたピアノを弾くよ。リクエストはあるかい」

「グレツキの悲歌のシンフォニー」

「弾けないな」

「さっきのジャズでいいわ」

言い捨てて、祐子は赤いドアを開けた。一瞬後ろを振り返ると、遠くを見る目でピアニストが祐子の目の奥を見た。祐子は黙ったまま赤いドアを通った。

階段を上がって行く背にまた「エリーゼのために」が聞こえて来た。クックックッと笑

うピアニストの声も聞こえた。

ピアニストが階下に去ってから、三十分は経つだろうか。

Mの左側の鏡の中に、大きく広げられたチーフの股間が映っている。後ろ手に縛られたまま仰向けになったバイクが、無理に頭をもたげ、舌先で股間を追う。意地悪く股間が揺れて舌先を掠める。血走ったバイクの目が開かれた陰部を見据え、全身を震わせて苛立つ。

素っ裸で後ろ手に縛られたチーフは、両足を大きく開き、曲げた両膝を縛った縄と腰縄で、天井から吊されていた。ちょうど股間が、バイクのもたげた口に触れるほどの高さで、悩ましく裸身をくねらせている。

裸身の揺れに応じてバイクの舌が股間を這い、性器や肛門を舐める。その度にチーフの口から淫らな喘ぎが洩れ、裸身を吊り下げた縄がギシギシと鳴った。

ついさっき、黒い服を脱ぎ捨てたナースの豊満な裸身が、バイクの萎えた下半身に被さっていた。萎びきったペニスを両手でしごき、口でしゃぶる音が不気味に響く。

全身から汗を滴らせて、苦悶するように蠢き、チーフの股間を追うバイクの口から低い呻き声が洩れ、唇の端を涎が伝い落ちる。

凄惨な光景だった。これで勃起しなければ、バイクの性は甦らないだろうと、Mにさえ思われるほどの修羅場だった。

「頑張れバイク。もう少しだ」

興奮した天田の、格闘技を声援するような声が飛んだ。

Mは苦い笑いを呑み込んで、空になったグラスにハイネケンを注いだ。チーフとナースの迫真の演技を笑うのは不謹慎と思えるほどの熱狂が、クラブ・ペインクリニックの舞台を支配していた。

一人で舞台の下に立ったママは、醒めきったビジネスマンの目で舞台を見ている。そして立ち去ってしまったピアニスト。舞台鑑賞をチーフに勧められたM。それぞれの思惑を呑み込んで舞台は進行していく。

バイクは無我夢中だった。

自由になる上半身をナースに後ろ手に縛られ、舞台の上に仰向けに寝かされている。顔の上に吊されたチーフの股間が、舌を誘って揺れる。

素っ裸になって股間に被さったナースの豊かな裸身が時折、腹に密着する。頭の中は既

に真っ白になり、スパークする青い光が滅茶苦茶に錯綜して行く。しかし、思念の深奥で渦巻くドロドロとした粘液質の感情の固まりが、じわじわと肥大し、感覚のない下半身に滲出していく予感があった。その予感に、バイクは全身全霊を賭けようと思った。もはやプライドも羞恥心もない。ただ、かつて死と隣り合わせに存在した、官能の極みだけを求めた。それが生き残った者の、死に対する抵抗でもあるかのように激しく悶えた。バイクは映子を、祐子を、そしてチーフヒナース、あらゆる女の妄想を喚起し、この舞台に上げたいと欲した。

固く目を瞑ると、舌に触れる粘膜の感触が脳の一点に収束する。鼻を打つ性器と肛門の匂いが、さらなるステージに引き上げる。祐子とチーフの剃り上げられた股間の、手と舌の感触が統合されて一体となる。

その時、何の感触もない下半身の奥に一点、消え入りそうな熱を感じた。バイクは、その小さすぎる熱源を必死に追い、舌を突きだしたまま「エイコ、ユウコ」と、胸の奥で大きく叫んだ。

声にならぬ自分の叫びの代わりに、遠くではっきり、小さな声が聞こえた。

「バイクッ」

階段を上りきってそっとドアを開いた祐子の目に、明るい舞台が飛び込んで来た。舞台の上では、三人の裸体がもつれ合っている。後ろ手に縛られたまま天井から吊り降ろされた女の、無惨に押し開かれた股間を舌で追う裸の男は、一目でバイクと分かった。

あまりの驚愕に、叫びそうになったが、声を押し殺し、一心にバイクを見た。目を被いたくなる淫らな場面にも関わらず、バイクの真剣な気迫が伝わってくる。全身に吹き出した汗が、美しく照明に光っていた。

醜いほどに押し広げられた女の股間を、一心不乱にバイクの舌が追う。艶めかしい女の喘ぎと、狂おしいバイクの呻きが、まるで二重唱のように耳に響いた。ああ、バイクは今、変わろうとしているのだと思った。

思った瞬間、涙が頬を伝い、凄惨な情景に美しい靄が掛かった。その時、無意識にバイクを呼ぶ声が、口をついた。

固く瞑っていたバイクの目が、靄の掛かった視界で大きく開かれたのが分かった。「ユウコッ」と応える声も確かに聞こえた。

「祐子」

三メートル前に立ち尽くす祐子に呼び掛けて、Mはビールの載ったトレーを床に投げ捨てて立ち上がった。

大股で祐子の横まで行き、右手をつかんだ。

「祐子、何しに来たの。あなたの来るところではないわ」

「バイクを追って来たのよ。ほら、あんなに真剣なバイクは初めて見た。きっと、バイクは変わることができる」

Mは、興奮して言いつのる祐子の右手を強く振った。

「バイクとあなたがどんな関係にあるか知らないけど、他人のプライバシーにそんなに関わっては駄目。冷静になりなさい。あなたは中学生よ」

中学生の一言を聞いた祐子が、全身を固くしてMの顔を見上げた。

「Mに歳のことを言われるとは思わなかった」

とっさの言葉に詰まったMが、ゆっくりと続けた。

「祐子と議論をする気はないわ。私は大人のすることをするだけよ。さあ、帰りましょう。送っていくわ」

「私は帰らない。バイクを応援する」

祐子の言葉を最後まで聞かず、Mは平手で祐子の頬を打った。強引に祐子の右手を引いて、左手でドアを開けた。仕方なく従った祐子の背を「祐子待ってくれ。もう少しなんだ」という、バイクの悲壮な叫びが打った。

祐子の足が止まったが、Mは構わず強引に階段を下った。

祐子の声と姿がバイクの下半身に秩序を与えた。ペニスの存在がおぼろげに認識できた。後はこの道筋を一心に突き進めばいいとバイクは思った。死と道連れになった性の開放も近い。歓喜の声を祐子に聞かせたいと思った。

しかし、視界の隅から祐子が去り、ドアが閉じられた。

少し遅れて、恥ずかしさがバイクの覚めた頭に宿った。無様な姿を祐子に見られたのだ。捨てたはずのプライドと羞恥心がブーメランのように戻って来た。

茶番だとさえ思う。

死も性も宙ぶらりんのまま、見えない振りをしておけば良かったと思った。

混乱していくバイクの思念の中で、ただ一つ、ぼんやりとしたペニスの感覚だけが、今

夜の事実として残った。

今さら後戻りなど、できはしない。

大きく裂けた意識の中で、ぽつりと点った官能の火が、逃げて行くバイクに追いすがつていった。

6 祐子の見聞録

無為な時が二か月もの間、祐子のカレンダーの上を撫でていった。

埃の溜まった時を洗い流すように、今日も驟雨が襲う。

窓ガラスに絶え間なく風雨が吹きつけ、断続的に閃光が煌めく。時折、落雷する轟音が耳をつんざいていった。

祐子はベッドから立って行って、アンプのボリュームを上げた。グレツキの悲歌のシンフォニーが、やっと悲しい調べを主張した。ついでにディスプレーの時計に目をやる。まだ六時三十分だ。雷雲で真っ暗になった窓の外が、時間の感覚まで奪っていく。

特に感慨もないまま、中途半端に九回目の夏休みが終わる予感がした。

両親に無理やり誘われて行った、初めてのヨーロッパ旅行も、空しかった。

ベルリン、ケルン、ブリュッセル、パリ、ミラノ、ローマ、そして足を伸ばしたバルセロナも、もはや夢の中だ。

行く先々のホテルで、両親は祐子に気を使いながらも、浮き浮きして夫婦の部屋へ引き上げて行った。異国の独りぼっちの部屋で祐子は、久しぶりに両親の官能が燃え上がるのだろうと思った。

まだ幼い頃、寝室の戸の隙間から見た、素っ裸の両親が絡み合う姿態が脳裏に浮かんだ。後ろ手に縛られたまま大きく股間を広げ、猛々しいペニスを突き出していた父。その股間に蹲ってペニスをくわえ込んだまま、大きな尻を淫らに振っていた母。覗き込む祐子の視線を捉えた父の、恐怖に満ちた目。叫び声を押し止めた黒い革の猿轡。

未だ忘れることのない場面が与えた衝撃で、幼かった祐子は自らの心を閉ざしてしまったのだった。しかし、その後の事件で、空っぽの隙間を埋めるために性を追い求める人の気持ちが、なんとなく受容できるようになった。

でも、初めて着いたベルリンの街で、祐子に内緒で乗馬鞭を買って来た両親の行為は、露骨すぎて許せなかった。

買い物袋の底に隠されていた、あのしなやかな皮鞭が、旅先で素っ裸に剥かれた父の尻を夜毎打つかと思うとやり切れなかった。

真剣な表情で性を追い求めたバイクの姿を、間近に見たにもかかわらず、両親の官能に戸惑う自分が、妙に情けなくもあった。

「待ってくれ。もう少しなんだ」と、Mに連れ去られる祐子の背に呼び掛けたバイクの声が何度も耳に甦った。

前後左右に揺れる、天井から吊り下げられた剥き出しの女の尻の下で首を曲げ、祐子を見上げたバイクの目は、何を訴えようとしていたのだろう。

確かにバイクはあの夜、大きく変わろうとしていたと確信できる。そのために祐子を求め、引き留めようとしたに違ひなかった。

Mに頬を張られたくらいで、抗いもせず連れ去られた自分が悔しくてならない。悔やむ気持ちを引きずったまま、気に染まぬ海外旅行で夏休みのほとんどを過ごしてしまった。

来年度予算の概算要求で忙しくなると言つて、父は都会に戻つて行った。その父を追つて母は、毎週末をまた、都会で過ごしている。

やりきれなさだけが、この街に帰つて来た祐子を押し包む。

あの夜から八回、週末があったのに、バイクは散歩に誘いに来なかつた。

別に、祐子がバイクを訪ねて行けば済むことなのだ。訪ねる機会は毎日のようにあるのに、裸で悶えていたバイクを見捨てたようなわだかまりを、乗り越えることができない。あの夜、サロン・ペインに行ったことが悔やまれたりもする。じつとしたまま、腐ったような時の流れに身をまかしていることが、情けなく、悔しかつた。

一際大きく雷鳴を轟かせた後、速い速度で雷雲は遠ざかっていった。

明るさの戻つた窓辺に、急に温気が満ちる。

祐子は長い髪を振つて、黒のショートパンツとタンクトップを脱いだ。スリムな裸身が、明るさを取り戻した窓からの光に揺れる。

突然、リビングの電話が鳴つた。

裸のままエアコンの効きが良いリビングに入り、受話器を取る。汗ばんだ肌が冷気に反応し、全身の肌が緊張する。バイクに剃つてもらったきりの陰毛が、いがぐりのように太股を突いた。

「サロン・ペインですが、バイクはいます」

女性の落ち着いた声が受話器に流れた。背筋が思わず緊張する。

「掛け間違いですか。ここにバイクはいません」

どぎまぎしながら、月並みな対応をしてしまつた。

「いいえ。掛け間違いではないわ。この間、二階のクラブに見えたお嬢さんでしょう。確

か祐子さん」

「はい、」

返事をしたまま、祐子は様子を窺った。

「あれからずっと、バイクは予約通り毎週末、店に来ていたのよ。それが前回から連絡もなく休んでいるの。今日も、時間になんでも来ない。あなたなら何か事情を知っていると思って電話したの。迷惑だったかしら」

「申し訳ないけど。言っている意味が分かりません。予約って、何の予約なんですか。テーブルの予約ですか」

官能を追い求めるバイクの切羽詰まった姿が臉に浮かんだが、口を突いた答えは素っ気なく、嫌味なものだった。少しでもバイクのことが知りたいのに、まったく嫌になってしまふ。

「ごめんなさい。バイクが祐子さんのことばかり気にしていたから電話したの。何も知らないとは思わなかった。忘れてください」

電話が切られる気配に、祐子がうろたえた。まったく根性無しだと、我ながら思う。

「待ってください。ずっと旅行中だったので、戸惑ってしまって。こちらこそ誠意が無くて、ごめんなさい」

祐子の縋り付くような声に応えて、受話器の向こうでフッと息を吐く音がした。

「ご迷惑でなかつたら、お話を伺いたいの。これからお店に行っていいですか」

返事のない受話器に、痛いほど耳を付けて待った。

「いいわ。今、次の人が入っているから、一時間後に来て」

事務的に応え、電話が切られた。病院の受付で嗅いだ消毒薬の匂いが、記憶の底からわき上がってくる。

祐子はそのままバスルームに向かった。約束の時間までに、汗を流す時間は十分にある。久しぶりに、伸びた陰毛を自分で剃ろうと思った。

気合いを入れて、後ろ髪を引かれる思いで後にしたサロン・ペインを、再訪しようと思ったのだ。

雷雨の上がった歓楽街の端で、赤と黒を斜めに染め分けたサロン・ペインの看板灯は、今夜も灯が入っていなかった。祐子は構わずドアを開き、電話室から店内に通った。

胸を張ってカウンターの前に立つ。

プレスの効いた白の半袖シャツを着たチーフが、カウンターの中から訝しそうな目で祐子を見た。

「いらっしゃい、お嬢さん。喫茶店と間違えてしまったのかしら」

「さっき電話で、伺う約束をしてあります」

着替えてきたばかりの白のタンクトップの胸を張って答えた。父にミラノで買ってもらった金のネックチェーンが、首で揺れた。

「そう、ママのお客なのね。ママはもうすぐ降りてくるはずだから、スツールに掛けて待ってね。ミルクでもお出しするわ」

意地悪い笑みを浮かべたチーフが、目でスツールを示した。

「飲み物は要りません」

ミルクという言葉に赤くなった頬を意識して、顔を伏せたまま長い足を折ってスツールに座った。白い麻のパンツが、気持ちの良い衣擦れの音を立てた。剃り上げたばかりの股間にヒリッと刺激を感じた。

祐子はチーフの客あしらいに負けまいと、背筋を伸ばし、真っ直ぐ顔を上げた。チーフの首筋の赤いスカーフが目に入った。思い切って視線を上げ、冷たい視線をしっかりと受け止める。

「私はどうも、お嬢さんというものが好きになれないのよ。あなたも、場違いな感じがするでしょう」

「お嬢さん育ちは私の責任ではないし、場違いな感じもしません」

チーフの目を見つめたまま、股間に力を入れて答えた。ショーツを穿いていない股間がまた、太股に触れてヒリヒリとする。しっかり応じられたと思った。

「元気なお嬢さんね。そんなに片意地張っていると、喉が渴くし、股の間も乾ききってしまうわ」

チーフの目が光った。怪しい目の輝きが、素っ裸で天井から吊されていた若い女の目を思い出させた。

あの夜、感に堪えて「バイクッ」と呼び掛けたとき、後ろ手に縛られて股間を大きく広げられていた女が、顔を上げて祐子を見た。その時の、場違いに覚めた視線が目の前のチーフの目と重なる。祐子はハッとして目を伏せてから直ぐ、視線を戻した。

目の前のチーフの美しい顔が大きくうなずく。吊り下げられた照明を浴びて、赤いゲランのルージュが短い軌跡を描いた。

「バイクが来た日に飛び込んで来たお嬢さんね。Mに、お仕置きされて改心したんじゃなかったの。子供の来るところではないわ」

祐子が顔を真っ赤にして下を向いてしまったとき、後ろから掠れた声が聞こえてきた。
「待たせてごめんなさいね。チーフの悪口は気にしないで。彼女は生理中なの」「チッ」と、チーフが小さく舌打ちする。

目の前の鏡の中で、スキンヘッドの頭を輝かせた大柄な女性が近付いて来る。電話の女性と同じ声だった。

「いらっしゃいお嬢さん。バイクの友達だから、祐子と呼ばせてもらっていいわね」

大きな尻で隣のスツールに座ったママが椅子を回し、祐子の横顔に言った。慌ててスツールを回した祐子が、うなずきながら「初めまして」と答える。

「いいえ、この店の者は皆、祐子に会うのは二回目よ。もっとも、あなたはバイクの姿しか覚えていないかも知れなけれど」

素っ裸で横たわったバイクの姿が目に浮かび、祐子の頬がまた赤く染まった。

「この店に来て赤くならなくていいのよ。祐子が赤くなってしまったら、素っ裸のまま股を開いて吊り下げられていたチーフが、穴に入りたくなってしまうわ」

横を向いたチーフの頬にさっと朱がさして、消えた。黙ったままママにコニャックのグラスを差し出す。

「祐子にも飲み物を出しなさい」

「ミルクしかないわ」

「意地悪は止しなさいチーフ。ジンジャエールを出して。いいわね」

チーフをたしなめてから、祐子の目を見て言った。

祐子が小さくうなずくと、ゆっくり話し始める。

「祐子にどれだけ理解できるか分らないけど、大人の話し方で話すわね。いい。性の話よ、聞きたくなかったら帰ったほうがいいわ。この前はMに助けられたようだけど、今夜は自分で決めるしかないわ」

「聞かせてください。あの時も、私は残りたかったんです。ショックは受けたけど、バイクの真剣な態度に感激したんです」

はっきり祐子が答えるとママは前を向き、鏡に映った祐子の目を見てにっこりと笑い、先を続けた。

「バイクは五年前のオートバイ事故で、性的不能になってしまったの。思いを寄せていた

少女はその時死んでしまった。死から見放されたバイクは、性の不能を抱いて生き残ってしまった。その時から、死への希望と官能を求める欲望の、失われてしまった二つの道がバイクを責め苛むことになったの」

「でも、生きていくバイクは、変わつていけたはずよ」

救いのないバイクの姿に耐えかねて、祐子が口を挟んだ。

「そう、生きていくと決意すれば変われたかも知れない。現実に、変わろうとして苛立ち、苦悩したかも知れない。でもね、失われた道を求めるバイクに、一切を諦めきれるはずがないの。だから祐子と出会い、祐子の中に自分の過去のすべてを投影して、記憶の中に閉じこもったまま過ごすことを選んだのよ」

「いいえ、私というときは現実を見ていたように思う」

「祐子は何が現実だと思うの。あなたとバイクが二人きりでいるときのこと。それはやはり、お話の中の出来事よ。だからあの夜、バイクは性能力の回復にあれほどの努力をした。あの夜のバイクは、初めて現実と向かい合ったの。きっと、祐子が来たときには、ペニスが勃起しそうな感触を味わっていたはずよ」

無様に広げた股間を晒し、萎びきったペニスをナースの口にくわえさせていた陰惨な光景が瞼に浮かぶ。

「なぜ、勃起できなければ変われないのかしら」

口に出してから、祐子の頬が真っ赤に染まる。

「決まってるじゃあないの。勃起した物を、祐子の股間に突っ込めるからよ。ただの茶番だとは思うけどね」

カウンターの中から、冷たくチーフが口を挟んだ。

「黙りなさいチーフ、だから何だというの、自分の仕事でしょう。ねえ、祐子。バイクは性を取り戻すことで、祐子と対等になれると思っているの。今でも対等だと、あなたがどう言いつくろおうと駄目。これは、バイクの心の中の出来事なの。そして、勃起できそうになったことは事実よ」

祐子は下を向いたまま、あれこれと考えを巡らせようとした。しかし、明るい舞台の上で繰り広げられていた陰惨な光景と「待ってくれ。もう少しなんだ」という、バイクの悲痛な呼び掛けしか浮かんでこなかった。

「分かったわ。それでバイクはどうなったの」

「とんだ根性無しよ」

またチーフが口を挟んだ。今度はママも止めようとしない。構わず話を続けた。

「ピアニストと天田さんが、毎週末にクラブ・ペインクリニックに通えるように手配したの。もう少しで勃起できるかも知れないと確信したからよ。二階のクラブは性の治療室と思ってくれていいわ」

言葉を切って、ママはグラスのコニャックを舐めた。祐子もジンジャエールのグラスに口を付けた。

「結論から言うと、治療の効果が思ったように表れてこない。祐子に見られたことが、負担になってしまっているらしいの。きっと、大好きなあなたに見られたことが、恥ずかしくてたまらなくなったのよ。人一倍欲望が強いし、希望も見えかかっていたから暫く通つて来たわ。でも、いつも、もう少しというところで、」

「私の肛門を舐めながら泣き出すのよ。祐子許してくれ、なんて言って泣くんだから呆れる。最低な奴ね。生き残ったのも無理ないかも知れないわ」

チーフが吐き捨てるように言った。

「今日で二週間も来ないわ。天田さんが探しに行っても居留守を使っているらしい。何とかしたいと思って、祐子に電話をしたわけ。あなたの協力がないと、バイクは元に戻ってしまうわ。せっかく生きる気力が湧いてきたのに、残念でならないのよ」

「協力します」

頬を伝う涙に霞む目でママの目を見て、反射的に祐子が言った。

「へー、お嬢さんが素っ裸になって、バイクに股間を縛らせてやるのかしら。あんなに縄が好きな奴も珍しいのよ」

何ほどのことがあると思い、祐子は顔を上げてチーフの目を見据えた。

「怖い顔で私を見ないでよ。バイクが欲望が強いのは事実だけれど、勝手にそれに乗って遊ぶ必要はないってことが言いたいの。もっと自分を大切にした方がいいわ。お嬢さんは処女なんでしょう」

処女という不毛な言葉が、祐子の耳に突き刺さった。

「やあ、今晚は。また会いましたね。十年待たなくて済んでしまった」

背中から声を掛けられ、チーフの横に視線を移すと、鏡の中で笑っているピアニストと天田の姿があった。

「やあ、後輩。中等部の制服姿も素敵だけど、私服だとずいぶん色っぽいね。バイクが悶

え苦しむ気持ちがよく分かるよ」

「その、制服姿が素敵なお嬢さんが、バイクのために素っ裸で縛られる決心をしたところよ。天田さん、早くバイクを連れて来て」

チーフが、根に持ったように祐子をいびった。

「チーフは、Mのこと焼き餅を焼いているだけよ」

ママの声が大きく響いた。両手で磨いていたクリスタルのグラスが、チーフの手から落ち、碎け散る音が後に続いた。

祐子は視線をずらしてチーフを見た。憎しみのこもった視線がじっと、祐子の瞳に注がれている。初めて見たと思う、嫉妬の視線だった。しかし、不思議に恐ろしさは感じなかった。祐子は股間に力を込め、激しい視線をそのまま跳ね返した。力無くチーフの視線が外れる。決して愉快ではなかった。心の隅に、濁のようなわだかまりだけが残った。

「ナースはいないの」

何気ない風にピアニストが聞いた。同様にママが答える。

「今日は休みを取って、鉱山の町に出掛けたの。もう帰った頃だと思うわ。向こうに子供がいるのよ」

「ふーん、ナースも苦労人だね」

「何言ってるのよ。ピアニスト以外はみんな苦労人よ」

一緒になって笑う声を耳に、祐子は鉱山の町が気に掛かった。

「子供の名を知りますか」

「修太って言っていたわ。あんなに母性的なナースだから、子供を置いてきたことをひどく気に病んでいるのよ。祐子は、その子を知っているの」

祐子は答えなかった。離婚して都会に出たという修太の母が、この街に帰って来ていたのだ。間違いないはずだった。職業も、修太が自慢していたとおり、看護婦で一致していた。

急に喉元が苦しくなる。鉱山の町に一人残った修太はどうしているだろうと思った。

「修太はどうしているだろうね」と、二か月前に水道山でつぶやいたMの声が耳元を掠めた。やるせないほどの懐かしさが喉元に込み上げて来る。

鏡に映った祐子が大きく首を振った。

バイクのために裸になり、後ろ手に縛られて股間を広げてもいいと、改めて思った。私は、成長したんだ。

ピアニストと天田が、カウンターのスツールに掛けた。

祐子を抜きにして、ひとしきり他愛のない話が続いた。

「せっかく後輩が協力してくれるんじゃあ、今日は無理にでもバイクを連れ出せば良かつたな」

ウイスキーのグラスを右手に持つて、天田が脈絡もなく言つた。話はバイクの話題に戻ってきた。

「ねえ、後輩は知っているだろう。バイクは古い大きな家で、お婆さんと一緒に暮らしているんだ」

「知らなかったわ」

「へー、ほんと。後輩のマンションの直ぐ前、煉瓦蔵の路地を抜けたところだよ。まあ、普通、通ることもない路地だから知らなくても仕方がないか。知らない程度の付き合いだと思えば、俺も安心だしな」

確かに祐子は、バイクの家を知らなかった。いつもバイクは織姫通りに出ていたから、訪ねる必要を感じなかつたのだ。

「ママ。そのお婆さんも最近見えないんだよ。ひょっとして病気で、入院でもしたのかな。バイクの世話はみんなお婆さんがしていたのだから、バイクも一緒に病院にいるのかもしれない。ナースみたいな優しい看護婦に、二人とも面倒を見てもらつてはいるのだとしたら辻褄が合う」

「そんな旨いわけにはいかないわよ」

ママが冷たく答えた。

「そうだよな。でも、このところお婆さんの姿は見ないって、近所の人が言うんだ。少し心配だよな。なあ、ピアニスト」

酔いの回ってきた天田が、話を周り中に振る。呼び掛けられたピアニストの顔が曇った。

祐子は鏡の隅に映つたピアニストの、眉間に寄つた暗い皺を見逃さなかつた。嫌な胸騒ぎがした。

「ピアノを弾いてくるよ」

天田に答えず、誰にともなく言って、ピアニストは立ち上がつた。

ピアノの前に座ると、「お婆さんは見えない」と言った天田の声が、耳に甦つて來た。

突然襲い掛かったに違ひない死の匂いが、ピアニストの鼻先を掠める。

自然に指先が動き、ショパンの「葬送」が殷々と響いた。到底耳に馴染まず、ワンフレ

ーズでやめる。

変わって、明るいタッチで「エリーゼのために」を弾き始める。祐子のための調べだった。

いい潮だと思い、祐子も立ち上がった。

隣に座ったママに丁寧に礼を言って、頭を下げる。

「何だ後輩、もう帰るのか。俺が送っていこう」

天田が立ち上がりと、ピアノの音が止んだ。

「よせよ。オートバイに乗せようというんだろう。五年前の悪夢が繰り返されるようだ。たいがいにしてくれ」

「弱虫。オートバイにも乗れないようじゃあバイクが泣くわ」

背中に投げ掛けられるチーフの声を後に、祐子を追ってピアニストが自動ドアの前まで回って来た。

祐子に近寄り、さり気なく耳元に口を寄せる。

「風呂場の横の潜り戸が開いたままなんだ」

はっきりした声で小さく囁き掛けた後、歩みを止めて背を正した。

祐子の前で自動ドアが開く。

「お休みなさい」

三人の声を背に「お休みなさい」と応えたまま、振り返らずに祐子は店の外に出た。

雨上がりの湿った熱い外気が、全身を包み込んだ。

服を通して直接肌に、ねばねばとした感触が張り付いてくるようだ。別れ際にピアニストが耳元で囁いた言葉が気に掛かる。祐子には何のことか分からなかった。今夜も歓楽街に人影はまばらだ。

あれこれと考えながら歩く内に、織姫通りに合流する信号が見えてきた。所々に水溜まりの残る歩道を、何も考えないようにして足早に歩く。

信号の二軒手前の四階建てのビルは、Mが勤める夕刊ポスト紙の社屋だった。

祐子の歩調が急に落ちた。

ママの話を聞いて、バイクが置かれた状況を、自分なりに理解したと思い、協力することさえ申し出たにも関わらず、Mのことを考えると、また気持ちが動搖する。

動搖した気持ちにつり込まれ、社屋の横に開いた、夜間受付の小さなドアをくぐってし

まったく。

小さな窓口から覗く初老の警備員にMの名を告げると、ちょうど残業をしていると言う。
「他に誰もいないから、二階の編集局に行ってみれば」と言う好意を、断る理由はなかつた。

警備員に会釈をして、暗い階段を上って行く。また妹に見られたのかしらと思うと、わけもなく口元に笑みが戻った。

雑然とした広いフロアに、所狭しと置かれた机の島が浮かぶ編集局の一番奥、通りに面したデスクに火が点っている。カタカタとパソコンのキーボードを叩く音が、静まり返った部屋に響く。恐る恐る近付いて行くが、Mは足音に気付いた風もなく、顔も上げずに指先を動かしている。仕事をしているときのMの集中力に、改めて感心してしまった。

椅子の後ろに立って、「今晚は、M」と呼び掛けるとやっと、パソコンのディスプレーから目を離して祐子の顔を見た。

「何だ、祐子じゃない。また夜遊びなの、いけない子ね」

いつもと違った、疲れた声を出して椅子を回した。

「迷惑だったかしら。ふらっと寄ってみたら、警備のおじさんが上にどうぞって言うから、上がって来ちゃったの」

「迷惑ではないのよ。ちょっとびっくりしただけ。後二行で記事が終わるから、隣の椅子に座って待っていて」

後二行という言葉で椅子に掛けた祐子は、たっぷり三十分は待たされた。原稿を書くときのMは、どうやら時間の感覚がなくなっているらしい。夕刊紙の締め切りは明日なのだから、とりあえず時間に追われることはないのだろうと、祐子は諦めて待った。

「お待たせ、祐子。終わったわ」

晴れやかなMの声がフロアに響き、大きく伸びをした椅子がキシッと鳴った。

「ヨーロッパに行ってたんだって。ひょっとしてベンツかポルシェを土産に持ってきてくれたの」

思わず祐子は声を出して笑ってしまった。

「ごめんなさい、そんなんじゃあないの。お土産も買ってない」

「いいわ。期待はしていなかったから。旅行の前の続きで来たのね」

いつもMの直感は鋭い。嘘はつけないと祐子は思う。

「そう、サロン・ペインからの帰りなの。このところバイクに会えないから、心配で行っ

てしまった」

「つまらないところに行ったね。下手をすると祐子も巻き込まれてしまうよ。あの人は、バイクを利用して勝手に楽しんでいるのだから。どんなことを言われても、本気にしては駄目」

Mの強い口調に、次の言葉が続かなくなってしまう。

「分かった」と念を押すMに促されて、祐子は細い首を左右に振った。金のネックチェーンがデスクスタンドの光に輝いた。

「素敵なネックレスね。向こうで買ってもらったの」

今度は首を縦に振った。

「よく似合うわ。もうすっかり大人の女に見える。身体は十分大人だものね。大人がすることを、してみたい気持ちも分かるわ。例えば性。バイクのことを巡る問題も、あの夜見たとおり、セックスが関係しているわ。この世界には、男と女しかいないのだから、性的な問題が世界の半分を占めることに不思議はないし、私も十分関心があるわ。でもそれは、皆個人的なことなの。今の祐子はまだ、個人的な性関係に入って行く準備ができていないのよ。ただ、身体の準備が終わってたってこと。バイクの問題は、個人的であるはずの性を、あの人たちが寄ってたかって友情とか、怪しい治療行為とかの、仕組みの中に取り入れようとしていることよ。きっと多くの役者を募ることになるわ。祐子も誘われるかも知れない。しかし、仕組みの中で経験した性は、個人的な性とは異質のものなの」

「でも、私が体験したとすれば、それは私個人のものよ」

「その性を求める、個人的な用意ができていないと言っているの。遊びやゲームに参加するようにセックスに参加しても、自分を見失うだけで終わるわ。回復するにはとても長い時間が掛かる。いい、祐子。セックスは社会奉仕ではないわ。自分の責任と人格が、自分自身を高めたいがために官能の極みを追うのよ。安っぽい同情や自己満足で済ましてはいけない。焦っては駄目よ。もうすぐ祐子の心の中で、高く高く燃え上がろうとする情熱が、炎になる。待つしかないわ」

祐子の身体が狂おしく震えた。剃り上げた股間に熱いものが込み上げて来る。

「もう待ちきれないほど待ったわ。毎日高ぶりを感じている。何よりもバイクが私を求めている」

「冷静になりなさい祐子。あなたは、あなた自身がくだらないと思いきっている毎日の繰り返しに苛立っているだけよ。バイクもきっと、祐子と同じ。誰だって同じ毎日を耐えて

いることに気付かないだけなの。そんな日常感覚を解決できるものは、この世に存在しないわ。セックスだろうが死だろうが、決して救ってはくれない。これだけは確信して言える」

「でもまだ、私は確認していない」

張りつめていたMの肩が落ちた。祐子はもう、決めてしまったに違いない。

長い回り道をする苦しさも知らないのにと思うと、切なさで目頭が熱くなる。残酷だった。

「祐子。はっきり言っておくわ。私は自分の目で見てしまった以上、バイクを玩具にしようとするあの人たちを許さない。ただ一点、バイクが初めての経験に、今後の自分の生き方の判断を委ねるかも知れない、という期待だけで私は黙って見ていた。しかし、バイクが易々とあの人たちの言質に丸め込まれ、祐子まで誘い込まれるとしたら、私は決して許さない。なぜなら、判断力がまだ幼すぎる子供が、やくざに騙されるのと同じだからよ。プロにはプロの対応をするわ」

祐子は、Mが敵になるかも知れないと思った。全身が凍り付いたように寒く、奥の歯がガチガチ鳴るのが分かる。巨大なMの姿が、編集局全体にまで膨れ上がり、自分を押しつぶすかも知れなかった。恐怖心が下半身に集まり、僅かの小水が股間を伝った。

「送っていくわ、帰りましょう。明日は気分が変わるかも知れない」

Mがポツンと言ってスタンドの明かりを消した。

常夜灯の中を先に立って歩くMの姿が、ともすれば闇に紛れそうに見えた。祐子には、ヒリヒリとする股間の感触だけが確かなものに感じられた。

7 煉瓦蔵の裏で

ぼんやりと点る廊下の明かりの下で、バイクは五十五回目のダイヤルを回した。呼び出し音しか聞こえない受話器に大声で呼び掛ける。

「ユウコッ俺だ、すぐ来てくれ」

叫んでから受話器を乱暴に投げ出す。暗い天井をしばらく見上げ、また受話器に手を伸ばした。五十六回目のダイヤルを回す。

雷鳴を聞きながらバイクは、何回となく受話器を取っては、そのままダイヤルせずに置いた。やっと決心が付いて、祐子の番号をダイヤルできたときはもう、呼び出し音しか聞こえてこなかった。あっけない結末に、あれほど逡巡したことも忘れ、バイクは狂ったようにダイヤルを回し続けている。

たった一つ天井に灯した侘びしい明かりの他、広い廊下を照らす光はない。幅一・五メートル、長さ九メートルの真っ直ぐ延びた廊下の先は、闇の奥で直角に曲がって玄関に通じていた。

厚い檜を張った廊下に車椅子が直接置かれている。所々ささくれ立った板が、荒廃した旧家の様子を見せていた。

南に面した雨戸はすべて閉められている。三つ並んだ座敷の障子も立てられたままだ。電話を置いた奥は、台所と風呂場に通じていた。

「祐子」と力無くつぶやいてから、また受話器を戻した。

どこに祐子は出掛けたのだろうと思った。今日は土曜日だ。つい二か月前までは、祐子と連れだって散歩に出かける日だった。

あの夜を境に、バイクは織姫通りで祐子を待つのをやめた。無様な裸身を祐子の目に晒したことが恥ずかしかったのだ。しかし、クラブのママと天田に勧められるまま毎週末、淫らな姿態を舞台で演じた。性の回復への期待が、バイクをクラブへと通わせていた。あの夜下半身に点った小さな火は、ずっと消えずにいたのだ。だが舞台の上で、萎みきったペニスが勃起することはなかった。かえって、性感の火が点ったことで妄想が燃え広がり、しきりに祐子の身体を求めた。

舞台に上げられる度に恥辱で全身が戦いたが、勃起することで得られるかも知れない、祐子と同じ地平に恋い焦がれた。一方的に叶えられない夢ではなく、叶うかも知れない可

能性へと、ぜひ這い上がりたいと思った。

しかし、妄想は妄想に過ぎない。いるはずのない祐子の姿を、手練手管に長けたチーフやナースの裸身に思い描いても、ついに虚しさだけが残った。

そして、夢が叶う前に一切が閉ざされることになってしまった。

今日の昼、初めて家を訪れたピアニストがすべてを見届け、因果を含めてから帰って行った。

「早く葬式を出せよ。バイクには、いい施設を捜す」

無理を通して、明日まで返事を待つことを了承させた。祐子に電話する気持ちも、その時生まれた。しかし雷鳴を聞きながら決心を固め、何度電話を掛けても祐子は出ない。

車椅子の背に頭を預け、大きく上半身を反らせた後、バイクはまた受話器に手を伸ばした。無音の受話器を耳に当て、ダイヤルに指先を当てた。

その時、背後の風呂場から物音が響いてきた。外の焚き口に通じる戸がギーと高い音をたてる。

「バイク、いる」

はっきりと幻聴が聞こえたと思った。祐子の声が静まり返った屋敷中に響いた。ペニスの奥で、むず痒い感触が揺れた。

去って行くMG・Fのテールランプを見送った後も、祐子はマンションのエレベーターホールに向かわなかった。じっと、通りの向かいに佇む巨大な煉瓦蔵を見つめていた。分厚い煉瓦を通り越し、裏にあるというバイクの家を一心に思い描いた。

今夜バイクに会わなければ、もう会うことが出来ないかも知れないと思った。

ヒシヒシと周りから押し寄せて来る高くて厚い壁はもう、皮膚に張り付くところまで迫っている。もしかしたら既に、身動きが出来なくなっているのかも知れなかった。少なくとも、後回しには出来ない。明日では間に合わない。一切の出口が閉ざされ、壁を打ち破ることも、潜り抜けることも、迂回することもできなくなるかも知れない。

今夜私は、サロン・ペインに行き、新聞社でMとも会ったのだ。後は自分自身の行動しかない。

祐子は、黒々としたシルエットを路上に映す、煉瓦蔵の巨大な壁を見据えたまま織姫通りを横断した。

右手に重厚な煉瓦の壁が続く路地に足を踏み入れる。

幅が一メートルちょっとの狭い路地だ。左手は高さ二メートルの黒い板塀が続いている。

天井だけが開いたトンネルに入って行く気分だった。見上げると、頭上に細長く切り取られた夜空が見える。熱く湿った大気の中で、赤い星が瞬いていた。

二十メートルほど路地を歩くと道が途絶える。正面を塞ぐコンクリート塀の前で、直角に折れる。

右手に続く煉瓦蔵の背後が途切れたところに、こじんまりとした門があった。左右どちらの門柱にも表札はない。

家を間違えたのだろうかと、弱気な考えが浮かんだが、一軒しかない屋敷を間違うはずもない。気を引き締めて門をくぐり、茂り放題の植え込みをかき分けて玄関の前に立った。しかし、玄関の戸はビクともしない。小さな声でバイクの名を呼んでみたが、応答のあるはずもない。大声を出すのは憚られる雰囲気だった。

気を取り直し、足下の土に刻みつけられた車椅子の轍を追って、南に面した庭に回る。大きな平屋建ての屋敷が全体を現す。しかし、庭に面した廊下には、しっかり雨戸が立てられている。仕方なく、一番奥に突き出している勝手口に向かった。月明かりの他には、隣の家の庭に立つ外灯の光しか射さない。暑く暗い大気が白い服をグレーに染め上げてしまうようだ。

勝手口と見えたところは、風呂場だった。使われなくなった外の焚き口の横に潜り戸がある。

「風呂場の横の潜り戸が開いたままなんだ」と、サロン・ペインの自動ドアの前で、ピアニストが囁いた意味不明の言葉が甦った。

祐子の行動を予期したように符合する言葉に驚いたが、別に疑問は感じなかった。とにかくバイクに会わなければ、これから道はないと、固く心に決めていた。

ごく自然に潜り戸に手を掛け、力を入れて手前に引いた。ギーと音を立てて戸が動いた。ピアニストの言ったとおり戸は開いていた。

「祐子、ほんとに祐子なのか」

風呂場の奥の闇の中から、バイクのうわずった声が響いた。

「ええ、私よ」

潜り戸に半身を入れたまま祐子が答える。

「よく来てくれたね、祐子。何度も電話をしたんだ。足下に気を付けて上がっててくれよ」

急に風呂場の電気がついた。小さな照明だったが、十分明るく感じた。広い風呂場だった。畳一畳分ほどはある木の湯舟の前に、高い簀の子の洗い場があった。廊下から板が渡しており、車椅子のバイクが入れるように作ってある。簀の子の隅には車止めも用意してあった。下は打ちっ放しのコンクリートだ。

「風呂場から人を迎えるのは、今日二回目だよ」

「えっ、誰が来たの」

簀の子に渡した板まで出て来たバイクが、うれしそうな声で言ったが。問い合わせた祐子には答えず、廊下に上がるよう促す。

靴を脱ごうと背を向けた祐子が小首を傾げ、またバイクを振り返った。開けた潜り戸から侵入した外気が室内の空気と混ざり、妙な臭いを嗅いだと思ったのだ。

最近、同じ臭いを嗅いだ記憶が、鼻の奥に残っていたが思い出せない。

「バイク、何か臭わない。変な臭いよ」

「古い家だから徽の臭いかな。それとも暫く風呂に入らないせいかな」

「いやね。お風呂に入らなければ汗臭くなるわ」

言ってしまってから、バイクのプライドを傷つけてしまったようで、心が痛んだ。耐えられないほどの臭いではない。

話題を変えるように、苛立った声でバイクが祐子を急かせる。

「靴は脱がなくてもいいよ。車椅子で汚れているからいいんだ」

「いえ、脱いで上がるわ」

急かせるバイクに背を向けて靴を脱ぎ、六十センチメートルほどの高さがある廊下に長い足で軽々と上がった。車椅子には不向きな造りだと思う。

「さあ、部屋の方に行こう」

「私が押すわ」

バイクの後ろに回って車椅子の取っ手を握り、ゆっくりと押して行った。

「散らかっているけど、俺の部屋がいい」

ポツンと電話の置かれた廊下の横の襖を指差す。

大きく襖を開くと、後ろからバイクが声を掛ける。

「柱の下にスイッチがある」

手探りで柱をなぞると、車椅子のバイクがちょうど手を伸ばして届くところにスイッチがあった。

高い天井から吊り下げられたシャンデリアが、複雑な光を落とした。あまり趣味がいいとは言えない照明だったが、不思議な雰囲気を十畳ほどの部屋に与えている。和室を改造した部屋は、厚い板を張ったフローリングの上に、所々が擦り切れた絨毯が載せてあった。

奥の壁沿いにゆったりとしたロー・ソファーと椅子が置かれ、前に大きなテーブルがある。開きっぱなしのクロゼットを挟んで、ダブルのロー・ベッドが置いてある。乱雑にベッドカバーが掛けであった。

部屋の中央には何もなく、大きく空いている。部屋全体が車椅子で動きやすい配置になっていた。

「祐子、奥のソファーに座れよ」

後から入って来たバイクが襖を開けたまま、席を勧める。

エアコンがない割には、むっとする暑さは感じなかった。締め切っているにも関わらず、空気が流動しているのが肌で感じられる。自然と暮らす昔の人の知恵が伝わってくるようだ。

「本当によく来てくれたね。何度電話しても留守なので、マンションに行って待っていようかと思っていたところだった」

テーブルを挟んでソファーに掛けた祐子に、バイクが熱い声で同じことを言った。本当に言いたいことを言い出しかねている素振りに見える。

「サロン・ペインに行っていたの。新聞社でMとも会った。バイクに協力しようと決心が決まったから、突然訪ねて来たの」

「俺に協力するって、何のこと」

バイクの喉仏が大きく動くのが見えた。いつも意地を張っているのだ。

「サロン・ペインのチーフは、素っ裸になって股間を縛らせることだと言ったわ」

あっさり言い切っても、何の動搖も感じなかった。顔も赤くならない。やはり、バイクと対等の立場にいないということなのだろうか。祐子は焦りに似た悲しみを感じた。

かえってバイクが動搖した。脂ぎった顔が細かく震える。何回となくまばたきした後、どもりながら言った。

「そんなこと、して欲しくない。俺は本当の姿を、祐子に知って欲しいだけだ」

「もう、知っているわ。今夜は、私の本当の姿を知ってもらいに来たの」

口を開こうとするバイクを制して、祐子は立ち上がった。

「本気よ。見て」

白のタンクトップを脱ぎ、麻のパンツを脱いだ。

首に掛けた金のネックチェーンだけになった裸身が、古風なシャンデリアの明かりを浴びて白く輝く。剃り上げたばかりの股間で、小さな性器が固くなつた。両の乳首も上を向いて震える。マンションで裸身を見せたときと、まったく意気込みが違うのだ。

「さあ、バイク。私を縛って好きなようにして。ペニスが堂々と勃起して、射精するまで私を責めて」

祐子の裸身を見上げるバイクの目が怪しく光つた。車椅子に乗つた全身が小刻みに震える。

「いいのか」

「当たり前よ」

背筋を正して言い切つた祐子を、振り扇ぐように見つめたバイクが車椅子を回し、ベッドの方に向かう。

自力で車椅子から降り、ベッドに腰を掛けたバイクが自分を納得させるように大きくうなづいてから、しっかりした声で命じた。

「祐子、こっちに来て、俺の服をとれ」

バイクの前に裸身を屈め、祐子は青いアロハシャツのボタンを外した。シャツの下は素肌だった。プーンと汗の臭いが鼻を打つた。

何気ない顔で腰のベルトを外し、ズボンを脱がせ、青いトランクスを脱がせた。股間からムッとする臭いが立ち上る。細い両腿の間に、陰毛に埋もれたペニスが、縮こまつた顔を見せた。汚れきつた股間だった。

風呂に入っていないと言うバイクの言葉は本当らしかつた。ベッドに座つた裸身から、獣の臭いが部屋中に立ちこめた。祐子は我慢してバイクの前で正座する。

バイクの目の前に、背筋を伸ばして正座した祐子の頭があつた。心持ちあごを引き、真っ直ぐバイクの目を見上げる姿が輝くばかりに美しかつた。股間で萎みきつたペニスの中で、ポッと点つた火が大きく燃え上がる予感がした。ベッドのサイドボードに手を伸ばし、黒い縄の束を取り出す。

祐子は両膝を擦つて後ろを向き、長い両手を背中で組んだ。姿勢を正したままうなじを下げ、バイクが縛りやすいように少し上体を前に屈めた。

「容赦せず、きつく縛ってください。身体が感じる痛みは、みんなバイクの傷みだから、遠慮せずに私に分けてください」

背に交差した両手が荒々しく握られ、手首をザラザラとした縄の感触が襲った。即座に、全身の皮膚が緊張する。もう引き返せはしない。祐子はじっと目を瞑って、首筋近くまで引き上げられた後ろ手を固く握り、ヒシヒシと縛られる痛みに耐えた。

ほっそりした首の下で結び目を作つて、二重になった黒い縄が乳房の上下を二巻きして背中で止められた。

「前を向きなさい」

バイクの両手が愛おしそうに両の乳房を撫で、乳首を摘む。

「ヒッ」

初めて乳首を摘まれた祐子の口から、短い悲鳴が洟れる。

何度も、何度も、飽きることなくバイクは縄目からこぼれた乳房を撫で、強弱をつけて乳首を摘んだ。祐子の口を突く痛みの声がいつしか、悩ましい呻き声に変わる。

言い表せないほどの甘い切なさが両の乳首に満ち、これまで感じたこともない熱い感覚が祐子の下半身に集中する。剃り上げた股間の奥で、じつとりとした感触が溢れ出した。バイクの荒い息遣いが、更に気持ちを高める。

別の黒縄を取り上げたバイクが、乳房の谷間で上下の縄を一つに結わえた。両の乳房に鋭い痛みが走り、縄で挟まれ醜く変形した乳房が、縄の間から洋梨のように突き出された。

バイクはそのまま縄を下ろし、祐子を中腰にさせた。縄でウエストを二巻きし、臍の下で結び目を作つた。余った二条の縄尻にも大小二つの結び目を作る。

「この縄尻で祐子の股間を縦に縛るよ。痛いけど我慢しなさい。身体の中に二つの結び目を入れるけど、祐子は処女だから大きい方を肛門に入れる。さあ、後ろを向いて膝を曲げ、尻を高く突き出しなさい」

祐子は言われるままに後ろを向き、後ろ手に緊縛された不自由な体で、尻を高く掲げた。

「膝を折って両足を広げなさい。尻の割れ目を一杯に広げるんだ」

不自然な姿勢で突き出した尻を、バイクの手が撫で回す。外気に触れた股間が一瞬、寒さを感じた。

じつとり濡れた陰部をバイクの指先が這い、固くなつた性器の先をつつく。溢れ出した愛液を指先で掬つて、性器と肛門に塗り込めるようにして指を這わす。再び祐子の喘ぎが激しくなつた。

反応を見透かしたように、バイクは素早く二本の縄で性器を挟み、縄の結び目を解きほぐした陰門と肛門に挿入した。

突き出した尻の割れ目から脳へと、鋭い刺激が祐子の裸身を貫いていく。

これがチーフの言っていた、股間を縛られることかと実感した。過酷な縄目だった。

「ヒィー」と長く尾を引いた呻きが、残酷に股間を割られた祐子の口に溢れた。

バイクの耳に祐子の悲鳴がこだました。研ぎ澄まされた聴覚が祐子の悲鳴を、喘ぎを、呻き声を、一つ残さず聞き取る。指先から伝わる陰部の温もりや、固く突き立った性器の感触、まといつく肉襞、つぼまつては開く肛門の動き。そうした一切の刺激が今、視覚に収束する。

白く透き通った尻の暗い割れ目で、祐子の秘密がすべて蠢いている。剃られたばかりの陰毛が、ごま塩のようにピンクの肛門の周りを飾っている。その中央を割って残酷に走る二本の黒縄。縄に挟まれて突き出された固く尖った性器。不自然に膝を曲げて押し開いた太股の裏側が、微かに震えているのも見える。

バイクの五感のすべてが官能に燃え上がる脳で統合され、凄まじいエネルギーとなって股間へと落下する。糸のように細くなったペニスの隘路へと、全ての官能が突き進んだ。

ペニスの奥で点った小さな火を目指し、奔流となった官能は将に、細すぎる隘路を突き破ろうとしていた。

「ユウコッ」

高い喘ぎ声がバイクの口に溢れた。全裸後ろ手縛りに緊縛され、股間を股縄で縦に割られた祐子が振り返ってバイクの目を見た。

「祐子、お願ひだ。ペニスをくわえてくれ」

苦しそうに首を振って喘ぐバイクに頷き、祐子の縛られた裸身が屈み込んで、ベッドの上にバイクの裸身を押し倒した。細い膝が曲がったまま、上を向いた股間に顔を埋め、祐子は萎んだままのペニスを口に含み亀頭に舌を這わせた。頭の上で、苦しそうなバイクの喘ぎが一層高まる。

「祐子、位置を変えてくれ。俺の口に祐子の尻を」

祐子が離れるとバイクは、両腕に力を入れて自分の身体をベッドの中央に運んだ。すかさず祐子がバイクの上に跨る。祐子の素早い動作に、股を割った縦縄が性器と肛門を鋭く苛む。

祐子はバイクの顔に尻を向けて両足を開いて立った。そのままバイクの股間に顔が入るようにして屈んで行く。ベットに膝を突き、尻を高く掲げたまま股間に顔を埋めた。舌先で小さなペニスを捲し当て、口に含んだ。祐子の尻に回したバイクの手が股縄を解く。そ

のまま両手で祐子の尻を割開き、狂おしく股間に舌を這わす。

二人の口と舌が、それぞれの官能の高まりを計りながら、目まぐるしくお互いの股間を舐める。喘ぎ声が錯綜し部屋に満ちた。

祐子の舌先で、バイクのペニスが動いている。ごく僅かな動きだが。柔らかな肉の塊が確実に膨張していた。後ろ手に縛られた手を固く握りしめて、一心に祐子はペニスを舌で愛撫した。バイクの全存在が今、私の口の中にあると確信した。私の中でバイクは変わっていくのだと思い、うれしさが全身を貫く。バイクの舌が這う股間が熱く燃え上がっている。

ペニスを遮断していた官能の隘路が、将に突き破られようとしていた。勝ち誇ったように奔流となって、熱い炎がペニスを内部から煽る。バイクの口を勝利の雄叫びが襲う。叫びはすべて祐子の股間に吸い込まれていく。いつの間にか怪しく振り立てられる祐子の尻に負けじとばかり、バイクも一心不乱に腰を使った。

未熟な二人の性が、官能の極みを演出しようとしていた。

ペニスをくわえ込んでいた祐子が口を離し、姿勢を正した。目の下に、細い両腿の付け根で大きく屹立したペニスがあった。十分に勃起して怒張したペニスは、バイクの全人格を象徴するように誇らしく直立している。

祐子はバイクを跨いだ膝を戻し、屹立したペニスに向かって正座した。姿勢を正してからゆっくりと身体を前に倒し、後ろ手に縛られた裸身のバランスを取りながら、顔をペニスに近付けた。猛々しく勃起したペニスの先を一回舌で舐め、愛おしそうに口に含んだ。
「ウーンッ」

有り余る満足感が声になってバイクの口から漏れた。

「バイク、私の中に射精して」

一言いって立ち上がった祐子は、向きを変えて身体を跨ぎ、バイクの顔を見下ろしながらペニスの上に尻を下ろして行った。

熱く濡れた祐子の股間に、更に熱いペニスが触れた。全身がスパークしたように震え、さらなる官能を求める。

びっしょり濡れた股間を固い肉の棒がしなやかに滑る。粘膜と粘膜が触れ合う隠微な感触に陶酔し、全神経が陰部に集まる。優しく体内に導き入れようとしても、勃起したペニスは意地悪く股間を滑り回る。じれったさがこみ上げ、後ろ手に縛られた両手が自由を求めて悶えた。

「手を使って」

目の下で固く目を瞑ったまま喘いでいるバイクに声を掛けた。

祐子の声が聞こえないのか、バイクは苦しそうに顔を左右に振り続けるだけだ。

「根性無しめ」

声に出さずにバイクを叱責した。この期に及んで赤信号はないと思った。たとえ正面衝突しようが、アクセルを一杯に踏みつけるのが男と女だ。私は遊びじゃない。

改めて姿勢を変え、直立したペニスの角度に合わせて尻を掲げた。開いたままの襖が気になったが、やるときはやるんだ。私は今夜、性の狩人になる。

出来る限り陰部の力を抜き、滑りやすい亀頭を肉襞で包み込んでから、静かに、慎重に尻を下ろしていった。

鈍い痛みが陰部に広がっていく、大きく空いた隙間を更に大きい巨大すぎる存在が、強引に埋めていく。巨大なペニスを付け根まで呑み込み、バイクの股間にぴったりと尻を着けると、何物にも代え難いほどの満足感が全身を支配した。そのままの姿勢でそっと息を吐く。下腹部を圧した存在の大きさが、まるで自分自身のように感じられ、醜く目を瞑ったままのバイクがなおさら愛おしくなる。ああ、私もバイクも変わったんだと、理由もなく実感した。

その時、バイクの口から獣の吼え声のような音が響き渡った。強い力で身体を捻る。後ろ手に緊縛された祐子の裸身がバランスを崩した。途端に、股間を満たしていたペニスが、逃げるよう引き抜かれた。

横を向いたまま泣き咽ぶバイクの股間で、震えるペニスの先からいつ果てるともなく、白濁した精液が滲み出していた。

「バイクの根性無し」

今度は大きく声に出して叫んだ。バイクの泣き声が一層高くなった。私の中で射精できないなんて、本当に根性無しだ。

鼻を啜っているバイクに縛った縄を解かせながら、祐子が冷たく言った。

「お風呂に入れるの。バイクの身体は臭かったわ」

全身を小さくしたバイクが黙って頷く。

「外から焚くんでしょう」

「今は大型のボイラーがある」

「じゃあ、毎日入らなくては駄目よ。今夜は私も一緒に入る」

言い捨てて祐子は、バイクをおいて風呂場に向かった。

ボイラーの温度を調節し、蛇口を一杯に開いて大きな湯舟に湯を入れた。もうもうと風呂場を被う白い湯気に包まれた裸身を、突然冷たい感覚が走った。バイクと一緒に暮らしているはずのお婆さんは何処にいるのだろう。湯気の中で白い肌が真っ赤に染まり、続いて全身に鳥肌が立った。襖を開け放したまま、明るい照明を浴びてあられもない姿態を晒したのだ。たとえバイクが、とてもなく非常識だったとしても、お婆さんが在宅ならばできない行動だと思った。やはり天田が心配したとおり、入院しているのかも知れないと思う。風呂に入っていなかったバイクのことも得心がいく。

祐子はやっと胸をなで下ろした。湯舟の湯ももう、七分ほどになっている。

「ずいぶん早く湯が入るだろう」

背後に声が聞こえ、素っ裸のまま車椅子に乗ったバイクが、照れくさそうな素振りで廊下から渡された板を渡って来た。

車椅子を車止めに乗り上げたが、一人で降りることができない。降りるための台がないのだから当然のことだった。祐子が手を貸して簀の子の上に下ろした。改めて裸身を見るとずいぶん汚れている。嫌な臭いも、また鼻を突いた。

こんな汚い裸身を抱いたのかと思うと、初めての体験が情けなくなるが、初めての体験を理由にきっぱりと無視する。

桶に湯を汲んで何杯も、バイクの頭から浴びせた。

滑らないように気を付けてバイクを支え、そっと湯舟に浸ける。頭全体が湯の上にあることを確かめてから、隣に入った。

二人とも黙ったまま目を瞑って温めの湯に浸かった。全身に沈殿した疲労を、ゆっくりと湯が揉みほぐしてくれる。

祐子は思いきって頭全体を湯に沈めた。髪が濡れてしまっても、家まで二分の距離だ、気にすることはなかった。

「いいな祐子は、思い切ったことができて」

今夜のことで皮肉を言われたと思った祐子は、濡れた髪を振ってバイクを睨んだ。

「俺なんて風呂に入るのは命がけなんだ。頭まで潜ろうものなら浮力でバランスを崩し、溺れてしまうかも知れない」

確かにそうだと思った。人の痛みが分からぬものは救われないと、自らの不明を恥じた。

「バイクも一人で大変ね。お婆さんは入院したの。退院するまで、私が毎日来てもいいのよ」

「いや、お婆さんは家にいるよ。ただ、俺の世話ができなくなった。まあ、風呂が困るくらいなもんだけどね」

湯ではてった祐子の背筋を、また冷たい感覚が掠めた。やはりお婆さんは家にいたのだ。確かめないまま高ぶりに任せ、バイクを誘った自分が、今更ながら恥ずかしくなった。まだ未熟なのだ。

悄然としてしまった祐子にバイクが声を掛けた。

「そろそろ上がろうか。二週間振りの風呂で熱くなってしまった」

湯舟の中でバイクを支え、簀の子に上げてから祐子も上がり、造り付けの棚からバスタオルを取ってバイクの全身を拭った。ざっと自分の体を拭いてから、バイクを車椅子に乗せ、廊下に出る。二人とも素っ裸のままだ。祐子は、いつお婆さんに出会うかと思うと、心配でならない。

真っ直ぐバイクの部屋に入ろうとすると「待って」と押し止められた。

「祐子、このまま廊下の先まで行ってくれないか。お婆さんに会って欲しいんだ」

非常識なバイクの言葉に、祐子の裸身が怒りに震えた。たとえセックスをしたからといって、素っ裸のまま家族に会わせようという心理が理解できなかった。

「いやよ。どんな格好か見てから言って」

「お婆さんは分かりはしない。むしろこの格好がいいんだ」

動じる風もなく、かえって真剣な声でバイクが答えた。

「そんなに、お婆さんは良くないの。駄目よ、びっくりして死んでしまうわ」

「もう、死んでいるんだ。死体に会うのはいやかい」

信じがたい言葉に全身が鳥肌立った。しかし、嘘ではないだろうと、鮮明になった訪問時の記憶が冷静に答えた。潜り戸を開けて、風呂場を通ったときに嗅いだ変な臭いの記憶だ。水道山の下の老人ホームで、第一ヴァイオリンの老女の死体から漂っていたのと同じ臭いだ。死臭だった。死の臭いがいっぱい、この屋敷に立ちこめていたのだ。知らずに祐子は裸身を晒し、官能を追った。知っていたバイクも同じ性の道を歩み、甦ったペニスから射精さえしたのだった。過ぎたこととはいえ、戦慄しないわけにはいかなかった。

「祐子、そのままの姿をぜひ、死んだお婆さんに見せて欲しいんだ。きっと喜ぶ」

過酷な言葉だった。いくら自分で求めたこととはいえ、これまでの日常と比べ凄まじい

ほどの変わりようだった。ここまで人は、変わってしまっていいものだろうかと思う。私はまだ、十五歳なんだ。

しかし祐子は、きつく歯を食いしばってから、鳥肌の立った裸身を震わせ、大きく息を吸って廊下の奥へ向かった。忘れることが出来ない、耐え難い死臭が、肺の奥深くまで入り込んでくる。

廊下の突き当たりの座敷の前で、車椅子を止めた。

無造作に手を伸ばしたバイクが、襖を一杯に開いた。強い死臭が鼻孔を打つ。

八畳の和室の中央に布団が敷かれ、薄い夏掛けを被って小さなお婆さんが横たわっているようだった。天井から吊った照明が弱い光を落としている。

バイクの車椅子の後に祐子も続いた。歩く度にチクリと股間を刺す、陰毛の剃り跡が辛うじて勇気を与えてくれる。

布団の横に車椅子を進めたバイクが、祐子を振り返った。

「夏掛けを全部剥がしてやってくれ。お願ひだ」

もう躊躇が許される場面ではない。言われるまま祐子は、夏掛けの端を持って一気に足下までめくった。

固く萎びきった、褐色のねじ曲がった死体が眼下にあった。強烈な臭いを別にすれば、人の死体とは見えないような屍だった。異国の神像が安置されているようにさえ見える。裸のまま、手を上に差し招くように延ばしている。肋骨の浮いた薄い胸で、萎みきった風船みたいに張り付いた乳房だけが生々しかった。

祐子は涙も出ない。突きつけられた圧倒的な死が、ただ深い悲しみだけを運んで来る。

「俺を風呂に入れた後、自分が着替えようとしている内に、突然倒れてしまったんだ。昼来たピアニストは心臓の発作らしいと言うが、無念だったと思う。俺のことを不憫がって、先には死ねないといつも言っていたんだ。無念さが死に顔に溢れていた。だから俺は、そのままにしていたんだ。不憫がられないように変われるかも知れなかつたんだから。どう足搔いても無理だったが、祐子のお陰で、もう独りでいられる。だからぜひ、お婆さんに会ってもらいたかったんだ。本当にありがとう」

祐子の頬を始めて涙が伝った。懸命に自分の道を求めるを得なかった、バイクのため流す涙だった。悲しすぎる人たちのために泣いた。

「訪ねて来たピアニストにお婆さんの死体が見付かり、明日、警察に届けることになった。もう会えなくなるかも知れないが、祐子のことは忘れない。俺は独りでいられるんだ」

「そんな勝手は許さない。お婆さんの代わりに毎日私が来る。バイクが自立するためにずっと協力する」

バイクの顔が苦痛に歪んだ。車椅子の肘掛けを両手で握り、力いっぱい身体を持ち上げた。剥き出しの股間で陰毛に埋もれていたペニスがむっくりと頭をもたげ、見る見るうちに固く勃起した。

「勝手な言いぐさだが、いつまでも祐子を素っ裸にして、股間を縛り上げているわけにはいかない」

確かにそうだと祐子も思う。チーフの言っていた協力の内容の陳腐さが今、痛い程良く分かった。

しかし、もう後に引くわけに行かなかった。帰るための橋など、初めから無かったのだ。死体を前にしたバイクは、独りでも生きていけるとは言ってはいない。お婆さんと同じ道を選ぶかも知れなかった。

後から後から流れる涙は、決して祐子の心を清浄にはしない。決まり切ったことだと心の中で言って、なおも祐子は泣き続けた。

薄く開いた目を眩しい光が打った。

祐子は綿毛布を頭まで被り、寝返りを打ってベットにうつ伏せになった。全身が気だるかった。特に、股間に鈍い痛みを感じる。

昨夜の記憶がすべて、一瞬のうちに甦った。あれほど様々なことがあったのに、今頭に浮かんでいるのは、なぜか風呂に浸かっている画像だった。

バイクと二人、広い木の湯舟に浸かっている。不思議なことに画像は、湯舟を真上から見下ろした画だ。ちょうど祐子の両の乳首のところまで湯がある。微かに波打つ湯面が、赤く染まった乳首を洗う。バイクの右手が伸び、左の乳首を摘んだ。耐えきれない疼きが下半身を襲い、祐子の裸身が震えた。

「バイクッ」

大きく声を出して、祐子は綿毛布から顔を出した。眩しさを我慢して目を細く開ける。ずいぶん日が高くなっている様子だった。タイマーでエアコンも止まり、暑い。

寝過ごしてしまったと、まだ覚め切らぬ頭で悔やみ、裸のまま飛び起きた。ベッドサイドの時計を見ると、もう十時を回っている。

慌てて窓辺に駆け寄り、カーテンを開けた。八月の暑い光が全身を打つ。

目を細めたまま織姫通りを見下ろす。道行く人もいない日曜日の路上に、二台のパトカーと、ワゴン車が止まっている。白と黒に染め分けた車体が不吉だった。急いで煉瓦蔵の隣の路地に目をやる。狭い路地を制して、黄色のロープが張られていた。

バイクの家に警官が来たのだ。

裸の背筋が冷たく震え、剥き出しの股間がキュッと締まった。一晩で伸びた陰毛が太股をチクリと刺した。

祐子は眉を寄せて、日陰になった路地の入り口を見つめ続けた。十分も見続けただろうか、不安な気持ちが募り、尿意が襲ったとき、路地から出て来た制服警官が黄色いロープを外した。続いて、車椅子に乗ったバイクが見えた。

バイクは背筋を伸ばし、正面を見ている。顔が影になっていたが凛とした瞳が光った。スポーツシャツを着た屈強な男が、車椅子を押している。後から数人の男が続く。男たちの中にピアニストの顔があった。

路上に出たバイクは、二人の男に抱がれて、大きく開いたワゴン車の後部ドアへと持ち上げられた。宙に浮いたバイクが顔を上げて祐子の窓を見た。一瞬だったが、悲しそうな視線を捉えることができた。きっとバイクが見た祐子の目も悲しそうだったはずだ。

バイクがワゴン車に消えると、ピアニストも同じ車に乗り込んだ。パトカーに先導されて、バイクの乗った車が去って行く。音の聞こえぬ路上の無言劇は、祐子の神経を痛め付けた。

フッと溜息をついて目を落とすと、真下の路上にオープンにしたMG・Fが止まっている。ぎょっとして煉瓦蔵を見る。路地からちょうど、紺のシャツに白いパンツ姿のMが出て来たところだった。立ち止まって祐子の窓を見上げる。反射的に身を反らせたが、多分Mに見られたと祐子は思った。全身が熱くなり、昨夜の官能の記憶が脳裏を走っていった。しかし、別に見られたからといって気にすることもない。Mは昨夜のことは何も知らない。

Mは記者なのだから、警察と一緒にいても不思議ではない。なにより、バイクのお婆さんは病死なのだ。警察が事情を理解してくれるのは時間の問題だと思った。

少し気持ちが楽になり、トイレに行こうとドアを開けてリビングに出る。突然脅迫するようにインターホンが鳴った。

バイクが連れて行かれてしまった今、訪ねて来る者はMしか思い当たらなかった。

予期したとおり、取り上げた受話器からMの声が響く。

「祐子、Mよ。ドアを開けて」

珍しく気ぜわしい声が、耳に飛び込んできた。窓越しに見られてしまったことを改めて後悔した。しかし、素知らぬ声で一応答えてみる。

「お早う、M。起きたばかりで、まだ着替えてないの」

「通りから見て知っているわ。裸のままでしょう。構わないから開けなさい。私しかいないから大丈夫」

何が大丈夫なのか分からぬが、いつもの強引さに叶う術はない。裸のままドアの前まで行って、錠とドアチェーンを外した。

大きくドアを開けて、外の熱気と共にMが入って来る。颯爽とした態度に頭が下がるが、ほんの少しのデリカシーに欠けると祐子は思う。だって私は裸なのだから、ドアは細目に開けて欲しい。もう、小学生ではないのだ。

そんな祐子の気持ちにはお構いなく、Mは勝手にリビングに通り、広いテーブルの前のソファーに座った。

「祐子も座りなさい。ちょっと話があるの」

素っ裸のままソファーの横に立った祐子に、Mが前の椅子を勧める。ここは私の家だと思い、ちょっと臍が曲がった。

「こんな格好でMに失礼だから、服を着ます」

「いいの。そのままでいて。もし裸が恥ずかしいのなら、私も脱ぐわ」

もう、抗う術はなかった。Mの前に、股間に両手を置いて浅く座った祐子の裸身を、じっとMが見つめる。

「祐子、昨夜付けていた素敵なネックチェーンはどうしたの」

思わず右手を首にやった祐子の負けだった。いつ取れたのか記憶もない。初めて付けたチェーンだったので、無くなっても違和感がなかったのだ。

「これでしよう。変わったチェーンだと思ったから、すぐ祐子のだと分かったわ。ストッパーが外れやすいのね」

Mが差し出したチェーンは、確かに祐子の物だった。

「ありがとう。Mの会社で落としたのね」

「いいえ。バイクの家の庭の植え込みに引っかかっていたわ」

見る間に祐子の裸身が赤く染まった。失語症になったように言葉が出ない。バイクの前で裸身を晒したとき、胸元で揺れていたネックチェーンの感触を思い出した。抗弁できることは、無くなっていた。今更しらは切れない。目の前に証拠があるのだ。

「私がマンションの前まで送った後、祐子はバイクの家に行ったのね」

Mが静かに言葉を続けた。恐ろしかった。受け取ったチェーンを握って股間に置いた手が、微妙に震えるのが分かる。

「まさか、庭まで行って帰って来たとは言わないでしょうね」

下を向いたまま祐子は小さく頷く。陰毛の剃り跡が惨めに見えた。

「そう、それじゃあ聞かせて。両手首と乳房に出来た縄の痕のことも聞かせて欲しいの」

見下ろした両手首に、確かに赤い縄目の跡が残っていた。バイクにあれほど厳しく緊縛されたのだ。見ることはできないが、乳房の上にも当然縄目の跡が残っているに違いない。

急に目から涙がこぼれた。警察官に曳かれて行ったバイクの、悲しそうな視線が頭をよぎる。祐子は号泣した。泣き続けながら途切れ途切れに、昨夜のことすべて話をした。

話し終わったとき、涙が止んだ。止むというより、涸れたといった方がよかった。洗いざらい話しきった後の爽快感が、鈍い痛みと共に下半身全体を被い、全身に伝わっていく。

私は変わったはずなんだと、その時思った。バイクも一緒に変わった。下半身に残る痛みが二人の旅立ちの証だった。

祐子は股間に置いた手を上げ、金のネックチェーンを再び首に飾った。

両手を昨夜のように後ろ手にして胸を張った。突き出た乳首がキュッと固くなる。股間に力を込めると、陰毛の剃り跡が太股を鋭く刺した。小さな勇気が湧いてきた。勇気はバイクと祐子の二人のものだ。今更、有ったことを無かったことにはできない。

祐子は泣き腫らした赤い目で、正面からじっとMの目を見つめた。

Mの瞳の奥に、悲しみが宿ったと思った。

「私は後悔していない」

はっきりと、Mの瞳に言った。

Mの肩が落ちるのが分かった。

「そう。バイクは警察に調書を作りに行ったわ。警視官は犯罪は無かったと断定した。後は連絡が遅れたことを申し開きするだけ。バイクは身障者だし、ピアニストが付き添って行ったから問題はないわ」

Mは淡々と取材したことを話した。死後二週間の間、放置されていた老婆のことは記事に出来ない。地域の新聞は、獵奇を追う週刊誌とは違う。

「それでは、バイクはじき帰れるのね」

背後で組んだ手を戻して、祐子が明るい声で言った。

「帰れないわ。施設でショートステーすることになる。ケースワーカーの天田さんが、お婆さんの埋葬の手続きをするから、葬儀の日まで帰らないわ」

今度は祐子の肩が落ちた。

「お葬式はいつ」

「明日か、その次の日」

Mが答えた後、長い沈黙が部屋に流れた。居たたまれなくなった祐子が、トイレに行くと言って席を立った。

祐子が戻ったときにはもう、Mの姿はリビングになかった。窓辺によって通りを見下ろすと、オープンにしたMG・Fが凄い速度で走り去って行くのが見えた。

Mが去って行ったのだと、改めて祐子は思った。小さな悲しみが心の端に湧いた。しかし、後戻りはできない。

Mの涙に霞んだ目に、天満宮の大きな鳥居がぼやけて見えた。織姫通りが途切れるのだ。タイヤを鳴らして鋭く右に曲がった。ミドシップのエンジンが吼え、心地よいほどの切れ込みで車体がカーブを切る。強い横風が涙を吹き飛ばしていった。しかし涙は次から次にMの頬を伝った。

祐子が、バイクが、死んだバイクのお婆さんが、すべてが悲しかった。未熟な人たちが皆、思いも掛けぬ方向に流されていく。

死者の眠る家で、寒々とした裸身をからませ、意味のない官能を追う祐子とバイクの姿が脳裏に浮かぶ。悲惨だった。

「ウワー」

オープンのMG・FからMの叫びが、熱射に焼かれた古い町並みに流れた。

急ブレーキに車体が振動し、タイヤが泣く。道端でエンジンが切れたまま止まったMG・Fの小さなハンドルに突っ伏し、Mは号泣した。

何の用意もなく官能の世界に飛び出して行った祐子を、どうして引き留められなかったのかと、Mは悔やむ。祐子とバイクにセックスなど、初めから必要でなかったのだ。何故、二人の置かれた位置を、二人とも冷静に見つめることをしなかったのか。どう考えても、祐子とバイクは、プラトニックラブで十分だった。これから苦しい数年間を、共に生き抜ける道標にはなったはずだ。腹立たしさと情けなさがMの全身を交錯し、こぼれた涙が白いパンツに數え切れない染みを作った。

あってはならない性の仕組みを作り、誘蛾灯のようにバイクと祐子を誘ったクラブ・ペインクリニックの情景が目に浮かんだ。人の持つ苦悩のすべてを、性に帰結させようとする邪悪な仕組みだと思う。蟻地獄の底で待ちかまえている悪霊たちが演出した舞台だった。決して許せるものでなかった。

高ぶりに任せたMの感情の底で、凄い速度で落下していくバイクと祐子の幻影が救いを求める。

しかし、二人を押し止めることができるだろうか。

自由落下を始めた無重力の状態を、いつまでも続く自由と勘違いした二人が、必ずやってくる激突の時を認識できるかどうか不安だった。時間の問題だとMは思わざるを得ない。

滅びの時は、以外に近いと確信した。そして恐らく、私は二人に何もしてやれないまま、その時と立ち会うだろう。

いつしか涙も涸れきり、頭を焦がす熱射を浴びて、Mはいつまでもハンドルに突っ伏し

ていた。

制服でいいと言う母の言葉に逆らい、無理に買ってもらった黒のワンピースを着て祐子は狭い路地を歩いて行く。暑い風に乗って、香の香りが流れてきた。

二日振りに見るバイクの顔が、初めて見る玄関の内部に見えた。

玄関の中は日陰になっていたが、祭壇の他にはバイクと天田の姿しか見えない。寂しそうな葬儀だった。目頭が熱くなってしまう。

「あれっ、後輩は制服じゃないんだ」

場違いな天田の声が響いたが、無視して祭壇に一礼する。掲げられた写真はぼやけていたが、柔和な顔の老女が祐子に笑い掛けている。陰惨な屍の記憶が一散に消え去っていった。バイクが無理に会わせたくなった気持ちも分かった。

祐子は写真に微笑み返してから、香を焚いて手を合わせ、瞑目した。瞼の中でなお、老女は微笑み続けている。

「ありがとう、変な言い方だが喪服がよく似合う」

焼香の終わった祐子に、バイクが声を掛けて近付いて来た。

「バイクは制服が嫌いだから、この方がいいと思ったの」

「ありがとう」

バイクが同じことを言って、誘うように表に出た。

「バイク。喪主が動き回っては駄目だ」

天田が声を掛けたが、バイクは返事もしない。黙ったまま三メートル進んで、後ろに続いた祐子を振り返った。参列者のいない葬儀で諦めたのか、天田はそれ以上何も言わなかった。

「会えてうれしかったわ。施設にいるんですって」

黙ってバイクが頷いた。心なしか、表情が硬い。

「また会えるかしら」

言ってしまってから、不吉な言葉になったと後悔したが、返事はすぐ帰ってきた。

「いつものように週末に会えるさ。ちょうどその日は高等部のマラソン補習が始まる日なんだ。ぜひ、祐子に高等部を見て欲しい。午後六時半に高等部のキャンパスに来てくれ。一緒に学校を見よう」

「いいわ。バイクがあんなに好きだった高等部を案内してもらう。来年は私も進学するか

ら、やっとバイクの後輩になれる」

明るいバイクの答えに心が浮き立ち、浮かれ声で答えた。

「きっとだよ」

路地を入って来た参列者を認めて、念を押したバイクが玄関に戻って行く。

内心のうれしさを喪服に隠して、祐子は初老の参列者と擦れ違った。

週末が待ち遠しかった。

9 五年遅れの卒業

日射しは消えていたが、西の空は十分明るい。

町並みが続く果て、水瀬川の向こうに落ちた夏の日の名残を正面から浴びて、校舎の屋上にいるバイクの全身が赤く染まっている。

蒼白な顔に反射する赤い光が、玉の汗を美しく彩る。両腕に力を込め、肩の筋肉を盛り上がりさせて、バイクはフェンスの金網をよじ上る。

腕を交互に持ち上げる度に、曲がったままの両膝が揺れた。指に食い込む金網が痛い。フェンスの高さは二メートルはあった。

やっとの事でてっぺんに渡した鉄パイプにぶら下がり、力を込めて懸垂した。全身から汗が噴き出す。

ようやく屋上に巡らせたフェンスから上半身を乗り出したら、反対側に下りる術がない。足で跨ごうとしても、不自由な下半身が冷たく無視する。

仕方なく、乗り出した胸元の下に両手を伸ばし、きつく金網を握りしめた。歯を食いしばり、上体にすべての力を集中し、鉄棒の逆上がりの要領で回転した。身体は上手く回ったが、金網を握りしめたまま返せない手首が、全体重を受けて激痛に泣く。とっさに両手を放し、落下する直前に体を捻って金網に縋り付いた。

背筋を恐怖が突き抜け、冷や汗が流れた。気持ち悪く揺れる下半身をフェンスに押し付けて揺れを防ぐ。首を曲げて地上を見ると、二十メートル下のキャンパスが静まり返っている。ちょうど真下に、置いて来た焼酎の瓶が小さく見えた。まだ落ちるわけにはいかない。

やっとの思いで屋上の端に腰掛け、背をフェンスに預けて一息つく。しかしうっくり休んではいられない。右手に巻いた腕時計は六時二十分を指している。後十分しかないのだ。バイクは、紫色に染まった西の空を見つめた。

地上近くにたなびいた雲が茜色に染まっている。豪奢な黄金色に包まれたいと思ったが、日を変えることなどできない。

一切を受容するのだと思いを固め、じっと瞑目する。

身体に張り付いた小さすぎる上着が暑苦しかったが、すぐに気にならなくなった。バイクが入学した年一杯で廃止になった、高等部の制服だった。制服嫌いだと思っている祐子

に、ぜひ一度、制服姿を見せたいと思ったのだ。

身体をゆったりとフェンスに預け、大きく息を吸った。静かな呼吸に合わせ、大空に飛び立って行く自分の姿が脳裏に浮かぶ。これがいい。

バイクは焦点を絞り、瞼の裏にイメージを投射させる。

今の姿のままのバイクが、薄暮の空間を紫に輝く西の空を目指して、飛び立って行くのが見えた。飛翔する姿は車椅子の上になく、ポッカリと宙に浮かんでいた。曲がったままの膝と貧相な下半身が、回復しない歩行を思い出させる。しかし、その全身は自由を謳歌している。軽くなつた心が、思い通りにならない肉体と悩みを、そっと宙に持ち上げてくれたのだ。ただ、有り余る夢の過剰が、下半身に重く垂れ下がっている。ああ、もっと自由になりたい。もっと、もっと。

こみ上げる願いがペニスの先に集まる。既に分かれ切っている官能の回路を伝い、一切の欲求が解き放たれ、奔流となって一点に集中する。

萎びきつたペニスの奥で、素っ裸のまま後ろ手に縛られ、大きく股間を広げた祐子の顔が笑っている。剃り上げられた陰部で性器が震え、肛門が喘いだ。

「ありがとう」と万感の思いを込めてつぶやくと、ペニスの内部が沸き立ち、見る間に膨張する。

猛々しく勃起したペニスにたまらない満足を感じ、バイクは目を開き股間を開けた。

黒々とした陰毛の間から屹立したペニスが、頬もしいまでに反り返って輝いている。バイクの全身がうれしさに戦く。もう、すべてが許されたと思った。

西の空にはもう、ほんのりとした明るさしか残っていない。一日の終わりが訪れようとしていた。バイクは上着のポケットから細いスチール線を取り出す。楽器店で買ったばかりのギターのA線だった。

細く強靭な弦を延ばし、慎重に勃起したペニスの根元を縛り上げる。晴れ晴れとした痛みが股間を突き破りそうだ。

余った弦を延ばして、背後のフェンスに結わえつけた。

上着の内ポケットから四つに折り畳んだ、白い画用紙を取り出し、胸ポケットに入れる。準備は終わった。

根元を縛られたペニスが狂おしい存在感を主張し、赤黒く変色していく。しかし、開放することはできない。晴れがましい顔で、下を見下ろす。

高等部のキャンパスには誰もいない。

さあ、祐子。早く来てくれ、卒業式の準備は終わった。

祐子は、織姫通りから命門学院高等部に向かう道路の信号が青になるのを待った。

交差点を渡って、十分も歩けばキャンパスに着く。

祐子はイライラしながら、赤信号を見つめる。胸元の赤いリボンに無意識に手を掛け、形を整える。遅れそうだった。私服で来れば良かったと思う。

わざわざバイクの嫌いな中等部の制服に着替えたために、時間を失ったことが悔やまれてならない。

高等部とはいっても命門学院だった。中等部に在学している祐子が、私服で登校するわけにはいかないと思った。高等部の教師が何人も、講師として中等部で教えていたのだ。

ただの日常に負けて、祐子は制服を着た。情けなさが込み上げて来る。わざわざバイクの家の玄関先まで行って、バイクがいないかと確かめたことさえ今は愚かしい。高等部で待ち合わせを約束した車椅子のバイクが、誰もいない家にいるはずもなかった。

織姫通りの車両が止まると同時に、祐子は信号も確かめずに通りを横断した。すかさずクラクションを鳴らされ、ぎょっとして右手を見る。タイヤを鳴らして右折してきたオーブンのMG・Fが祐子の前を掠め、三メートル先の歩道沿いに止まった。

運転席から振り返ったMが、怪訝そうな顔で祐子を見つめている。

とにかく、遅刻しないことが先決だった。

MG・Fに駆け寄って、助手席に滑り込んだ。

「お願いM、命門学院の高等部まで乗せて行って」

「いいわよ。でも、何をそんなに急いでいるの。信号の変わり鼻は右折車に注意しない」

もう、説教はたくさんだった。祐子は直截に事情を話す。

「バイクが高等部を案内してくれるの。でも約束の時間に遅れそうなの。早く車を出して」

いつも素早いMが、車を発進させない。意地悪をされているような気がしてくる。

「急ぐことはないわ。車なら二分よ。確か高等部は今日、マラソン補習の初日でしょう。気が向いたら夕食時間を取りしようと思っていたところよ。そんな日に、バイクが学校を案内するって言ったの」

「そう。約束したの。六時半にキャンパスで会うのよ。早く行って欲しいの、遅れたくな

い」

Mは黙ったままハンドルを握っている。苛立つ祐子を無視して、ぽつりと不吉なことを言う。

「行かない方がいいと思う。嫌な予感がするわ。今日は校内を案内できるはずがないのよ」

怒りに顔を赤く染めた祐子が、ドアに手を掛けた。

首を左右に振ったMが、思い切りアクセルを踏み込む。

「バカッ」

Mの声がエンジンの轟音に混じった。祐子の捻ったままの身体がシートに張り付く。凄まじい加速でMG・Fは、車両の途切れた道を疾走した。頭上を駆け抜ける風が、二人の長い髪をなびかせていく。

やはり、私が付き添って行った方がいい。また嫌な予感が胸を掠め、Mはアクセルを踏む右足に力を入れた。

真っ赤なMG・Fがタイヤを鳴らして校門に飛び込んで行った。

人気ない正面キャンパスの中央で急停車する。

目の前の四階建ての校舎の屋上に座り込んだ男の姿が、Mの視界の端に映ったのだ。

エンジンが止まり、静けさの戻ったキャンパスに、頭上から大声が響いた。

「ユウコッ、高等部にようこと。来てくれて本当にありがとう」

バイクの声で頭上を見上げた祐子が、素早くキャンパスに降り立って叫んだ。「バイクッ。降りてきて」

「祐子、今日は僕の卒業式だ。保護者同伴で来てくれてありがとう。コングラツチューション。グラジュエーション」

自分で「卒業おめでとう」と叫んだバイクの身体が、ふわりと宙に浮いた。

祐子の口に、声にならない叫びが溢れた。

Mの口が苦渋に歪む。

「ウォッ！」

猛り立つ獣の唸りがバイクの口を突き、激しく落下した身体が一瞬止まった後、音もなく墜落した。

祐子とMの足下に衝撃が伝わる。足を絡ませながら祐子が、十メートル先のコンクリー

トの地面に急ぐ。

尻を視野の中央に据え、Mが大声で祐子の背に呼び掛けた。

「行っちゃ駄目」

呼び掛けながら、Mも走る。

祐子は、ぐったりとしたバイクを抱え起こそうとする。頭の半分が碎けた死体に縋り付いた真っ白なセーラーの胸が、見る間に血で赤く染まる。その頭上に、ちっぽけな肉片が落下してきた。

金網のフェンスに繫ぎ止められたギターの弦から、ちぎり取られたペニスが落ちてきたのだ。

肉片と化した血染めのペニスは、バイクが置き去りにした焼酎の瓶の隣に落ちた。萎びきった肉片の横で、青い瓶だけが勃起している。

一瞬、わけが分からず呆然とした祐子が、ペニスを認めて「ヒー」と悲鳴を上げた。

バイクの尻を離して、よろよろと立ち上がる。

手と胸を赤く血で染めた祐子が、尻の傍らで全身を戦かせている。

祐子の手から離されたバイクは、残った顔の半分で空を見ていた。何物をも訴えることのない、無となった目が大きく宙を睨んでいる。Mは尻の前に跪き、右手でバイクの瞼を下ろした。上着の胸ポケットから飛び出している、白い画用紙を引き抜く。

背後から、事件を知って駆け付けて来るらしい、大勢の足音が聞こえる。

Mは画用紙を広げて目を通した。

読み終わると同時に、怒りが全身を突き抜けていった。

胸を張って祐子に近付き、画用紙を突き付ける。

祐子の震える手が紙を掴むと、Mはそのまま屈み込んで焼酎の瓶を握った。死に行くバイクが、今生の思いを込めて呑んだに違いない酒だった。バイクも祐子も悲しすぎた。

周囲を取り囲む高校生たちにお構いなく、瓶に口を付けて焼酎を煽った。喉を焼く悲しい酒が胃に収まったとき、Mはきびすを返して群衆を手で押し分けた。

「Mっ。何処に行くの」

立ち尽くしている祐子の、震える声にも振り返らず、はっきりと大きな声で言った。

「もう、あいつらを許さない」

黒のパンツとタンクトップのMが、喪服姿で斎場を後にする修羅のように、背筋を正してMG・Fに向かう。右手に下げた酒瓶が異様だった。

二、三歩Mを追った祐子が、手に持った画用紙に気が付きその場で広げた。黒のサインペンで書いた大きな文字が、画用紙一杯に躍っている。

卒業

俺の決心はついた。

桜の花は咲かない、梅の香もない

キヨウチクトウとヒマワリに彩られた卒業式だ。

五年遅れて俺は、

高等部を卒業する。

ありがとう祐子、

お前の入学まで待てなかつた俺を許してくれ。

そして、なお許し続けてくれるなら、

祐子が甦らせてくれた性を、

あの世で迷っているに違いない映子と、

共に楽しむことを許せ。

俺は祐子を利用したのではない。

祐子のお陰で生まれ変わって、今旅立つ。

今生の誠意の証に、

俺のペニスをもらってくれ。

身勝手だった。根性無しにもほどがある。あっけらかんとした涙が、初めて祐子の頬を伝った。

涙に気付いても、取り立てて悲しみも浮かんでこない。バイクはバイクなりに、やっと自分の道を見付けたのだと思った。

バイクは死に、私は生きる。一緒に生き方が変わった者同士、道が二手に分かれただけだと思う。ただ、二度と交差することのない道を行くだけだった。祐子は、決して、自ら死を選ぶことはないだろうと確信した。

誰しも、自分の死を自由に演出する権利はあるのだ。

自由に生まれ、自由に生きることが許されない人が、その死を自由に演出することは、素直に認めようと思った。バイクはあんなに気に掛けていた映子と、同じ姿で死ぬことができたのだ。まずは上々だと思わなければ可哀想だった。祝福して上げたいとさえ思う。

バイクの卒業は、決して早過ぎもせず、遅すぎもしない。彼自身が選択した結果だった。その道筋をクラブ・ペインクリニックが見出してくれたに過ぎない。

血相を変えて、クラブ・ペインクリニックに抗議に行ったに違いないMを、早く止めようと思った。

「後輩、何処に行くんだい」

Mを追おうと歩みだした祐子の腕を、小柄な少女が掴んだ。

バイクの遺書を読む祐子の背から、少女が熱心に覗き込んでいたことを祐子は知っていた。少女といつても命門学院高等部の三年生だ。祐子よりよっぽど大人の雰囲気を漂わせている。鮮やかな紫のスポーツシャツの下にホワイトジーンズを穿き、黒のバスケットシューズを履いていた。祐子に手を伸ばしたときに揺れたボブカット下で、耳朶の金のピアスが光っていた。

「歓楽街に行くんです」

「遠いから送っていくよ」

祐子の血で濡れた腕を平気で掴んだ少女が、平然と言った。

「だって、あなたは補習があるんでしょう」

「後輩のためにサボることにしたよ。私はチハル、呼び捨てにしていいよ。悪いけど、後ろから読ませてもらったんだ、祐子。さあ、行こう」

学校を振り返りもせず、取り囲む同級生たちを無視して、チハルは祐子の手を取って校門へと歩いて行く。お陰で祐子は、高校生たちの好奇な目を気にせずに学校を出られる。

校門を出たところで、遠くから救急車のサイレンの音が聞こえてきた。二日後には、バイクも灰になるのだ。

祐子の腕を掴んだまま横に並んで歩くチハルが、突然話し掛けた。

「祐子は、かっこいいところを見せ付けたね。あの男のチンチンをほんとにもらったんだね。羨ましいよ」

突飛なことを言って、構わずキャンパスの裏の方に歩いて行く。

「何処まで行くんですか」

街と反対の方角に、不安になった祐子が訊ねる。

「心配しなくていいよ。学校の裏に私のオートバイが置いてあるんだ。歓楽街なんて直ぐに行けるさ。歩けば四十分、バイクで五分」

笑って言って祐子の手を離した。

「血を洗ってから行った方がいいね。セーラーはどうしようもない。赤い模様だと思えばいいさ」

十分ほど歩いてから、小さなビルの地下にある、喫茶店の駐車場に止めてある 250 c.c. のホンダを指さす。

「私の愛車」

「すごい」

オートバイを見つめて祐子が言った。バイクがついに、二度と乗ることのなかったオートバイだ。

「クオターの嘘っぽちさ。でも速いよ。さあ、乗り出す前に、店で手を洗っていこう」
チハルの行きつけの喫茶店で手を洗わせてもらった祐子は、オートバイの後ろに跨った。
生まれて初めてのオートバイだった。

不安定な姿勢に不安を抱いたが、その不安を消し去るように、鋭い加速が全身を襲った。
下半身がピリッと痛んだ。

さようならバイク。私はあなたが乗れなくなったオートバイに乗って、自分の道をどこまでも行きます。

Mは風を巻いてサロン・ペインのドアを開け放った。

足早に自動ドアを通り、カウンターの前で両足を広げ、胸を張ってすくと立った。右手に下げた焼酎の瓶を前に突き出す。

カウンターのスツールにはママと天田が座っていた。中にはチーフとナースがいる。他に客はない。週末の夜は相変わらず、貸し切りで使われているらしい。四人の目が、凄い剣幕で入って来たMに注目した。

「たった今、バイクが校舎から身を投げて死んだわ。針金で縛ってちょんぎれたペニスを、お土産に持ってきてやりたかった」

怒りのこもったMの声に、ママが素知らぬ顔で答えた。

「あら、それはお気の毒ね。ここでは劣等生だったけど、学校では優等生だったという話だから、卒業できて良かったじゃない。その酒で通夜でもしようというの。あいにくうちは、持ち込みはお断りよ」

ママの長い返答に眉をしかめたMは、ゆっくりと突き出した酒瓶を上げて口に含んだ。そのまま床に酒を吹き捨て、大声を上げる。

「お前らが玩具にしたバイクの酒が飲めないのなら仕方ない。この店にたっぷり呑んでもらう」

酒瓶を振り上げ、思い切ってカウンターに投げ込んだ。

鏡が碎け散る大きな音が響き、酒瓶が碎け散った。棚に並べた様々な形のグラスが粉々に碎ける。飛び散ったガラス片が天田の頬に当たり、赤黒い血が飛び散る。天田の顔面が蒼白になった。

「何をするの、」

ママの悲鳴が店内に響く。

「この腐った店を潰してやるに決まっている。バイクと祐子の敵だ。二階の薄汚い舞台もひっくり返してやるから、よく目を開いて心の底から恥じ入れ」

言い終わる前にカウンターに走り寄り、スツールを掴んで別の鏡に力いっぱい投げ付けた。爽快な音と共に鏡が碎け散る。

「怪我をしたくなかったら、表に逃げ出しがいい」と言い捨て、隣のスツールをまた頭上

に振り上げた。

「こんな店、私も潰すわ」

興奮したチーフの声が響き、棚に並んだ酒瓶を手で払い落とした。

ブーンとアルコールの臭いが店を被う。ウイスキーが、コニャックが、ジンが、ウォッカが、混じり合った高価な酒の臭いが濃厚なカクテルとなって頭を狂わす。 フロアに向かって、チーフが次々に酒瓶を投げる。心地良い音を立て、フロアの壁や床で酒瓶が砕けた。

我に返ったナースがチーフを後ろから羽交い締めにして、カウンターに押し付けるのが見えた。天田が腰にしがみついて来るのを構わず、振り上げたスツールを残った鏡に投げた。鏡が砕け散る小気味よい音に混じって、後ろの首筋に痛烈な打撃を受けた。消え失せていく意識の中で、膝から崩れ落ちる視界に、ママが右手に下げた、白いお絞りを巻いたビール瓶が見えた。

Mの首筋をビール瓶が直撃したのだ。

赤と黒を斜めに染め分けたサロン・ペインの看板灯の前に、祐子とチハルはオートバイのエンジン音を轟かせて乗り付けた。

看板灯には明かりが点っていなかったが、構わずドアの前に進む。

「凄いな後輩。中等部の制服でこんな店に入るのかい」

「Mが先に来ているのよ。MG・Fが止まっているでしょう」

赤いオープンカーを見たチハルが口笛を吹いた。

「祐子は本当に命門の中等部なの」

「間違いないわ。さあ、入りましょう」

「最高に楽しいよ。補習をサボって正解だった」

祐子に続いてドアに入ったチハルが、楽しそうに白い電話を叩いた。

自動ドアを通って店内に入った祐子が、果然として立ち止まる。後に続いたチハルが荒れ果てた店内を見回し、また口笛を吹いた。

「スゲーや。やくざの喧嘩でもあったのかな。それにしても酒臭くて咽せかえってしまう。煙草に火を点けたらきっと爆発するよ」と言っておどける。

カウンターの壁を飾っていた三面の大鏡はすべて砕け散っていた。スツールが散乱し、フロアのそこかしこに割れた酒瓶が転がっている。

「いらっしゃい。あいにく散らかっているけど。よかつたらゆっくりしていって欲しいな。
祐子」

背後のピアノの下から声が掛かり、二人が振り返ると、立ち上がったピアニストが微笑み掛けた。

笑い顔を見て緊張が解けた祐子が、ピアニストに挨拶する。

「今晚は、ピアニスト。この有様はひょっとしてMの仕業なの」

「僕も来たばかりで、詳しくは聞いていないんだけど、Mとチーフの共同作業らしいよ」

「Mは何処にいるの」

「みんな二階のクラブにいるよ。でも、行かない方がいい」

「行っては、いけないってこと」

「いいや、構わないけど。きっとびっくりする」

「もう慣れたわ」

「そう。変わった色の制服を着ているから、別に祐子の言葉を疑りはしない」

「バイクの血よ。死んだバイクが私と一緒に来たと思って」

ピアニストは何も答えない。祐子を見た目に悲しみの色が浮かぶのが分かった。しかし祐子は、同情も蔑みも拒んだ。

「こちらはチハル、私の先輩。こちらはピアニスト、名門学院出身の医者の卵」

静かな声で、ピアニストにチハルを紹介した。

「今晚は先輩、初めまして。後輩の祐子に、変わった先輩ばかり紹介されて光榮です。でも一人はもう、頭が半分潰れていた。やはり生きている方が素敵です」

興奮した声で挨拶するチハルに眉をしかめ、軽く頭を下げたピアニストは、ゆっくりピアノの前に座った。二人には何も答えず、ぽつりと「ピアノが無事で良かった」とつぶやき、鍵盤に両手を載せた。

指先から「エリーゼのために」が流麗に流れ出す。

「二人の素敵な後輩のために」

ピアニストの気障な台詞とピアノの調べを背に、二人は赤いドアを開けて階段を駆け上って行った。

二階のクラブのドアを開けて中に入った二人は、そのまま立ちすくんでしまった。

「スゲーヤ」

またチハルが口を鳴らし、下品な言葉をつぶやく。

目の前の舞台の上二メートルほどの高さで、二つの剥き出しの尻が宙に浮かんでいる。

縄で縛られた両手首と両足首を一つに合わせて、吊り下げられた素っ裸の女が二人、後ろ向きに並んで宙で揺れているのだ。

尻の上に続く二本の足は、それぞれ上に伸ばされた左右の手と一緒に足首できつく縛られ、まるで裸の蓑虫のように天井から吊り下がっている。

同じように剥き出しにされた二人の女の尻だが、その形はずいぶん違っていた。

一つは奇麗な丸みを持った豊かな尻で、白桃のように開いた深い尻の割れ目の奥に、燃え上がる陰毛に包まれ、ひっそりと息づく陰部を覗かせている。陰惨に吊り下げられたMの尻に違いなかった。豊満な裸身が意識をなくした物体のように力無く宙で揺れている。

Mの隣に吊り下げられた尻は、小振りでスリムな形態を晒していた。浅い臀裂からは、隠しようもなく蠢く肛門と、無毛の割れ目に突き立つ性器までが、無惨に露出している。苦しい姿勢に吊り下げられた口からは、頻りに呻き声が上がった。舞台ではかつて、演じたこともない吊り責めに苦吟するチーフだった。

同じ吊られるなら逆さまでも開脚でも、いくら残虐に見えても、筋肉に負担のこない吊りの方が余程楽だった。

左右の手首をそれぞれの足首で縛り合わされ、別々に天井から降りたフックに掛けられたため、太股の裏の筋肉に絶え間なく苦痛が走る。腕よりも足の方が長いため、膝は逆立ちで中腰になったまま曲がっている。過酷すぎる責めだった。

おまけに、捕らえられた獣が四つ足を一つにして吊り下げられたような屈辱感を、責められる者に与え続ける。確かに、見ようによっては剥き出しの尻がぶら下がったユーモラスな眺めだった。おまけに尻の割れ目が丸見えなのだから、恥辱はなおさらにも募る。

S・Mショーの演技に慣れたチーフでさえ、恥ずかしさに全身を赤くしていた。

いつの間にか二階に上がって来たピアニストが、祐子の横に並び肩に手を載せた。祐子の身体がギクッと震える。

「やっとMらしい姿になった。僕の家にいた三か月間、Mは毎晩、あんな格好で楽しんでいたんだ」

ピアニストの信じられない言葉に、祐子はじっとMの裸身を見た。しかし、正面の鏡に映ったMの頭は、だらんと下がったままで、目も瞑っている。

「ママ、もう二度としないから許して。こんな恥ずかしい姿は耐えられない」

苦痛に耐える、やるせない声でチーフが力無く訴えた。

チーフの哀願を無視したママが、手にした鞭を大きく振りかぶった。ピシッ、チーフの白い尻で鞭音が響く。剥き出しの尻の割れ目に沿って赤いミミズ腫れが走り、「ヒィー」と尾を引いた悲鳴が口を突いた。宙に浮いた裸の蓑虫が揺れ、隣に吊されたMの腰に尻が当たる。

「ウー」と唸って、Mの裸身が揺れた。

ママが右手に持った鞭を一閃させて、今度はMの尻を打った。尻に走った痛みに首を振って、Mが目を見開く。

目の前の大鏡に、逆立ちになった裸像が映っていた。長い髪が床へ垂れ下がっている。隣に吊り下がっているチーフの苦痛に歪んだ顔が見えた。チーフの目が救いを求めて、Mに注がれている。視線を変えると、反対の鏡に映った像が見える。並んで宙に吊り下げられた大小二つの尻が、ユーモラスにぶら下がっていた。ひどい結末になったものだとMは思う。赤い鞭痕の残った尻の隣に、三人並んで立ったピアニストと祐子、見知らぬ少女の姿を認めた。ピアニストの右手が祐子の肩に載っている。

再び鋭い鞭が尻を襲った。痛烈な痛みと共に情けなく裸身が揺れ、鏡に映った画像が消えた。きつく目を閉じ、歯を食いしばって痛みに耐える。天井から吊られた、伸びきった手と足が痛い。チーフの腰に身体が当たり、肌が触れ合う感触が淫らだった。

「Mはしぶといね。チーフと違って泣き声一つ出さない。責めがいがあるよ」

憎々しく言ったママが、頬から血を滲ませている天田を振り返った。

「天田さん。ほっぺを切られたお礼をしてやったら。私はチーフにお仕置きをしなければならない」

目をぎらつかせている天田に皮鞭を渡したママは、ナースからしなやかな乗馬鞭を受け取る。

「まったく勝手なことばかりして。チーフ、身に滲みるまで懲らしめてやるから覚悟しな。さあ、天田さん、私に続いて交互に打つのよ」

Mの尻の前に立った天田と並んで、ママが一步踏み出して鞭を頭上に構える。

意地悪くチーフの尻の割れ目を狙って、鞭を振り下ろした。大柄のママが頭上から振り下ろした鞭先が、チーフの肛門をしたたかに打った。

「ヒィー」

苦痛に震える悲鳴が部屋に響き渡り、白い尻が左右に揺れる。

ママに変わって天田が前に進み、Mの尻に鞭を見舞った。初めての鞭打ちにしては上手に決まり、豊かな尻に赤い筋が走る。しかし、歯を食いしばったMの口からは声一つ洩れない。

十数回、交互にMとチーフの尻を打った天田とママは、大きく息を吐いた。

「なかなか面白いもんだねママ。病みつきになりそうだ。でも、Mの反応がないのでつまらない」

「そう、天田さんも治療の必要があるみたいね。うちのクラブに通うといいわ。もちろん有料でね。いい声で泣くチーフ相手なら、一発で勃起するわ」

尻を襲う鞭が途絶え、そっと目を開いたMの揺れる視線に、鏡に映ったチーフの顔が見えた。目の周りを涙で汚したチーフが、悔しそうに口を歪める。ママの言葉に、先ほどまでの哀願振りもなりを潜め、大声で叫んだ。

「私は役者なんだ。こんなS・Mショーは二度とやるものか。ママ、恥を知れ。セックスの切り売りなんかに、三文の値打ちもない」

「おや、チーフ。威勢のいいことを言うね。今夜はショージゃないよ。三文芝居の役者の根性を叩き直してやるのさ」

チーフがまた、悔しさに口を歪ませる。向かいの鏡に映った剥き出しの股間で、さんざん打ち叩かれた肛門が切なそうに蠢いた。黙っていられず、Mが叫ぶ。

「チーフは世界に羽ばたく役者よ。こんな腐った店には似合いはしない。臭い店を畳んで、都会のゴミ溜を漁っているのがあんたに似合いだ」

「へえ、Mも元気になったじゃないか。樂しみだね。二度と商売の邪魔をする気にならないよう、ゆっくり思い知らせてやるよ。私たちはこの道のプロなんだからね」

鏡の中で、右手に乗馬鞭を下げて仁王立ちになったママが、Mの尻の前に進んだ。

「さあ、ピアニスト。私たちの邪魔をする馬鹿な女を懲らしめてやろう」

鞭を差し出されたピアニストは黙ったまま、首を振った。

「相変わらずピアニストは澄ましているね。決していいことではないと思うけどね。じゃあ、祐子が打ちな。せっかく自分の進む道を決めることができたバイクに、泥を塗りに来た女だ。祐子の協力さえ、腹の中で嘲笑っている。自分が一番偉いと思っている女だ。思い知らせてやった方がいい。祐子も一人前の女になったんだろう。さあ、教えてやるがいい」

大股に近付いて来たママが、祐子に鞭を手渡す。

ピアニストの手の下で、祐子の肩が固くなり微かな震えが伝わってくる。肩に掛けた手に力を入れ、そっと揺すってやった。

下を向いていた祐子が顔を上げ、吊り下げられた二つの尻を見た。視線を変えて、鏡に映ったMの目を見つめる。

赤い鞭痕が無数に浮いた自分の尻の横に映る祐子の顔を、じっとMは見つめた。大きく見開かれた祐子の目に悲しみの色はない。すべてを自分で選び取ってきたという自信と、微かな不安だけが漂っている。この自信と不安が交互に、これから祐子の生に襲い掛かるだろう。もう後戻りはできないのだと、Mは思った。頭が熱くなり、吊り下げられた裸身全体を悲しみが被った。祐子が愛おしくてならない。

祐子の目に、Mの見開かれた瞳だけが映っている。Mの静かな黒い目に今、潮が満ちるように悲しみが溢れていく。手に持った鞭が重い。

「祐子、私を打ちなさい」

凜とした声が、耳を打った。

祐子は両足に力を込め、じっと歯を食いしばった。手に持った黒い乗馬鞭を握りしめる。鏡に映るMの瞳を見つめたまま、しっかりと足取りで前に進む。瞳が視界から消え、目の前の豊かな尻が大きく目に入った。鞭痕が浮き出た白い尻だ。冷静に裸の尻を観察する。

股間の奥に陰毛に隠された性器が蠢いている。まるで、祐子を誘うように性器は固く突き立っている。尻の割れ目では肛門が笑う。サーモンピンクの粘膜がつぼまつては開き、そっと手招きする。

「M、大好き。私もきっとMに続く」

心の中で宣言し、祐子は大きく鞭を振りかぶった。

鋭い音を立てて鞭先が尻の割れ目に食い込み、肛門から性器にかけてを手酷く打った。

「ヒッ、ヒー」

聞きようによつては歓喜に震える、かん高い悲鳴がMの口から溢れた。

何度も何度も、祐子は鞭を振るい、Mの揺れる尻を打った。予感していた涙も、ためらいも浮かばなかった。ただ、尻を打つ度にMと同じ痛みを、全身で感じ続けていることだけを願った。

「私にもさせて」

頓狂な声を出したチハルが天田に駆け寄り、手にした皮鞭を奪う。

隣で鞭を振る祐子に合わせ、剥き出しのチーフの尻を打った。

皮膚を打つ鞭の響きと、Mとチーフの悲鳴が、交互に室内を満たした。二つの裸の尻がぶつかり合って卑猥に揺れる。

「さあ、この辺でショータイムにしよう。祐子も、もう一人のお嬢さんもご苦労さん。カウンターから好きな飲み物を取って、飲みながらショーを見なさい」

祐子とチハルを追い立てるようにして間に入ったママが、ナースを呼んで言った。

「これからは大人の時間だから。ナースと天田さんに手伝ってもらう。ナースはスイッチを操作して、二人の尻を合わしてやって」

話しながら、赤く腫れ上がったMとチーフの尻を左右の手で撫で回す。

「汚い手をどけてよ」

チーフが吐き捨てるようになってしまった。

「まだまだ元気がいいね。もうじき嫌になるほど楽しめるから、期待しているといいわ」

声と同時に、二人の裸身を吊った天井のフックが動き出した。二つ並んでいた尻がゆっくり向きを変え、尻同士が向かい合う姿勢になった。なおもフックが動き、尻の位置を上下に調整する。

Mの尻とチーフの尻が中空で、卑猥な姿勢でドッキングした。

祐子の鞭を耐えた尻に、チーフの尻の暖かな感触が触れた。耐えられないほどに淫らだった。チーフの口から「ヒッ」と声が漏れる。

「さあ、二人を繋いで、ゆっくり楽しませてやろう」

ママが嬌声を上げると、ナースが五十センチメートルほどの曲がった棒を取り出す。弾力のあるシリコン製の棒だ。

Mが見た鏡に映った棒の両端は、怒張したペニスの形に模してあった。直径は四センチメートルほどもある。醜悪だった。確かにママはこの道のプロだと思った。呆れ果てて怒る気にもなれない。祐子とバイクのことを思い返すと、なおさら悲しみが溢れる。Mは静かに目を閉じて、陰惨な舞台進行を待った。

M同様、チーフも棒を見たのだろう。

「ヤメテッ」

逆さまにのけ反らせた首を左右に振って、力無い声で訴えた。

声を無視して、ママが冷たく位置を変えるように命じた。

「ナース、二人の尻を離して」

合図と同時に天井のフックが動き、張り付いた二つの尻が離れる。

「先ず、Mに入れてあげよう」

ママが股間に左手を伸ばし、粘膜を指で開く。右手に持った猛々しい人工のペニスが、Mの体内にゆっくり挿入される。

「よく使い込んであるんだね。簡単に入ったよ。さあ、もう片方をチーフに入れるから、二人で仲良く楽しみな」

チーフの口を短い悲鳴が突いたが、抗うことは出来なかった。向かい合った二つの裸の尻が、体内に挿入された一本の棒で繋がれてしまった。

「ついでにこれも入れてあげよう。サービスだよ」

笑いながら言ったママが、両端に玉の突いた長いマドラーを持って、尻の間に手を入れた。無造作にMの肛門を割ってマドラーを突き刺し、片方をチーフの肛門深く挿入する。片手でチーフの尻を軽く突いた。

チーフの裸身の揺れが、二本の棒を通じてMの体内で蠢く。隠微で淫らなショーが開幕したのだ。

「スゲーや」

ドアの前の元の位置に戻って、繰り広げられる残酷ショーに見入っていたチハルが下品な言葉を口にする。

祐子は黙ったままじっと、陵辱されるMの裸身に見入っていた。

両足の震えに気付き、股間に力を入れる。少し伸びてきた陰毛が、鋭く太股を突いた。呆然とした意識がしっかりとし、勇気が沸き上がってくる。

勃起したバイクのペニスを、根元までくわえ込んだ股間なのだ。

隣に並んで立ったピアニストが向きを変え、そっとドアを開けて階段を下りて行った。纖細な神経が、目の前の光景を許さないのかも知れないと祐子は思った。しかし、祐子は辱められるMの一切を見続けるつもりだ。

舞台の上では、吊り下げられた二つの尻が淫らに揺れている。傍らに立った天田がMとチーフの裸身に両手を伸ばし、フックに吊られた両腕の間で、二人の乳房を揉みしごいて

いる。

「ウッ、ウウウー」と、チーフの口から呻き声が洩れ始めた。逆さになった双臀が艶めかしく悶え、尻の割れ目が狂おしいまでに開かれていく。

逆立ちになって、固く閉じられたMの眉が、眉間に寄せられて震えだした。

祐子の視線の先で、閉じられた瞳が大きく開かれる。Mが祐子の目を見つめた。しつかりと祐子が視線を返す。

逆さまになったMの口元がにっこりと笑った。思わず祐子が微笑み返す。

「ウワッ！」

大きな叫びが突然、笑いかけたMの口に溢れ。直ぐさま恐ろしく緊迫した表情に変わった。宙に浮いたMの股間から多量の尿が吹き出る。太い濁がチーフの尻を打ち、飛沫が辺り一面に飛び散る。慌てて身をかわした天田が滑稽だった。続いてブリッと嫌な音が響き、尻の穴に突き入れられたマドラーが、黒い糞便と共に押し出されて落ち、チーフの肛門に垂れ下がった。糞便はなおも排出されるままに舞台に落ち、床一面に糞尿が溢れる。

「ナース大変、二人を下ろして。二階まで使いものにならなくなる」

動転したママの声が、部屋中に響き渡った。

「凄い臭いだ。鼻が千切れる」

隣のチハルが、鷹揚に鼻を擱んで見せた。

祐子はビクリともせず、Mの顔を見つめ続ける。

やっと目を開いたMが、また祐子に笑いかける。祐子が微笑みを返す。

Mはいつも戦い続けるのだ。そう祐子は思った。

私もMと違う場所できっと、戦い続けることになると祐子は確信した。

Mが私に戦い振りを見せてくれた。どんなに惨めだろうが、屈辱にまみれようが、ずっと戦いは続くのだ。

祐子の背筋を戦慄が走った。

階下から「エリーゼのために」が流れてきた。開け放されたドアから、ピアノの調べに乗ってカクテルになったアルコールの臭いがする。

Mを見習ったチーフが全身でいきみ、吊り下げられた尻を振って多量の糞尿を排泄した。淫らな性具が二人の股間から抜け落ち、糞尿の池に落下した。

「ちっとも恥ずかしくなんかないわ。こんなクラブは使えなくしてやる」

勝ち誇った声で、高らかにチーフが叫んだ。

揺れ動く裸身全体を耳にしてMは、階下から聞こえるピアノに聞き入った。

「もう、ショパンは弾いてくれないのね」

逆さまにのけ反った顔で、苦い笑いに歪む口元から小さく、つぶやきがこぼれた。その声を、祐子は聞き逃さなかった。

戦い続けるMの、静かな顔を見つめ続ける祐子の心の底に、初めて深い悲しみが込み上げて來た。

色々なことのあった夏休みが將に、終わろうとしていた。

完